

熊本県文化財調査報告第193集

せ と ぐ ち よ こ あ な ほ ぐ ん
瀬 戸 口 横 穴 墓 群
ふ か が わ い せ き
深 川 遺 跡

2001

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、平成9年度に、県道改良工事に伴い七城町瀬戸口横穴墓群と菊池市深川遺跡の発掘調査を実施しました。

瀬戸口横穴墓群は、総数約300基に達するとされる県下最大級の数の横穴墓群で、古くから注目を集めております。今回の調査において横穴墓13基を調査した結果、武具、装身具などの多数の遺物が出土しました。

また、深川遺跡の調査においては、掘立柱建物群や住居址などを確認し、古代及び中世の貴重な資料を得ることができました。

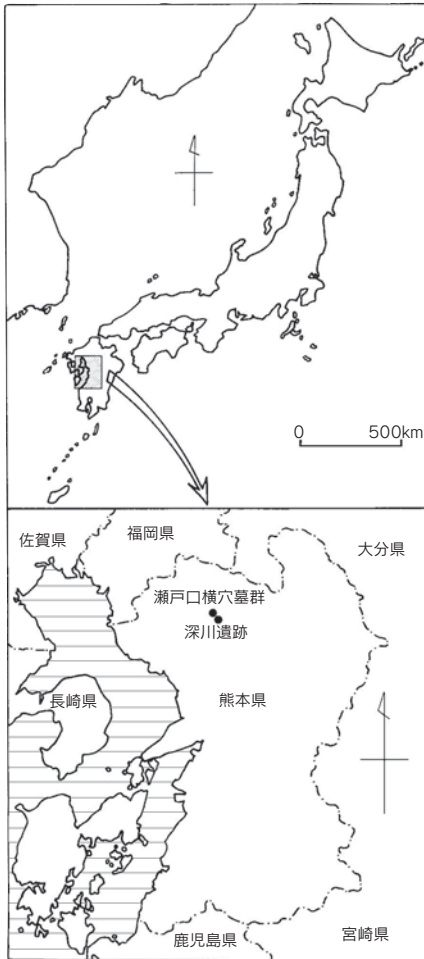
これらの調査成果が学術的資料としてのみならず、多くの皆様の、埋蔵文化財保護に対する理解を深めていただくための資料となれば幸いです。

最後に、調査の円滑な実施に御理解と御協力をいただいた関係機関、調査に対する指導、助言をいただいた諸先生方、並びに地元の方々に対して厚くお礼申し上げます。

平成13年3月31日

熊本県教育長 田中力男

例 言



第1図 遺跡の位置

- 1 本書は、熊本県菊池郡七城町台所在の瀬戸口横穴墓群及び熊本県菊池市西寺・大淋寺所在の深川遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 両遺跡の調査は、熊本県土木部の依頼を受けた県道改良事業（植木インター菊池線・熊本菊鹿線）に伴う緊急発掘調査として、平成8年度から平成9年度に熊本県教育庁文化課が実施した。
- 3 発掘調査は、瀬戸口横穴墓群については、主として、本山千絵、北原美和子が担当して帆足俊文が補佐した。また、深川遺跡については、園村辰実、村崎孝宏、濱田彰久、帆足、本山、北原、荒木聖子が担当した。
- 4 発掘調査現場での実測及び写真撮影は、調査担当者が主に行った。また、瀬戸口横穴墓群の写真撮影は、山田大輔の援助を得た。
- 5 遺物の実測は、帆足、知名石陽子、杉井涼子、村田百合子、田上瑞恵が担当し、石鏃については、実測及び製図を村崎が担当した。その他の遺物製図及び遺構製図については、知名石、杉井、田上、上山光美、村田が担当した。なお、深川遺跡出土の陶磁器類の所見については、竹田知美の教示を得た。
- 6 瀬戸口横穴墓群出土の鉄器、装身具類についての保存処理については、主として三木ますみが担当した。また、これらの遺物の成分分析にあたっては、三木の主導のもと、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、福岡市埋蔵文化財センターの御協力を得た。同時に、池田朋生の協力を得た。
- 7 遺物写真撮影は、村田が担当し、杉井、田上が補佐した。
- 8 出土遺物は、熊本県文化財収蔵庫に保管している。
- 9 本書の執筆、編集は、熊本県教育庁文化課で行い、帆足が担当した。

凡 例

- 1 本書に使用した両遺跡の位置図に示している座標値については、国土調査法施行令第2条及び別表第1に既定する平面直角座標第Ⅱ系における座標値 $(X, Y) = (18700, -19000)$ を起点としたものを利用している。
- 2 本書に使用したレベル (L=) は標高を表し、方位は座標軸を基準とした座標北を示している。
- 3 遺構実測図の縮尺については、現地では1/20で実測した。第26図、第57図の遺物出土状況の実測図については、1/10で行った。なお、遺構配置図及び地形図については、その都度、任意の縮尺で実測した。
- 4 遺構については、調査時に確認できた遺構から順に番号を振っていった。瀬戸口横穴墓群については、1号墓から13号墓とした。深川遺跡については、遺構の番号は頭に記号を付すことで表した。記号は以下の通りである。

SH: 竪穴式住居 SB: 掘立柱建物 SX: 不明遺構 SD: 溝 SP: 土坑

- 5 遺構の深さについては、特に断りがないものは検出面からの深さである。

「瀬戸口横穴墓群 深川遺跡」 目次

序文 例言

第Ⅰ部 瀬戸口横穴墓群

| | |
|---------------|----|
| 第1章 調査経過 | 3 |
| 第1節 調査経過 | 3 |
| 第2節 調査組織 | 4 |
| 第2章 環境 | 5 |
| 第1節 自然 | 5 |
| 第2節 歴史 | 5 |
| 第3章 調査成果 | 11 |
| 第1節 立地 | 11 |
| 第2節 分布と概要 | 12 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物 | 14 |
| 1 1号墓 | 14 |
| 2 2号墓 | 22 |
| 3 3A号墓 | 24 |
| 4 3B号墓 | 24 |
| 5 4号墓 | 24 |
| 6 5号墓 | 26 |
| 7 6号墓 | 28 |
| 8 7号墓 | 29 |
| 9 8号墓 | 31 |
| 10 9号墓 | 40 |
| 11 10号墓 | 40 |
| 12 11号墓 | 44 |
| 13 12号墓 | 50 |
| 14 その他 | 51 |
| 第4章 総括 | 52 |
| 第1節 立地と構造 | 52 |
| 第2節 埋葬 | 57 |
| 第3節 出土遺物 | 58 |
| 第4節 まとめ | 59 |

第Ⅱ部 深川遺跡

| | |
|---------------|----|
| 第1章 調査経過 | 63 |
| 第1節 調査経過 | 63 |
| 第2節 調査組織 | 64 |
| 第2章 調査成果 | 65 |
| 第1節 立地 | 65 |
| 第2節 概要 | 65 |
| 第3節 検出遺構と出土遺物 | 65 |
| 1 I区の調査 | 66 |

| | | |
|--------|-----------|----|
| 2 | Ⅱ区の調査 | 69 |
| 3 | Ⅲ区の調査 | 70 |
| 4 | Ⅴ区の調査 | 77 |
| 第3章 総括 | | 83 |
| 第1節 | 調査区と周辺の遺跡 | 83 |
| 第2節 | 検出した遺構 | 83 |

挿 図

第 I 部

- 第 1 図 遺跡の位置
- 第 2 図 周辺遺跡分布図
- 第 3 図 瀬戸口横穴墓群位置図
- 第 4 図 横穴墓配置図
- 第 5 図 横穴墓の部分名称
- 第 6 図 1 号墓実測図
- 第 7 図 1 号墓出土遺物分布図
- 第 8 図 1 号墓出土遺物 (鉄器)
- 第 9 図 1 号墓出土遺物 (装身具)
- 第 10 図 1 号墓出土遺物 (土製丸玉)
- 第 11 図 1 号墓出土遺物 (ガラス小玉)
- 第 12 図 2 号墓実測図
- 第 13 図 2 号墓出土遺物 (鉄製品)
- 第 14 図 3A 号墓実測図
- 第 15 図 3B 号墓実測図
- 第 16 図 4 号墓実測図
- 第 17 図 4 号墓出土遺物 (鉄製品)
- 第 18 図 5 号墓実測図
- 第 19 図 6 号墓実測図
- 第 20 図 6 号墓出土遺物 (鉄器)
- 第 21 図 7 号墓実測図
- 第 22 図 7 号墓出土遺物 (ガラス玉)
- 第 23 図 7 号墓出土遺物 (鉄製品)
- 第 24 図 8 号墓実測図
- 第 25 図 8 号墓出土遺物分布図
- 第 26 図 8 号墓遺物出土状況
- 第 27 図 8 号墓出土遺物 (馬具)
- 第 28 図 8 号墓出土遺物 (馬具)
- 第 29 図 8 号墓出土遺物 (鉄器)
- 第 30 図 8 号墓出土遺物 (装身具)
- 第 31 図 9 号墓実測図
- 第 32 図 9 号墓出土遺物 (鉄器)
- 第 33 図 10 号墓実測図
- 第 34 図 10 号墓出土遺物分布図
- 第 35 図 10 号墓出土遺物 (鉄器)
- 第 36 図 10 号墓出土遺物 (装身具)
- 第 37 図 11 号墓実測図
- 第 38 図 11 号墓出土遺物分布図
- 第 39 図 11 号墓出土遺物 (鉄器)
- 第 40 図 11 号墓出土遺物 (装身具)
- 第 41 図 12 号墓実測図
- 第 42 図 12 号墓出土遺物 (ガラス玉)
- 第 43 図 表採遺物 (耳環)
- 第 44 図 横穴墓一覧
- 第 45 図 横穴墓変遷図

第 II 部

- 第 46 図 深川遺跡位置図
- 第 47 図 調査区配置図
- 第 48 図 I 区遺構配置図
- 第 49 図 SB01～SB04 実測図
- 第 50 図 SB05, SB06 実測図
- 第 51 図 包含層出土遺物
- 第 52 図 II 区遺構配置図
- 第 53 図 SH01 実測図
- 第 54 図 SH 出土遺物
- 第 55 図 SH02 実測図
- 第 56 図 III 区遺構配置図
- 第 57 図 SK01 実測図
- 第 58 図 SK01 出土遺物
- 第 59 図 SD01 土層断面図
- 第 60 図 SD01 出土遺物
- 第 61 図 包含層出土遺物
- 第 62 図 V 区遺構配置図
- 第 63 図 SD09・10, SX13 土層断面図
- 第 64 図 SD10 出土遺物
- 第 65 図 SD10 出土遺物
- 第 66 図 SD10・14 出土遺物
- 第 67 図 SD10 出土遺物
- 第 68 図 SD10 出土遺物
- 第 69 図 SD10 出土遺物
- 第 70 図 SD10 出土遺物
- 第 71 図 表採遺物
- 第 72 図 SX13 実測図
- 第 73 図 SX13 出土遺物
- 第 74 図 SD09 出土遺物
- 第 75 図 SD14 出土遺物
- 第 76 図 SX15 出土実測図
- 第 77 図 SX15 出土遺物表

表

第 I 部

- 第 1 表 周辺遺跡地名表
- 第 2 表 1 号墓出土装身具観察表
- 第 3 表 1 号墓出土土製丸玉観察表
- 第 4 表 1 号墓出土ガラス小玉観察表
- 第 5 表 7 号墓出土ガラス玉観察表
- 第 6 表 8 号墓出土装身具観察表
- 第 7 表 8 号墓出土ガラス小玉観察表
- 第 8 表 10 号墓出土装身具観察表
- 第 9 表 11 号墓出土装身具観察表
- 第 10 表 11 号墓出土ガラス小玉観察表
- 第 11 表 12 号墓出土ガラス小玉観察表

第 II 部

- 第 12 表 遺物観察表

図版

図版1 瀬戸口横穴墓群調査区

- 1 調査区近景（北側）
- 2 調査区近景（南側）

図版2 瀬戸口横穴墓群出土遺物

- 1号墓出土遺物（装身具）

図版3 瀬戸口横穴墓群出土遺物

- 1 1号墓出土遺物（鉄器）
- 2 8号墓出土遺物（装身具）

図版4 瀬戸口横穴墓群出土遺物

- 1 8号墓出土遺物（鉄器）
- 2 8号墓出土遺物（馬具）

図版5 瀬戸口横穴墓群出土遺物

- 1 10号墓出土遺物（鉄器・装身具）
- 2 11号墓出土遺物（装身具）

図版6 瀬戸口横穴墓群出土遺物

- 1 11号墓出土遺物（鉄器）
- 2 4号墓出土遺物
- 3 7号墓出土遺物
- 4 2号墓出土遺物
- 5 6号墓出土遺物
- 6 表採遺物（耳環）
- 7 9号墓出土遺物
- 8 12号墓出土遺物

図版7 瀬戸口横穴墓群調査区

- 1 調査区近景（北側）
- 2 調査区近景（南側）

図版8 瀬戸口横穴墓群

- 1 調査区全景
- 2 1号墓
- 3 1号墓遺物出土状況

図版9 瀬戸口横穴墓群

- 1 1号墓右死屍床
- 2 2号墓
- 3 3A号墓

図版10 瀬戸口横穴墓群

- 1 3A号墓玄室
- 2 3B号墓
- 3 4号墓

図版11 瀬戸口横穴墓群

- 1 5号墓
- 2 5号墓玄室
- 3 6号墓

図版12 瀬戸口横穴墓群

- 1 7号墓
- 2 8号墓
- 3 8号墓玄室

図版13 瀬戸口横穴墓群

- 1 8号墓遺物出土状況
- 2 9号墓
- 3 10号墓

図版14 瀬戸口横穴墓群

- 1 10号墓玄室
- 2 11号墓
- 3 12号墓

図版15 深川遺跡

- 1 遺跡周辺
- 2 調査区

図版16 深川遺跡

- 1 V区
- 2 I区

図版17 深川遺跡

- 1 SB01～SB06（東から）
- 2 SB01～SB06（北から）
- 3 SD01（南から）

図版18 深川遺跡

- 1 SH01（南から）
- 2 SH01カマド完掘状況（南から）
- 3 SH01完掘状況（北から）

図版19 深川遺跡

- 1 SH02（南から）
- 2 III区遠景（東から）
- 3 作業風景

図版20 深川遺跡

- 1 SD10完掘状況（東から）
- 2 SD10土層断面（西から）
- 3 SD10遺物出土状況

図版21 深川遺跡出土遺物

- 1 包含層出土遺物
- 2 SK01出土遺物
- 3 SD01出土遺物
- 4 包含層出土遺物
- 5 SD10出土遺物（1）

図版22 深川遺跡出土遺物

- SD10出土遺物（2）

図版23 深川遺跡出土遺物

- SD10出土遺物（3）

図版24 深川遺跡出土遺物

- 1 SD10出土遺物（4）
- 2 SX03出土遺物
- 3 SD09出土遺物
- 4 SD14出土遺物
- 5 SX15出土遺物

第 I 部 瀬戸口横穴墓群

第1章 調査成果

第1節 調査経過

1 調査に至る経緯

県教育庁文化課が、平成7年度に県土木部に次年度以降の事業照会を実施したところ、県道熊本菊鹿線単県道路改良事業の計画について回答があった。文化課では、土木部からの回答に基づき、遺跡台帳照合をおこなったところ、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地瀬戸口横穴墓群の隣接地であることを確認した。しかし、当初の工事計画によれば、従来、確認されている横穴墓に影響はないと判断し、土木部に対して、慎重に工事を実施することと、あわせて、工事中に文化財と認められるものが発見された場合には、速やかに県教育庁文化課及び七城町教育委員会まで連絡するよう通知した。

工事は、平成8年6月から計画どおり着工された。7月に入り、現地を通りかかった文化課職員から、施工範囲内の崖面に横穴が認められるのとの連絡を受け、再度、現地を確認することとなった。県菊池土木事務所の立会いのもと、再度、現地を踏査したところ、崖面にあいている横穴が、瀬戸口横穴墓群のものであると判断される横穴墓であることを確認した。文化課では、この結果をもとに、土木部道路建設課及び菊池土木事務所と事後の対応を協議した。協議の結果、まず、現在、実施している道路脇の法面工事を一時中断すること。その上で、文化財の保存について最大限配慮することの2点が合意された。更に協議を重ねた結果、土木部からは、工事の性格上、法面工事は継続する必要があるが、掘削は必要最小限にとどめること。さらに、横穴墓を現状で残すことができる部分については保存することを。また、やむを得ず、破壊される部分に関しては、工事を再開する前、記録保存のための発掘調査の実施に対して協力するとの回答があった。

これらの協議を経て、横穴墓が滅失する範囲について、緊急発掘調査を実施することとなった。調査対象面積は500㎡、最終的に確認された横穴墓は13基である。

2 調査経過と調査方法

発掘調査は、平成8年7月10日に開始し、平成8年8月31日に終了した。

横穴墓群は、前述のとおり工事中に確認されたため、まず、対象地の現状を確認する必要がある。7月2日の現地踏査の結果、工事による掘削と崖面の崩落により、9基の横穴墓の存在を確認することができた。ただし、横穴墓群のあり方として、周辺の土砂が堆積している部分にも存在する可能性が高く、調査が必要な横穴墓の数は、若干増加するものと想定して、調査を開始した。

ほとんどの横穴墓群は、調査を開始する段階で、切土工事により一部破壊されて開口していたが、周辺には、掘削の残土と崖面の自然崩壊による土砂が厚く堆積しており、まず、それらを除去する必要がある。また、横穴墓が存在する崖面には竹や雑木が生い茂っており、これらの伐採も必要であった。

最初に、崖面に生えているこれらの雑木や竹を、工事用の機械を利用して横穴墓に影響がないように除去した。次に、横穴墓周辺に堆積している工事の残土と、崖面の自然崩壊による土砂の除去に着手した。これらの土砂については、横穴墓に関連する遺物が含まれる可能性があるため、人力による除去作業を実施し、現地で水洗作業をおこなった。これらの作業により、ガラス小玉等の微小な遺物を、多数検出することができた。ただし、横穴墓は、以前からの崖面の自然崩壊等によりすでに開口しており、ごく最近まで、内部を利用した形跡が認められた。したがって、これらの排土には、下部まで近現代の生活用品やゴミが多数混入していた。そのため、前庭部にあたる部分から出土した遺物については、当初の帰属を判断することは困難

であった。以上の状況から、これらの遺物については、その出土地点を、図面上では掲載していない。本報告書では、調査時に玄室内の埋土から出土して、他の横穴墓から混入した可能性が低いと判断した遺物についてのみ、図面上にその出土位置を掲載している。

第2節 調査組織

(1) 現地調査、平成9年度

調査責任者 桑山裕好（文化課長）
丸山秀人（課長補佐）
調査総括 松本健郎（主幹・文化財調査第2係長）
調査担当 帆足俊文（学芸員）、本山千絵（嘱託）、北原美和子（嘱託）
調査協力 稲津暢洋、鶴嶋俊彦、竹田宏司

(2) 整理・報告書作成、平成11年度（報告書印刷は、平成12年度）

整理責任者 豊田貞二（文化課長）
島津義昭（課長補佐）
整理総括 高木正文（文化財調査第1係長）
整理担当 帆足俊文（学芸員）、知名石陽子（嘱託）、杉井涼子（嘱託）
整理協力 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター、福岡市埋蔵文化財センター

第2章 環境

第1節 自然・地理

九州島は、日本列島の南西部に位置し、温暖湿潤な気候に恵まれている。熊本県は、その西側中部域に位置している。地理的には、三方を山に囲まれており、河川は、有明海が存在する西側へ流れるものが多い。

海に面した場所に広い平地が存在するため、気候的には、温暖湿潤で、内陸的な気候も加わった風土でもある。年平均気温は、平地で16℃以上であるが、夏季と冬季の寒暖の差は激しい。

降水量は、山地で2,000mmを越し、平野で1,800mm前後である。時期によっては、局地的な豪雨や多雨の現象がみられ、北部では、梅雨時に、南部では、秋季に雨が多い傾向がある。

菊池郡は、熊本県の北部、県北地域と呼ばれる地域に属する。東は阿蘇郡、西は山鹿市、鹿本郡、南は熊本市、北は菊池市に接している。七城町は、菊池郡の西部に位置する面積約20km、菊池市は、約183 kmの街である。

菊池市及び七城町の中央部には、東から西へ向かって菊池川流れ、その周辺一帯は広い菊池平野を形成している。菊池川は、菊池市街から、七城町、鹿本町、山鹿市を通り、三加和町、菊水町、玉名市を通過し、有明海へと至る。菊池川は、白川、球磨川とともに熊本県の三大河川と呼ばれ、その中で最も北側に位置する。菊池川が奔流する周辺は、装飾古墳をはじめとして、県内でも有数の遺跡の集中地帯である。

第2節 歴史

瀬戸口横穴墓群は、菊池郡七城町大字瀬戸口に位置する。

横穴墓群は、七城町北部のうてな台地の西側斜面に立地している。うてな台地は、内田川・木野川・迫間川に挟まれる台地である。標高は、約70～80mで、台地上は広大な平坦面が連続する。この台地上とその縁部には、東に袈裟尾丸山古墳等の古墳群が、西端部には、弥生時代の環濠集落であるうてな遺跡等の遺跡群が存在する。

うてな台地とその南側の菊池平野を中心とした遺跡を概観してみたい。

縄文時代の遺跡には、押型文土器が出土している西ノ平遺跡がある（註1）。竹の上原遺跡は、後期の住居跡が確認されている（註2）。岡田遺跡では、中期の遺物が出土しているとともに、弥生時代の複合遺跡である（註3）。西村上遺跡は、西側は縄文時代晩期、東側は平安時代を主体とする複合遺跡である（註4）。一本松遺跡は、後晩期の土器とともに勾玉が採集されている（註5）。七城町には、その他、岡田野寺遺跡、山崎遺跡、亀尾原遺跡、流川遺跡等が確認されている。その他、周辺の市町村においては、泗水町三万田東原遺跡、菊池市天城遺跡、同赤星福土・水溜遺跡、同医者どん坂遺跡等がある。三万田東原遺跡、天城遺跡については、それぞれ、三万田式土器、天城式土器の標識遺跡である。今回、発掘調査を実施した菊池市深川は、縄文時代～古墳時代の遺物が出土するとされている包蔵地である。

弥生時代の遺跡では、まず、先に述べたうてな遺跡が、大規模な環濠集落として注目される。うてな遺跡は、その他、古墳時代及び奈良時代・平安時代の遺構が確認されている（註6）。その他、岡田遺跡では、多数の甕棺墓群が検出され、その近隣には、支石墓の上石と思われるものが確認されている。水次遺跡では、甕棺墓35基と土抗墓28基が検出されている（註7）。周辺では、鹿本町津袋大塚遺跡・津袋甕棺墓群がある。菊池市では、袈裟尾遺跡、立石遺跡、神来支石墓等が主な遺跡として注目される。

第1表 周辺遺跡地名表

| 番号 | 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 指定 | 備考 |
|----------|------|----------|------------|-----------|-------|----------------|-----------------------------|
| 鹿本町(383) | 1 | 20 | 津袋甕棺 | 津袋 本村 | 弥生 | 埋葬 | 県 甕棺破片一括 |
| | 2 | 21 | 御霊塚第二号古墳 | 津袋 広江 | 古墳 | 古墳 | 県 円墳、奥壁に敷を描く |
| | 3 | 22 | 平原塚古墳 | 津袋 平原 | 古墳 | 古墳 | 県 もと円墳、風土を失い舟形石棺露出、津袋古墳群の一つ |
| | 4 | 23 | 御霊塚第一号古墳 | 津袋 広江 | 古墳 | 古墳 | 県 御霊隠穴古墳 |
| | 5 | 24 | 庄遺跡群 | 庄 太郎丸ほか | 弥生 | 埋葬 | 合口式12基、甕棺多数 |
| | 6 | 25 | 鹿本平野条里跡 | 庄 大草 | 古代・中世 | 生産 | 庄地区水田全面に及ぶ |
| | 7 | 26 | 津袋大塚 | 津袋 大塚 | 弥生 | 集落 | 弥生集落跡 |
| | 8 | 27 | 五社宮古墳 | 津袋 本村 | 古墳 | 古墳 | 県 津袋古墳群の一つ |
| | 9 | 28 | 津袋城跡 | 津袋 広江 | 中世 | 城 | |
| | 10 | 29 | 浦田横穴群 | 津袋 大塚 | 古墳 | 古墳 | |
| | 11 | 30 | 頂塚古墳 | 津袋 茶臼 | 古墳 | 古墳 | 県 津袋古墳群の一つ |
| | 12 | 31 | 五社宮裏横穴群 | 津袋 本村 | 古墳 | 古墳 | |
| | 13 | 32 | 頂塚墓地箱式石棺 | 津袋 茶臼 | 弥生・古墳 | 埋葬 | |
| | 14 | 33 | 平原寺跡 | 津袋 本村 | 中世 | 寺社 | |
| | 15 | 34 | 津袋 | 津袋 本村 | 弥生 | 包蔵地 | |
| | 16 | 35 | 光明寺跡 | 庄 小路 | 中世 | 寺社 | |
| | 17 | 36 | 泉幅寺跡 | 庄 小路 | 中世 | 寺社 | 町 二天及び古碑古塔 |
| | 18 | 63 | 内田川流域条里跡 | 高橋 古賀ほか | 古代～中世 | 生産 | 高橋全域に及ぶ |
| | 19 | 64 | 庄(銅銚出土地点) | 庄 太郎丸 | 弥生 | 包蔵地 | 町 広鋒銅銚、支石墓か、鹿本高校移管 |
| 菊鹿町(382) | 20 | 74 | 合勢古戦場 | 松尾 横枕 | 中世 | 軍事 | |
| | 21 | 92 | 竜口横穴群 | 木野 竜ヶ鼻 | 古墳 | 古墳 | |
| | 22 | 93 | 大林照蓮寺跡 | 松尾 (通称大林) | 中世 | 寺社 | |
| | 23 | 94 | 彰教禅寺跡 | 松尾 竜徳 | 中世 | 寺社 | |
| | 24 | 95 | 腰(興)掛松 | 木野 (通称迫) | 縄文～古代 | 包蔵地 | |
| | 25 | 96 | 木山城跡(木野城) | 木野 (通称迫) | 中世 | 城 | |
| | 26 | 98 | 頭台古墳 | 木野 頭台 | 古墳 | 古墳 | |
| | 27 | 99 | 竜口古墳群 | 木野 竜ヶ鼻 | 古墳 | 古墳 | |
| | 28 | 100 | 鞠智城跡 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 県 古代山城 |
| | 29 | 101 | 池の尾門礎石 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 鞠智城内 |
| | 30 | 102 | 馬こかしの石垣 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | |
| | 31 | 103 | 長者原礎石群 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 後世の築造、石垣あり |
| | 32 | 104 | 長者山礎石群 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 鞠智城内 |
| | 33 | 105 | 鞠智城少鑑殿礎石群 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 鞠智城内 |
| | 34 | 106 | 紀屋敷礎石群 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | |
| | 35 | 107 | 鞠智城盤座 | 米原 長者原 | 古代 | 祭祀 | 鞠智城内 |
| | 36 | 108 | 鞠智城水門跡 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 巨岩堆積、七五三縄信仰の対象とする |
| | 37 | 109 | 鞠智城わくど石 | 米原 長者原 | 古代 | 祭祀 | |
| | 38 | 110 | 鞠智城涼御所跡 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | 小高い丘、涼御所と呼ばれる建物跡か |
| | 39 | 111 | 鞠智城権現さん | 米原 長者原 | 古代 | 祭祀 | 祭祀遺跡、信祀 |
| | 40 | 112 | 鞠智城佐官殿 | 米原 長者原 | 古代 | 城 | |
| | 41 | 113 | 黄金塚古墳 | 米原 長者原 | 古墳 | 古墳 | 町 板状石、小口積み、単式石室 |
| | 42 | 114 | 龍徳鬼の籠古墳 | 松尾 龍徳 | 古墳 | 古墳 | 円墳、巨石をコの字 |
| 43 | 115 | 木山妙音寺跡 | 松尾 木山 | 中世 | 寺社 | | |
| 44 | 117 | 同田貫刀工屋敷跡 | 米原 (通称鍵掛松) | 中世 | 包蔵地 | | |
| 45 | 119 | 灰塚 | 米原 長者原 | 古墳 | 古墳 | | |
| 46 | 120 | 長者どん足型石 | 米原 長者原 | 中世 | 石造物 | | |
| 47 | 121 | 大門口 | 松尾 | 古代 | 城 | | |
| 48 | 122 | 長者井戸 | 米原 | 古代 | 城 | | |
| 49 | 123 | 鍵掛松古墳参考地 | 米原 | 古墳 | 古墳 | | |
| 菊池市(210) | 50 | 34 | 車町 | 野間口 車町 | 弥生 | 埋葬 | 甕棺4基 |
| | 51 | 35 | 南古賀 | 西寺 南古賀屋敷 | 弥生 | 包蔵地 | |
| | 52 | 36 | 西寺辻 | 西寺 辻屋敷など | 弥生 | 包蔵地 | 住居跡、土師器包含、弥生土器片・土師器片散布 |
| | 53 | 37 | 狐塚 | 長田 (狐塚) | 古墳 | 包蔵地 | 土師器 |
| | 54 | 38 | 水町 | 西寺 水町 | 古墳 | 包蔵地 | 土師器 |
| | 55 | 39 | 木柑子横穴群 | 木柑子 下向原 | 古墳 | 古墳 | 菊池川南岸、数十基、普通型、風化 |
| | 56 | 40 | 木柑子フタツカ古墳 | 木柑子 下向原 | 古墳 | 古墳 | 県 西向前方後円墳、県指定石人立つ(現地にある) |
| | 57 | 41 | 大塚 | 長田 (通称大塚) | 弥生～古代 | 埋蔵地 | 弥生後期土器、土師器 |
| | 58 | 42 | 大塚古墳 | 長田 (通称大塚) | 古墳 | 古墳 | 前方後円形、後円部金比羅社建つ |
| | 59 | 43 | 木柑子舟形石棺 | 木柑子 | 古墳 | 埋葬 | 市 段丘崖突出部に露出 |
| | 60 | 44 | 東浦田平横穴 | 木柑子 東浦田平 | 古墳 | 古墳 | |
| | 61 | 45 | 西迫間横穴群 | 西迫間 | 古墳 | 古墳 | 市 数基あった、現2基、出土品市指定 |
| | 62 | 46 | 光久庵跡 | 西迫間 | 古墳 | 寺社 | 市 本尊馬頭観音、開山は鎌金室大和 |
| | 63 | 47 | 堀切の長者の石 | 木野 (通称堀切) | 古代 | 石造物 | |
| | 64 | 48 | 迫間眼鏡橋 | 迫間 | 近世 | 建造物 | 市 |
| | 65 | 49 | 丸山古墳 | 架婆尾 丸山 | 古墳 | 古墳 | 茶臼塚北谷を隔てた丘頂、3段になる |
| | 66 | 50 | 茶臼塚古墳 | 架婆尾 茶臼塚 | 古墳 | 古墳 | 高塚西方丘陵端の破損墳 |
| 67 | 51 | 架婆尾高塚古墳 | 架婆尾 高塚 | 古墳 | 古墳 | 県 濠、円墳、横穴式、装飾文 | |

| 番号 | 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 指定 | 備考 |
|----------|------|-----------|----------|---------|-------|-----|---------------------------|
| 68 | 52 | 玉祥寺 | 玉祥寺 | 弥生 | 包蔵地 | | |
| 69 | 53 | 孔子堂跡 | 玉祥寺 | 近世 | 寺社 | 市 | 銅鉾、野辺田武士器、石斧出土 |
| 70 | 58 | 北田 | 隈府 上堀外ほか | 弥生 | 包蔵地 | | |
| 71 | 59 | 玉祥寺の梵鐘 | 玉祥寺 | 中世 | 石造物 | 県 | 隈府中学校庭遺跡(北中遺跡)も含まれる |
| 72 | 60 | 袈裟尾 | 袈裟尾 | 弥生 | 包蔵地 | | 梵鐘が県指定、宝篋印塔あり |
| 73 | 61 | 立石 | 隈府(通称立石) | 弥生 | 包蔵地 | | |
| 74 | 62 | 神来支石墓 | 野間口 神来 | 弥生 | 包蔵地 | | |
| 75 | 63 | 神来古墳 | 野間口 神来 | 古墳 | 古墳 | | |
| 76 | 64 | 九儀山大琳寺跡 | 大琳寺 | 中世 | 寺社 | 市 | 石室一部残る、巨大な扁平石使用 |
| 77 | 65 | 袈裟尾山北福寺跡 | 袈裟尾 | 中世 | 寺社 | 市 | |
| 78 | 67 | 堀切横穴群 | | 古墳 | 古墳 | | 五輪塔を含む |
| 79 | 68 | 菊池氏館跡 | 隈府 | 中世 | 包蔵地 | | |
| 80 | 69 | 竹ノ上原 | 袈裟尾 竹ノ上原 | 古代 | 集落 | | |
| 81 | 70 | 西村上 | 袈裟尾 西村上 | 縄文 | 集落跡 | | |
| 82 | 71 | 無料山西福寺跡 | 西寺 | 中世 | 包蔵地 | 市 | 布目瓦・土師器・須恵器・瓦器出土 |
| 83 | 72 | 赤星有隆の墓 | 西寺 水町 | 中世 | 墓 | | 西福寺境内墓地 |
| 84 | 73 | 長田 | 長田 中久保 | 弥生 | 包蔵地 | | 弥生土器片散布 |
| 85 | 74 | 外園 | 長田(通称外園) | 弥生 | 包蔵地 | 市 | 竪穴、弥生石器・土器多数、市指定貨泉出土 |
| 86 | 75 | 深川 | 深川 諏訪原 | 縄文～古墳 | 包蔵地 | | 糸痕文、御領式・野辺田式、土師器出土 |
| 87 | 76 | 深川古屋敷 | 深川 古池 | 弥生 | 包蔵地 | | |
| 88 | 77 | 深川古墳 | 深川 玉米 | 古墳 | 古墳 | | 深川舟形石棺、深川の石棺 |
| 89 | 78 | 赤星 | 赤星 宮ノ前 | 古墳 | 包蔵地 | | 土師器 |
| 90 | 79 | 赤星ヤンボシ塚古墳 | 赤星 前畑 | 古墳 | 古墳 | 市 | 今墳丘なし、横穴複式、同所に馬糞塚石棺復元 |
| 91 | 80 | 天城神社古墳 | 赤星 銭塚 | 古墳 | 古墳 | | 円墳 |
| 92 | 81 | 天城 | 赤星 銭塚 | 縄文・弥生 | 包蔵地 | | 縄文・弥生土器 |
| 93 | 82 | 天城池畑 | 赤星 池畑 | 縄文 | 包蔵地 | | 縄文土器 |
| 94 | 83 | 菊の城跡 | 北宮 城ノ堀 | 弥生～中世 | 城 | 市 | 別名菊之城跡、菊池十八外城の一つ、弥生、土師も包含 |
| 95 | 84 | 北宮 | 北宮 西原 | 弥生 | 包蔵地 | | |
| 96 | 85 | 西寺郡及び土盤跡 | 西寺(通称高田) | 古代・中世 | 包蔵地 | 市 | 布目瓦出土、菊地郡家か？ |
| 97 | 86 | 西寺 | 西寺(通称高田) | 古代・中世 | 包蔵地 | | |
| 98 | 87 | 菊の池 | 深川 菊の池 | 弥生 | 包蔵地 | | 城跡全城・弥生土器・土師器片包含、観音ノ本遺跡含む |
| 99 | 88 | 南園 | 西寺 南国 | 古代・中世 | 包蔵地 | | 布目瓦・土師器 |
| 100 | 89 | 長田孤塚 | 長田 孤塚 | 弥生 | 埋葬 | | 黒髪武表棺 |
| 101 | 90 | 深川城 | 北の宮町 城の堀 | 中世 | 城 | | |
| 102 | 91 | 菊の池跡 | 深川 | 中世 | 包蔵地 | 市 | |
| 103 | 92 | 赤星福土・水溜 | 赤星 福土・水溜 | 縄文～古代 | 集落 | | |
| 104 | 94 | 医者どん坂 | 出田 西鶴ほか | 縄文・弥生 | 包蔵地 | | 縄文・弥生を含む |
| 105 | 95 | 堂坂横穴群 | 出田 東屋敷 | 古墳 | 古墳 | 市 | 数基、1群の須恵器をだす、22基 |
| 106 | 96 | 鬼石古墳 | 出田 東屋敷 | 古墳 | 古墳 | | |
| 107 | 97 | 古池城跡 | 出田 | 中世 | 城 | | 十八外城の1つ |
| 108 | 98 | 亀の甲古墳 | 出田 亀の甲 | 古墳 | 古墳 | | 石棺あり、土師基多数出土 |
| 109 | 99 | 古池城跡古墳 | 出田 東屋敷 | 古墳 | 古墳 | | 横穴石室 |
| 110 | 103 | 手洗山南福寺跡 | 出田 | 中世 | 寺社 | | |
| 111 | 104 | 山田横穴群 | 米原 | 古墳 | 古墳 | | |
| 112 | 147 | 樋画之口 | 米原 | 縄文～中世 | 包蔵地 | | |
| 113 | 148 | 大井樋谷横穴群 | 木野 | 古墳 | 古墳 | | |
| 114 | 149 | 大井樋横穴群 | 木野 | 古墳 | 古墳 | | A～Eとある |
| 115 | 150 | 神来 | 大琳寺 | 古代 | 包蔵地 | | |
| 116 | 151 | 鞠智城木野神社礎石 | 米原 長者原 | 中世 | 城 | | 移転したものの、祭祀 |
| 117 | 152 | 鞠智城堀切門礎石 | 米原 長者原 | 中世 | 城 | | |
| 118 | 153 | 鞠智城深追間礎石 | 米原 長者原 | 中世 | 城 | | |
| 119 | 154 | 木柑子高塚古墳 | 木柑子 | 古墳 | 古墳 | | |
| 120 | 155 | 下原 | 木柑子 | 縄文 | 包蔵地 | | |
| 121 | 156 | 西ノ平 | 木柑子 | 縄文・弥生 | 包蔵地 | | |
| 122 | 157 | 西原A | 木柑子 | 古墳 | 包蔵地 | | |
| 123 | 158 | 西原B | 木柑子 | 古代 | 包蔵地 | | |
| 124 | 159 | 東山ノ上 | 木柑子 | 古代 | 包蔵地 | | |
| 125 | 160 | 名称不明 | 木柑子 | 縄文・古墳 | 包蔵地 | | |
| 126 | 161 | 条里跡 | | 古代・中世 | 生産 | | |
| 127 | 162 | 条里跡 | | 古代・中世 | 生産 | | |
| 128 | 163 | 条里跡 | | 古代・中世 | 生産 | | |
| 七城町(401) | 129 | 1 | 台 城之上 | 中世 | 城 | 市 | 水島城の別名あり |
| | 130 | 2 | 台古墳 | 台 | 古墳 | 古墳 | 円墳 |
| | 131 | 3 | 台 | 台 | 古墳 | 包蔵地 | 野辺田式土師器を包含する |
| | 132 | 4 | 瀬戸口横穴群 | 瀬戸口 下原 | 古墳 | 古墳 | 町 横穴10数基開口、軽石充填するあり |
| | 133 | 5 | 菊地兼朝の墓 | 岡田 宅地 | 中世 | 墓 | 町 正善寺跡にあり、菊地家18代 |
| | 134 | 6 | 水次一本松 | 水次 一本松 | 縄文 | 包蔵地 | 縄文後晩期住居跡、御領式包含、勾玉 |
| | 135 | 7 | 十連寺跡 | 水次 久保ノ上 | 奈良・平安 | 寺社 | 町 奈良・平安期、塔心礎・布目有文多数 |

| 番号 | 遺跡番号 | 遺跡名 | 所在地 | 時代 | 種別 | 指定 | 備考 |
|----------|------|-----------|----------|--------|-------|-----|----------------------------|
| 136 | 8 | 神尾城跡 | 水次 屋敷 | 中世 | 城 | 町 | 七城の1つ、水次氏の居城、水次城の別名あり |
| 137 | 9 | 水次 | 水次 久保ノ上 | 古墳 | 包蔵地 | | 野辺田武士器・土師・須恵、箱・舟形石棺(十連寺石棺) |
| 138 | 10 | 山崎古墳 | 山崎 屋敷 | 古墳 | 古墳 | 町 | 箱式・舟形石棺・野辺田武士器 |
| 139 | 11 | 山崎 | 山崎 屋敷 | 縄文 | 包蔵地 | | 御領式土器・石器類包含 |
| 140 | 12 | 岡田の無縫塔 | 岡田 宅地 | 中世 | 石造物 | | |
| 141 | 13 | ヒジョウ谷横穴群 | 岡田 谷 | 古墳 | 古墳 | | |
| 142 | 14 | 神嶽山正善寺跡 | 岡田 宅地 | 中世 | 寺社 | | |
| 143 | 15 | 十連寺古墳 | 水次 久保ノ上 | 古墳 | 古墳 | | 家形石棺 |
| 144 | 16 | 軽石坂横穴群 | 岡田 宅地 | 古墳 | 古墳 | | |
| 145 | 17 | 西の平 | 水次 西ノ平 | 縄文～古墳 | 包蔵地 | | |
| 146 | 18 | 北上原古墳 | 瀬戸口 | 古墳 | 古墳 | | 円墳、舟形石棺 |
| 147 | 19 | 岡田の無縫塔 | 岡田 | 縄文～中世 | 包蔵地 | | |
| 148 | 24 | 西郷城跡 | 砂田 宮ノ前 | 中世 | 城 | 町 | 七城の1つ、西郷氏代々居住、別名増永城跡 |
| 149 | 25 | 船着場・俵落し場跡 | 甲佐 | 近世 | 港湾 | | 藩米の積出場、高瀬御蔵へ舟運 |
| 150 | 26 | 長明寺坂古墳群 | 林原 井出平ほか | 古墳 | 古墳 | 県 | 円墳3基 |
| 151 | 37 | 上鶴頭 | 小野崎 上鶴頭 | 平安 | 官衛 | | |
| 152 | 41 | 亀尾原 | 亀尾 西上原 | 縄文 | 包蔵地 | | 西平式、御領式土器・石器 |
| 153 | 42 | 亀尾城跡 | 亀尾 城平 | 中世 | 城 | 町 | 菊池十八外城の1つ、熊野神社中心 |
| 154 | 43 | 岩瀬チヨウ塚古墳 | 亀尾 岩瀬 | 古墳 | 古墳 | | 小円墳、近くに円墳あり |
| 155 | 44 | 岩瀬横穴群 | 亀尾 岩瀬 | 古墳 | 古墳 | | 横穴数基、須恵器一括 |
| 156 | 45 | 碧嶽正善寺跡 | 亀尾 城平 | 中世 | 寺社 | | |
| 157 | 46 | 亀尾横穴 | 亀尾 山の上 | 古墳 | 古墳 | | |
| 158 | 49 | 岡田支石墓 | 岡田 | 弥生 | 埋葬 | | |
| 159 | 50 | ハヤマ塚古墳 | 水次 | 古墳 | 古墳 | | |
| 160 | 51 | 流川 | 流川 | 縄文～中世 | 包蔵地 | | |
| 泗水町(406) | 161 | 21 | 油屋長者屋敷跡 | 亀谷 中出 | 古代・中世 | 包蔵地 | |
| | 162 | 27 | 三万田東原 | 亀尾 東原 | 縄文 | 包蔵地 | 縄文後晩期土器・注口土器・土偶・石器・飾玉 |
| | 163 | 51 | 硯町横穴群 | 住吉 硯町 | 古墳 | 古墳 | 須恵器 |
| | 164 | 52 | 下峯 | 住吉 弧塚 | 弥生 | 包蔵地 | 石包丁、黒髪式・野辺田式 |
| | 165 | 53 | 狐塚古墳 | 住吉 弧塚 | 古墳 | 古墳 | |
| | 166 | 54 | 備後塚古墳 | 住吉 備後塚 | 古墳 | 古墳 | |
| | 167 | 56 | 長塚古墳 | 住吉 西古賀 | 古墳 | 古墳 | |
| | 168 | 56 | 城山 | 住吉 城山 | 縄文～古代 | 包蔵地 | 蔵骨器・条痕文・御領式・青磁・西平式・野辺田式 |
| | 169 | 57 | 飛熊城跡 | 住吉 城山 | 中世 | 城 | 中世城 |
| | 170 | 58 | 住吉日吉神社 | 住吉 北小路 | 古墳～中世 | 包蔵地 | 須恵器・土師器・滑石釜・円面硯 |
| | 171 | 68 | 華厳山広勝寺碑 | 住吉 北小路 | 中世 | 石造物 | 町 華厳山広勝寺境内 |
| | 172 | 69 | 合志隆岑墓碑 | 住吉 北小路 | 中世 | 石造物 | 町 華厳山広勝寺境内 |
| | 173 | 72 | 光明寺跡 | 住吉 北小路 | 中世 | 寺社 | |
| | 174 | 73 | 西光寺跡 | 住吉 西光寺 | 中世 | 寺社 | |

※ 遺跡番号は「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会発行）と対応

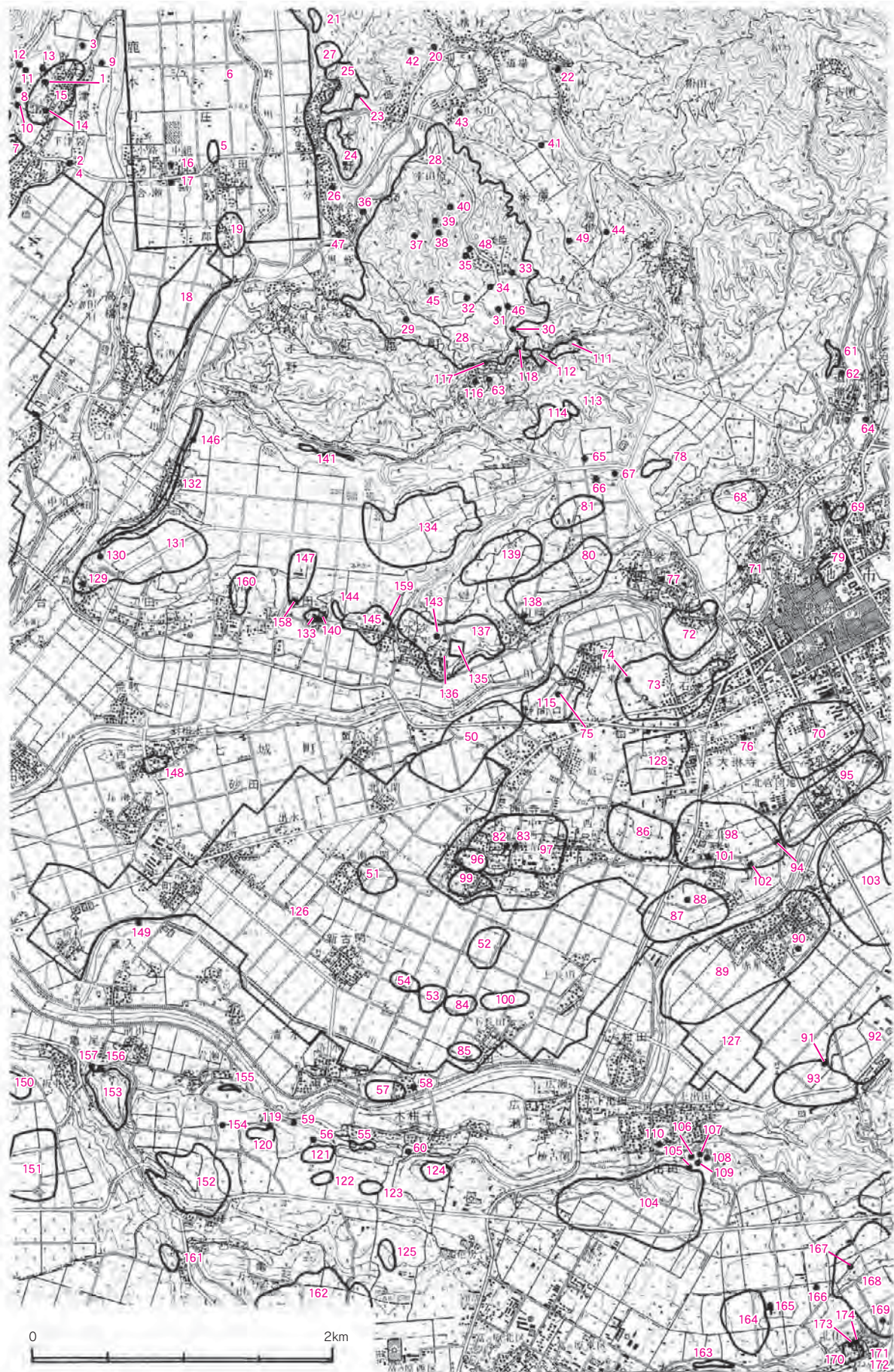
うてな台地周辺には、古墳時代の遺跡が多数、存在している。

うてな台地の東部には、菊池市袈裟尾丸山古墳、同袈裟茶臼塚古墳、同袈裟尾高塚古墳の3基が存在する。これら古墳の築造時期は、袈裟尾丸山古墳、袈裟尾高塚古墳、袈裟尾茶臼塚古墳の順とされる（註8）。

袈裟尾丸山古墳は直径約20mの円墳である。6世紀後半代の築造と考えられており、小型の竪穴式石室と考えられるが、内部主体は破壊されている（註9）。袈裟尾臼塚古墳の内部主体は、横穴式石室、袈裟尾高塚古墳は、複室構造の横穴式石室である（註10）。

この古墳群の北西方向の谷には、菊池市大井桶谷横穴墓群、同大井桶横穴群がある。また、うてな台地の南端部には、山崎古墳、七城町十連寺古墳、同水次遺跡、同ハヤマ塚古墳が存在する。うてな台地の西端部には、瀬戸口横穴墓群の他に、七城町うてな古墳、同北上原古墳、同豊水横穴墓群が近接して存在する。さらに、うてな台地の北側の谷部には、七城町ヒシユウ谷横穴墓群がある。樋之口B横穴墓群、山田・樋之口A横穴墓群、井樋谷・大井樋横穴墓群については、未調査で詳細は不明である。

菊池平野を挟んだうてな台地の対岸の赤北台地上には、石人が出土している菊池市木柑子のフタツカサン古墳がある。また、菊池市深川古墳では、舟形石棺が確認されている。



第2図 周辺遺跡分布図 (S=1/37,500)

古代の遺跡では、西ノ平遺跡、流川遺跡、十蓮寺跡がある。

西ノ平遺跡では、竪穴住居跡が検出されている。流川遺跡では、竪穴住居跡が検出された上、墨書土器、越州窯青磁、銅椀等が出土している（註11）。十蓮寺跡は、菊池市西寺の西寺遺跡の西北、約1.5kmの地点にあり、塔の心礎や、多数の布目瓦、墨書土器等が確認され、菊池の郡寺ではないかとされている（註12）。

周辺については、まず、うてな台地の北側の菊鹿町米原に所在する鞠智城跡が注目される。鞠智城跡の重要性については、あえてここで述べるまでもないため省略するが、菊池市深川、西寺に存在する遺跡の位置付けを考えるためには、その関連性も含めて避けて通ることができない。

菊池市西寺の西福寺の周辺には、現在でも、土塁とそれに伴う溝を確認することができる。この土塁については、松本雅明氏によって発掘調査されたが、奈良時代の遺物のみが出土することが確認されている（註13）。また、西福寺の敷地内からは、大量の布目瓦が出土している。これらから、この一帯が、菊池郡衙とその関連施設であると推定地とされている（註14）。なお、菊池郡衙推定地の西寺遺跡の周辺地域には、条里制が施行されていたとされ、大淋寺西部にも断続的に確認できるとされる（註15）。

中世の遺跡については、七城町では、神尾城跡、西郷城跡、台城跡等のほか、菊池十八外城の一つである亀尾城跡等の中世城跡の存在が注目される。周辺には、菊池市深川城等が確認されている。

註

註 1 西住欣一郎1992『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第121集 熊本県教育委員会

註 2 松本健郎他1987『袈裟尾丸山古墳』熊本県文化財調査報告第89集 熊本県教育委員会

註 3 江本 直1993『岡田遺跡』熊本県文化財調査報告第135集 熊本県教育委員会

註 4 註2に同じ

註 5 註2に同じ

註 6 高木正文1990「熊本県菊池郡七城町うてな遺跡」『日本考古学年報』41 日本考古学協会

註1に同じ

註 7 註1に同じ

註 8 註1に同じ

註 9 松本健郎・西住欣一郎1989『北上原古墳・瀬戸口横穴墓群』熊本県文化財調査報告第104集 熊本県教育委員会

註10 註1に同じ

註11 県教育委員会調査。註1に同じ

註12 菊池市史編さん委員会1982 『菊池市史』 菊池市

註13 松本雅明 1964 「菊池市西寺の土壁－菊池郡家参考地」『熊本県文化財調査報告第5集（菊池地方）』熊本県教育委員会

註12に同じ

註14 鶴嶋俊彦1979「古代肥後国の交通路についての考察」『駒沢大学大学院地理学研究』9

註12に同じ

註15 島津義昭1977『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告第25集 熊本県教育委員会

引用・参考文献

岩本政教ほか1964『熊本県の地理』

第3章 調査成果

第1節 立地

瀬戸口横穴墓群は、菊池郡七城町うてなに所在する。

七城町は、熊本県の三大河川のひとつ、菊池川の中流域に位置する。東は菊池市、西は山鹿市に挟まれ、北は菊鹿町、南は泗水町と接している。

横穴墓群は、七城町のうてな台地西側に存在する。横穴墓群の分布については、この西側崖面に延長1kmにわたって約300基以上が存在するが、今回の調査区は、そのほぼ南限にあたる。

うてな台地の南北は、菊池川の支流に挟まれている。台地北側には、内田川、南側には迫間川が流れ、これらは台地の西南部において合流している。

台地の南側と西側は、沖積平野で水田地帯を形成する。町の中央部は、菊池川沿いに、この水田地帯が広がっている。台地上からは、この水田地帯の中に菊池川を望むことができ、さらに南側には、花房台地を一望することができる。

うてな台地は、東西約5km、南北約1.2～1.5kmの広さで、ほぼ平坦な台地が広がっている。台地上の標高は、約70m～80mである。

台地の地形については、西側は、やや東方向へ入り込む谷部によってくびれる。また、南側については、崖面の東端において、北東方向へ入り込む谷によって、くびれた形状を呈している。台地周辺には、これらの谷と、数ヶ所に入り込んだ小さな谷が存在する。台地北側は、内田川、木野川とその小支流である豊水川により侵食をうけており、複雑な地形を呈している。

台地の西側及び北側には、阿蘇凝灰岩の露頭があり、急な傾斜になっている。これらの部分に横穴墓群が存在する。それ以外の崖面については、傾斜が若干緩やかであり、今のところ、横穴墓の存在は確認されていない。



第3図 瀬戸口横穴墓群位置図 (S=1/50,000)

第2節 分布と概要

1 調査した横穴墓について

今回、調査した横穴墓群は、崖面部において高さ15m、幅25mの範囲で確認した。見かけ上、大きく、上段、中段、下段の3群に分かれている。

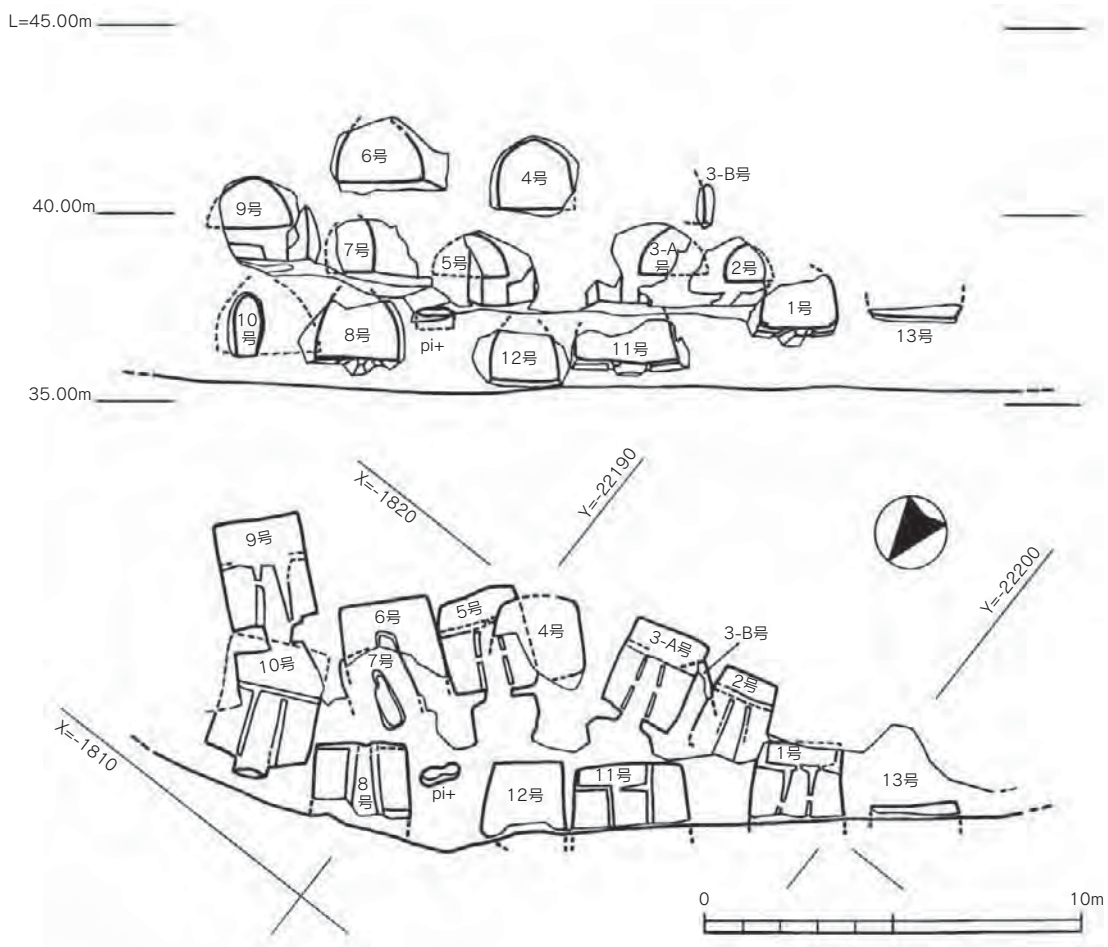
調査区内の横穴墓の配置については、3段の配置が基本であるが、各段ごとの横穴墓が、全て一斉に築造されたとは簡単には断言できない。それは、上段、中段、下段の各群においても、玄室が掘りこまれているレベルが異なること。また、各段のそれぞれの横穴墓が開口している方向が異なること、並びに同じ段の中でも、玄室の規模や構造が異なるものが存在すること等からの判断による。各横穴墓の築造時期については、それぞれの立地と構造等から総合的に検討する必要がある。

ここでは、横穴墓群の分布について、築造時期を考慮せずに、各段ごとにその概要を述べる。築造順序については、第4章において、若干の検討をおこなっている。

なお、横穴墓の遺構番号については、今回の調査時におけるものであり、瀬戸口横穴墓群の他群とは関連しない。また、遺構番号は、調査時に検出順にふっていったため、横穴墓の築造順序とも対応しない。

下段は、崖面の最も下の部分にあたる。1号墓・8号墓・10号墓・11号墓・12号墓の5基が、この群に相当する。1号墓については、下段と中段の間に位置するが、便宜的にこちらに含めた。

崖面は、正面からみて、8号墓付近から左側が、やや奥側、台地方向へ入り込んでいる。そのため、左端



第4図 横穴墓配置図 (S=1/200)

に位置している10号墓は、当初の施工からはずれ、検出時には最も残りが良かった。天井部の崩落もあまりなく、玄室は全て残存している。横穴墓の配置については、8号墓・10号墓・11号墓の3基が、ほぼ同じ高さに玄室が掘られている。その3基より、若干、低い位置に12号墓が築造されている。なお、1号墓のすぐ右側に、奥壁のみが残る横穴墓を確認したが、位置の記録のみにとどめた。後述する各横穴墓の概要の項では扱わない。

中段は、崖面の中央部に位置する一群である。2号墓・3A号墓・5号墓・7号墓・9号墓が該当する。中段の横穴墓については、主軸方向が、それぞれ、微妙に異なる。

中段は、掘削の方向により、中央で二つに分かれる。向かって左側の5号墓・7号墓・9号墓については、向かって左奥方向に掘削されている。なお、5号墓の手前に、Pitが1基、掘削されていた。左隣の7号墓の前庭部については、崩落のため残存しておらず、Pitと7号墓との関係は不明である。位置的には、これら二つの墓に近接しており、横穴墓に関連した施設の可能性もある。

逆に、向かって右側の2号墓・3A号墓については、右奥方向に掘削されている。2号墓・3A号墓については、その位置も重複せず、構造も類似していることから、ほぼ同時期に掘削されたと考えている。

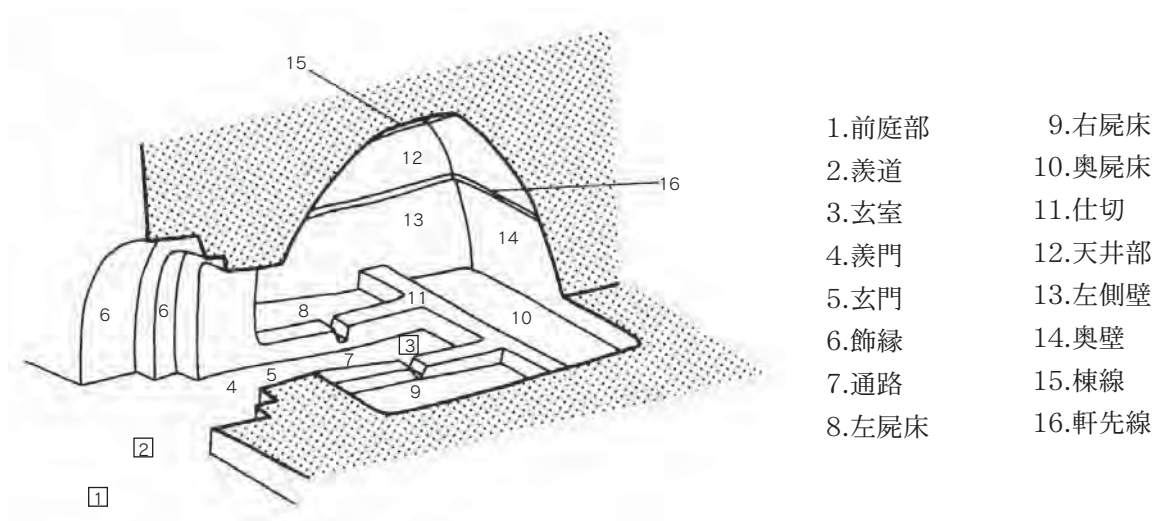
上段は、3B号墓・4号墓・6号墓の3基である。上段の横穴墓周辺については、崖面の崩落のため、残存状況も悪く、玄室の半分以上が破壊されている。3B号墓にいたっては、痕跡を確認したのみである。これらの周辺についても、横穴墓が存在した可能性が考えられる。

3基の掘削方向については、それぞれ異なっており、3基が一連のものであるとは言えない。また、築造時期についても、明確に判断する根拠はない。

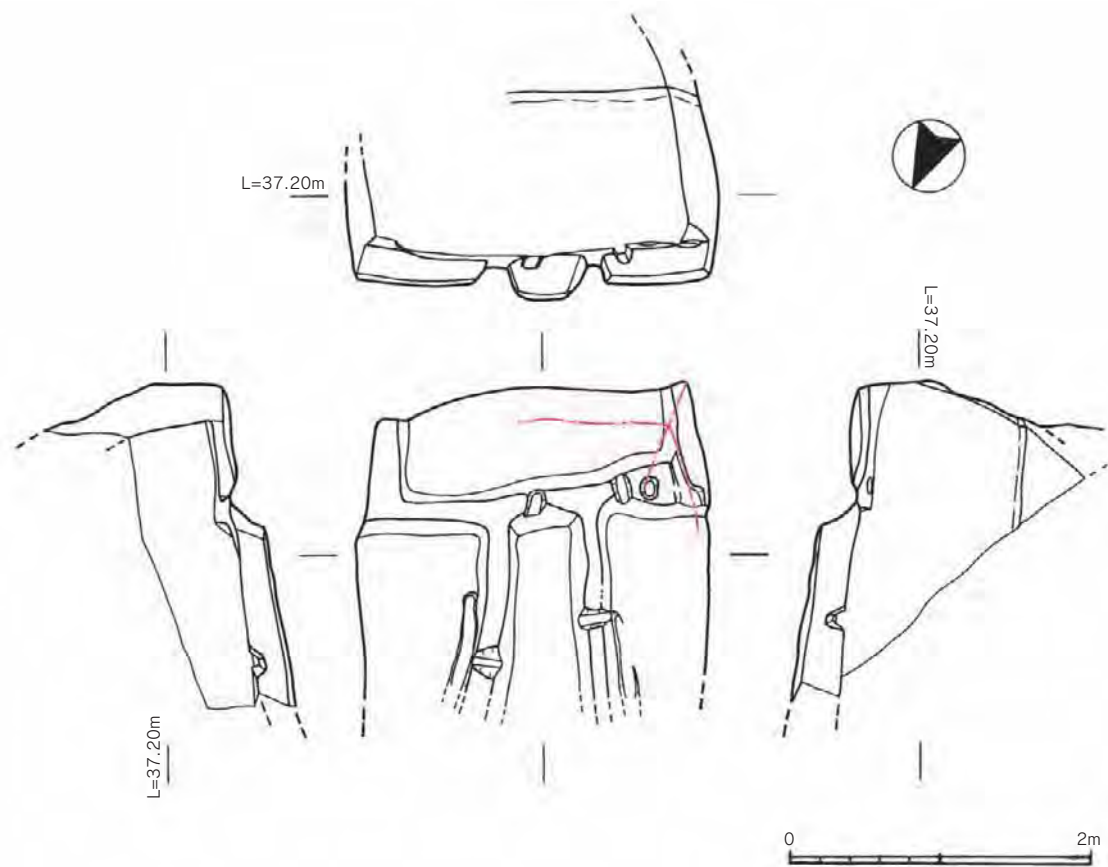
なお、全ての横穴墓において、人骨は検出されなかった。出土遺物については、ガラス小玉を含めて、多量に出土した横穴墓と、全く出土していない横穴墓がある。また、全ての横穴墓において、追葬の痕跡を確認することはできなかった。そのため、出土した遺物についても、横穴墓のどの埋葬時期に伴うものか判断することはできなかった。

2 横穴墓の部分名称 (第5図)

本報告において、利用する横穴墓の部分名称については、次のとおりである(松本・西住編1989を転載)。基本的な部分名称については、この図を参照されたい。



第5図 横穴墓の部分名称



第6図 1号墓実測図 (S=1/50)

第3節 検出遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構については、横穴墓13基と、Pit 1基である。

それぞれの立地については、第2節で述べたとおりである。

以下、それぞれの横穴墓ごとに詳細を示す。それぞれの位置関係の説明には、道路側から横穴墓が存在する崖面をみた状態（概ね、横穴墓の開口部から奥壁をみる方向）で、その左右を表現する（第4図上段 立面図参照）。

なお、1号墓右側に位置する痕跡のみを確認した横穴墓については、個別の説明はおこなわない。

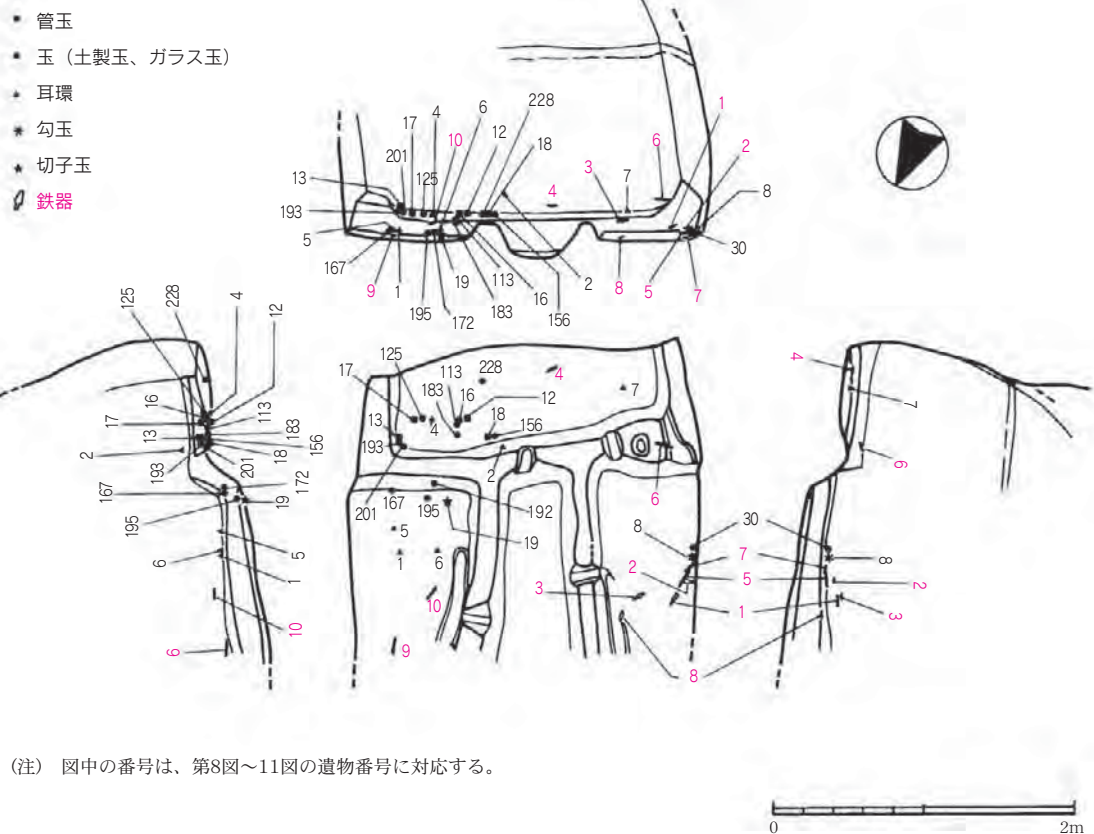
1 1号墓（第6図）

遺構 下段の最も右側に位置する。主軸方向はN29° Wで、北西に開口している。

玄室は、手前から、約3分の1程度まで破壊されており、羨道部及び羨門部は残存していない。また、天井部についても、ほとんど崩壊している。

玄室は、残存している入口部で幅226cm、奥行き214cmを測る。高さは残存部で196cmである。平面形態はやや幅広の長方形であるが、左右の側壁は平行ではない。また、それぞれの側壁も、直線的には造られていない。奥壁の掘削も雑で、奥壁の中央部は奥方向に丸く湾曲している。

なお、玄室全体が、玄門方向に向かって傾斜をつけて掘削されている。各屍床横の仕切に造られた排水溝



第7図 1号墓出土遺物分布図 (S=1/50)

と併せて、玄室内の排水を考慮していたことが分かる。

天井部は、家形で、やや切妻に近い寄棟であると考えられる。天井部の軒先線から棟線に至る角度については、ややゆるやかである。明瞭な軒先線が、奥壁と右側壁に確認できる。

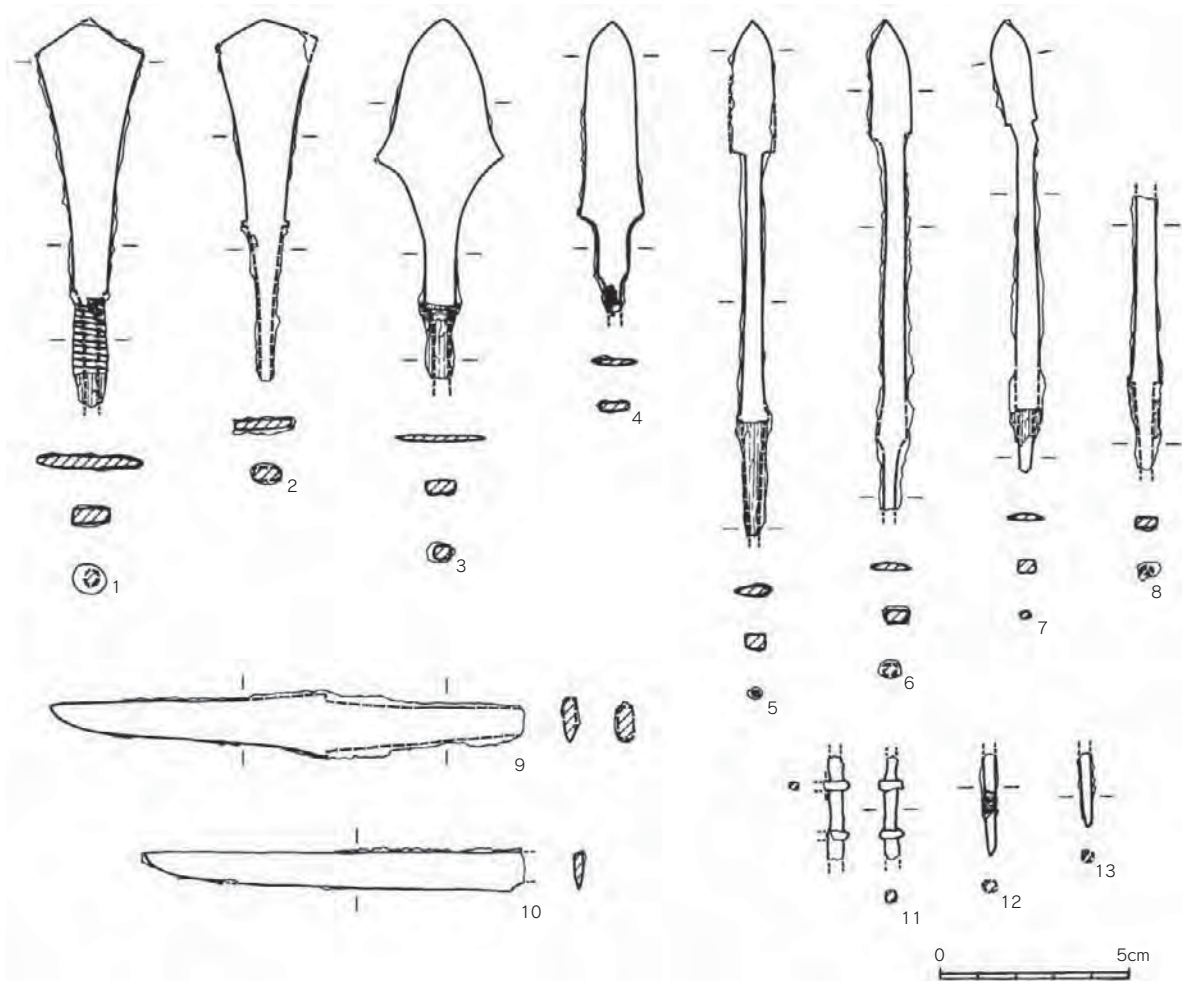
玄室内は、仕切によって三区区分されており、屍床は、コの字型に配置されている。それぞれの屍床は雑な長方形であり、三つの屍床配置はいびつである。区画する仕切の造りも雑で、幅や高さもやや統一感がない。なお、それぞれの屍床間の仕切には、排水のための溝が掘りこまれている。奥屍床は、両端に仕切から続いた平坦面を残す、特異な構造を呈している(註)。

通路は、左右屍床の高さより若干、低い程度であり、玄門方向に向かって広がる。左屍床は、この通路形態によって規制され、手前側が狭くなっている。

奥屍床は、左右の屍床より若干、高い場所に配置されている。奥屍床の左右には、奥仕切からつながるやや広めの段が残されている。奥仕切上の、右屍床と奥屍床の間には、円形のくぼみが掘られている。灯明台の可能性もある。これを削りこむために、仕切幅を広くしているため、後世の追刻ではないと考える。なお、左右屍床の仕切際に、やや細長いくぼみがあるが、築造当初のものか、後世に追刻か、判断することはできなかった。

遺物 横穴墓自体の残存状況は悪いが、出土した遺物の量は、今回、調査した横穴墓の中で最も多い。玄室内から、鉄鏃、刀子、釘、耳環、勾玉、白玉、管玉、切子玉、丸玉、土製丸玉、ガラス小玉が出土した。遺構内で検出した遺物については、遺物の出土位置を図面で示した(第7図)。

以下、出土遺物について詳述したい。



第8図 1号墓出土遺物（鉄器）

鉄器は、鉄鏃が8本と用途不明の小鉄棒が4点、出土した（第8図）。鉄鏃については、短茎鏃が4点、長茎鏃が4点である（第8図1～8）。

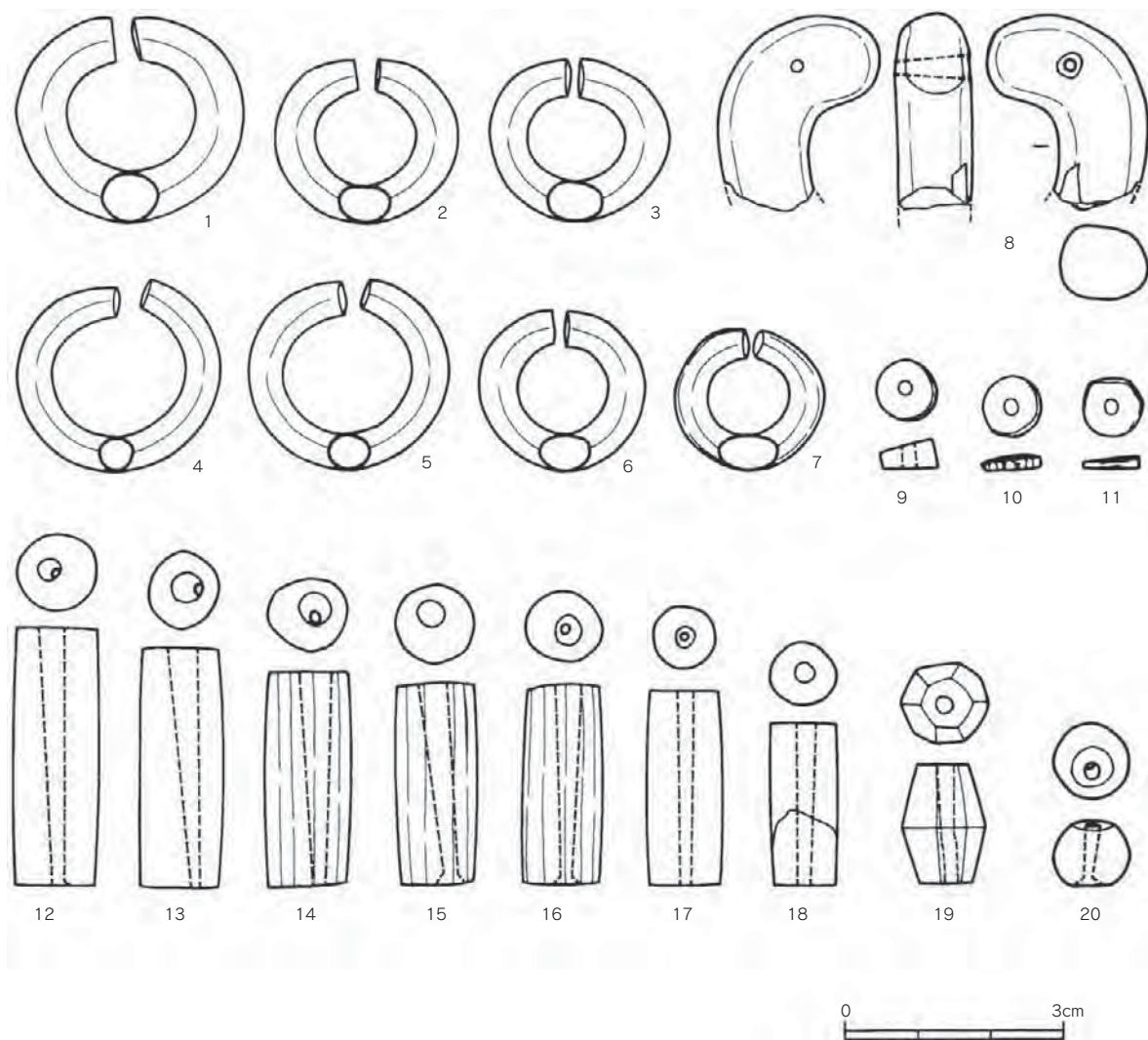
1・2は、圭頭鏃で、関があるものである。鏃身部は、いずれも長身化している。1・2とも、端部が欠損している。

1は、残存部の全長9.2cm。身部は現存長7.1cm、幅2.9cm、厚さ0.35cm。茎部は現存長2.1cm、幅2.5cmを測る。矢柄の木質が残り、その部分には幅2mm程度での細い紐状のものをまいて留めてある。関部は、角関と思われる。2は、全長9.6cm。身部は現存長5.3cm、復元した幅は3.7cm、厚さ0.25cmを測る。茎部は、厚さ約0.3cmの長方形の断面を呈し、残存部長4.3cmを測る。棘状の関部をもつ。

3・4は、三角形鏃である。

3は、身部は、ふくらからやや内湾してひろがる形態をとる。頸部は斜行する。残存部の全長9.5cm。身部は現存長3.6cm、幅約3.2mm、厚さ1.5mmを測る。茎部は現存長1.5cm、幅2.2cm、厚さ0.3cmを測る。矢柄の木質が残存している。4は、長三角形鏃である。関部から茎にかけての部分から欠損している。関部の形態は、サビのため、観察が難しく、不確かである。斜関となるかも知れない。残存部の全長7.7cm。身部は残存長5.2cm、幅1.8cm、厚さ0.2cmを測る。茎部は、1.0cmのみを残し、以下を欠損している。茎部には、樹皮が残存している。

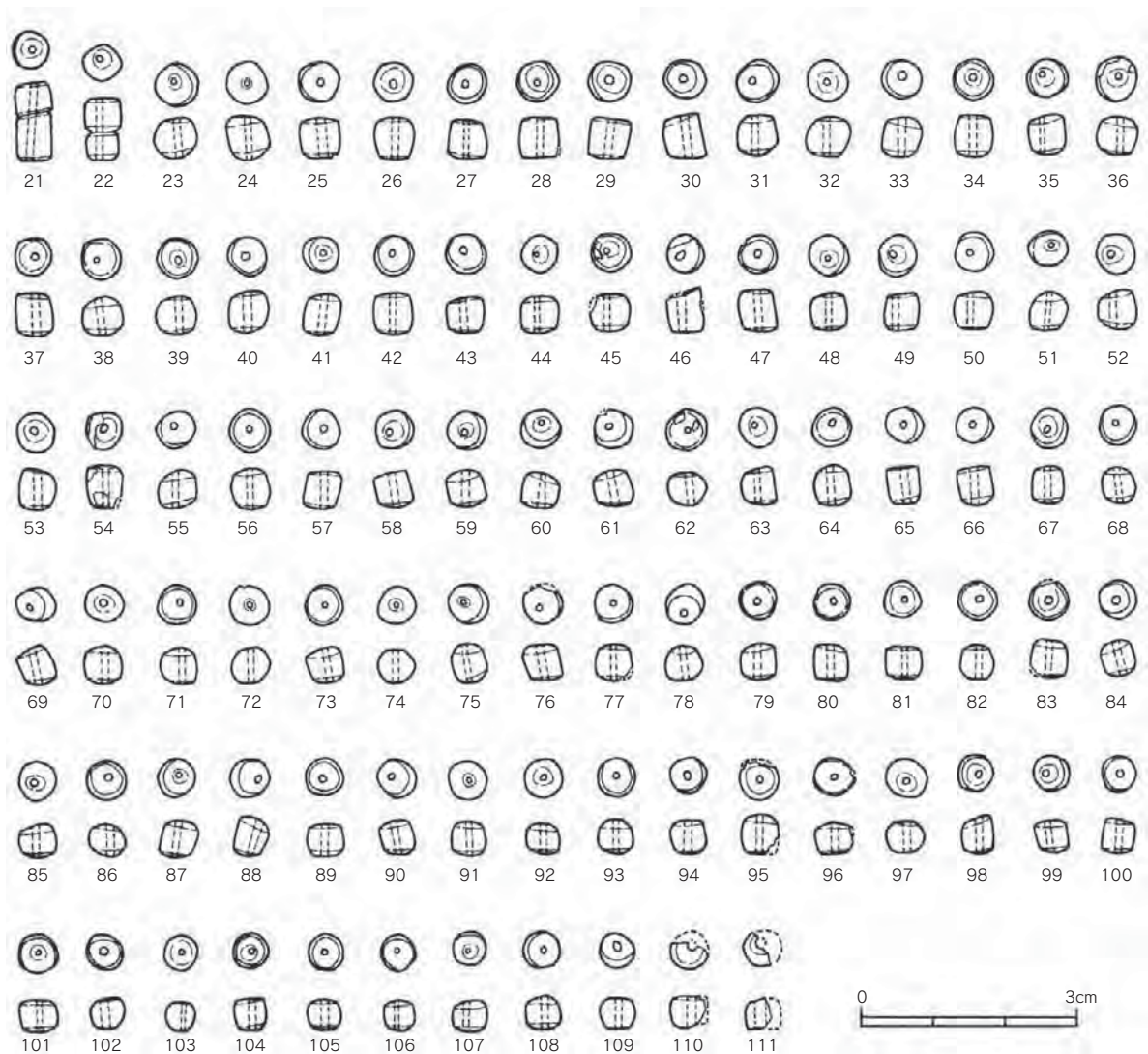
5～8は、長頸鏃である。5～7は、長三角形鏃である。8も茎の途中から身部にかけて欠損しているが、類



第9図 1号墓出土遺物（装身具）

第2表 1号墓出土装身具観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 遺物 種類 | 材質 | 色調 | 径 (mm) | 長さ (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----------|----|--------|-----------------|------------|------------|------------|-----------|-----|
| 9 | 1 | No.24 | 耳環 | 金銅 | 金色・青緑色 | 28.0(縦)×31.0(横) | | 9.0 | | 19.03 | 完形 |
| 9 | 2 | No.1 | 耳環 | 青銅 | 青緑色 | 22.0(縦)×25.0(横) | | 7.0 | | 12.12 | 完形 |
| 9 | 3 | 排土 | 耳環 | 金銅 | 金色・緑青色 | 22.0(縦)×25.0(横) | | 8.5 | | 11.72 | 完形 |
| 9 | 4 | No.6 | 耳環 | 青銅 | 青緑色 | 25.0(縦)×28.0(横) | | 4.5 | | 6.22 | 完形 |
| 9 | 5 | No.19 | 耳環 | 青銅 | 青緑色 | 26.0(縦)×27.5(横) | | 6.0 | | 7.56 | 完形 |
| 9 | 6 | No.20 | 耳環 | 金銅 | 金色 | 22.0(縦)×22.5(横) | | 7.0 | | 3.60 | 完形 |
| 9 | 7 | No.7 | 耳環 | 金銅 | 青緑色・金色 | 19.0(縦)×20.5(横) | | 7.0 | | 8.35 | 完形 |
| 9 | 8 | No.29 | 勾玉 | 瑪瑙 | こはく色 | | (27.0) | 10.0 | 1.5 | 7.57 | 70% |
| 9 | 9 | 床面直上 | 白玉 | 滑石 | オリーブ灰 | 8.0 | | 4.0 | 1.5 | 0.40 | 完形 |
| 9 | 10 | 排土 | 白玉 | 滑石 | 淡い黄土色 | 8.0 | | 2.0 | 2.0 | 0.19 | 完形 |
| 9 | 11 | 排土 | 白玉 | 滑石 | 淡い黄土色 | 8.0 | | 2.0 | 2.0 | 0.16 | 完形 |
| 9 | 12 | No.8 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 10.0 | 35.0 | | 3.0 | 8.26 | 完形 |
| 9 | 13 | No.4 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 11.0 | 32.5 | | 4.5 | 7.11 | 完形 |
| 9 | 14 | 排土 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 11.5 | 29.0 | | 4.5 | 7.19 | 完形 |
| 9 | 15 | 床面直上 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 11.0 | 27.0 | | 4.0 | 6.66 | 完形 |
| 9 | 16 | No.10 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 12.0 | 27.5 | | 3.5 | 5.69 | 完形 |
| 9 | 17 | No.9 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 10.0 | 16.5 | | 3.0 | 4.16 | 完形 |
| 9 | 18 | No.5 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | 9.0 | 22.0 | | 3.0 | 2.73 | 80% |
| 9 | 19 | No.28 | 切子玉 | 埋木 | 淡黒色 | 12.0 | 16.5 | | 2.0 | 1.69 | 完形 |
| 9 | 20 | 排土 | 丸玉 | 水晶 | 白濁した透明 | 10.0 | | 9.0 | 2.0 | 1.35 | 完形 |



第10図 1号墓出土遺物（土製丸玉）

5は、茎の基部が、若干欠損している。残存部の全長14.7cm。身部は4.5cm、幅は推定で約1.2cm、厚さ0.3cmを測る。棘状の関部をもつと推定される。茎部は3.0cmが残る。断面は長方形を呈し、樹皮が残存している。6は、茎の基部が、一部欠損している。関部と、鏝身関部の形態は、ともにサビのため、観察できない。残存部の全長13.0cm。身部は3.2cm、幅1.1cm、厚さ0.2cmを測る。茎部は、1.8cmが残る。樹皮は残存していなかった。7は、茎の基部が一部欠損している。また、身部のやや下部において、左方向に折れ曲がっている。関部の有無は不明。鏝身関部は、角関である。残存部の全長11.2cm。身部は2.7cm、幅1.0cm、厚さ0.15cmを測る。茎部は、1.7cmが残り以下を欠損している。関部の有無は不明である。樹皮が残存している。8は、途中から折れて欠損しており、頸部から折れて茎部までのみ残存している。残存部の全長7.3cm、頸部長は5.0cm、頸部幅約0.6cm、厚さ0.3cmを測る。頸部断面形は、やや丸みのある方形を呈する。関部については、X線写真により2mm弱の段を確認した。有関であるが、その形状は、サビのため不明確である。また、茎部には、樹種不明であるが、樹皮が残存している。

9・10は、刀子である（第8図9・10）。いずれも、基部を欠損している。

9は、残存長12.6cm、身部は7.3cm、幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。茎部は、残存部の長さが5.3cmを測る

第3表 1号墓出土土製丸玉観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 | 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|-----------|------------|------------|-----------|------|----------|----------|----------|-----------|------------|------------|-----------|-----|
| 10 | 21 | 床面直上 | 5.0 | 10.5 | 1.0 | 0.37 | 完形 | 10 | 67 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 |
| 10 | 22 | 排土 | 5.0 | 8.5 | 1.0 | 0.27 | 完形 | 10 | 68 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 |
| 10 | 23 | 排土 | 6.0 | 5.5 | 1.0 | 0.24 | 完形 | 10 | 69 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 |
| 10 | 24 | 排土 | 6.0 | 6.0 | 1.0 | 0.21 | 完形 | 10 | 70 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 25 | 床面直上 | 6.0 | 5.5 | 1.0 | 0.21 | ほぼ完形 | 10 | 71 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 26 | 排土 | 6.0 | 5.5 | 1.0 | 0.21 | 完形 | 10 | 72 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 90% |
| 10 | 27 | 床面直上 | 6.0 | 5.5 | 1.0 | 0.21 | 完形 | 10 | 73 | 床面直上 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 28 | 床面直上 | 5.5 | 6.0 | 1.0 | 0.21 | 90% | 10 | 74 | 排土 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 29 | 床面直上 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.21 | 完形 | 10 | 75 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 30 | No.30 | 5.5 | 6.0 | 1.5 | 0.21 | 完形 | 10 | 76 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 90% |
| 10 | 31 | 床面直上 | 7.0 | 5.5 | 1.0 | 0.20 | 完形 | 10 | 77 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 95% |
| 10 | 32 | 排土 | 6.0 | 5.5 | 1.0 | 0.20 | 完形 | 10 | 78 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 33 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.20 | 完形 | 10 | 79 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 34 | 排土 | 5.0 | 5.5 | 1.0 | 0.20 | 完形 | 10 | 80 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 35 | 床面直上 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.19 | 完形 | 10 | 81 | 床面直上 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 36 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.19 | 完形 | 10 | 82 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.15 | 完形 |
| 10 | 37 | 床面直上 | 5.0 | 5.5 | 1.0 | 0.19 | 完形 | 10 | 83 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.15 | 80% |
| 10 | 38 | 床面直上 | 6.0 | 5.5 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 84 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 39 | 排土 | 6.0 | 5.0 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 85 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 40 | 床面直上 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 86 | 床面直上 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 41 | 床面直上 | 5.0 | 5.5 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 87 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 42 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 88 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 43 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 89 | 床面直上 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 44 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 90 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 45 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.18 | 完形 | 10 | 91 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 46 | 床面直上 | 5.5 | 6.0 | 1.0 | 0.17 | 90% | 10 | 92 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 47 | 床面直上 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 93 | 床面直上 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 48 | 排土 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 94 | 床面直上 | 4.5 | 4.5 | 1.0 | 0.14 | 完形 |
| 10 | 49 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 95 | 排土 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.13 | 70% |
| 10 | 50 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 96 | 排土 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.13 | 90% |
| 10 | 51 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 97 | 排土 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.13 | 完形 |
| 10 | 52 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 98 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.13 | 完形 |
| 10 | 53 | 床面直上 | 5.0 | 5.5 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 99 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.13 | 完形 |
| 10 | 54 | 床面直上 | 5.0 | 5.5 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 100 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.13 | 完形 |
| 10 | 55 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.17 | 完形 | 10 | 101 | 排土 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.13 | 完形 |
| 10 | 56 | 排土 | 5.5 | 5.5 | 1.0 | 0.16 | 90% | 10 | 102 | 床面直上 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.12 | 完形 |
| 10 | 57 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 103 | 床面直上 | 5.0 | 4.0 | 0.5 | 0.12 | 95% |
| 10 | 58 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 104 | 床面直上 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.12 | 完形 |
| 10 | 59 | 排土 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 105 | 床面直上 | 5.0 | 4.0 | 1.0 | 0.12 | 完形 |
| 10 | 60 | 床面直上 | 5.5 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 106 | 床面直上 | 4.5 | 4.0 | 1.0 | 0.12 | 完形 |
| 10 | 61 | 床面直上 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 107 | 床面直上 | 4.5 | 4.0 | 1.0 | 0.11 | 完形 |
| 10 | 62 | 排土 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.16 | ほぼ完形 | 10 | 108 | 床面直上 | 5.0 | 4.5 | 1.0 | 0.10 | 完形 |
| 10 | 63 | 床面直上 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 109 | 床面直上 | 5.0 | 4.0 | 1.0 | 0.10 | 完形 |
| 10 | 64 | 排土 | 5.0 | 5.5 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 110 | 排土 | 5.5 | 4.5 | 1.0 | 0.08 | 完形 |
| 10 | 65 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | 10 | 111 | 排土 | 5.5 | 4.0 | 1.5 | 0.05 | 50% |
| 10 | 66 | 排土 | 5.0 | 5.0 | 1.0 | 0.16 | 完形 | | | | | | | | |

が、基部を欠損している。10は、残存部の全長11.0cm。残存しているのは、ほぼ、身部のみである。身部幅約1.0～1.1cm、厚さ0.3cmを測る。

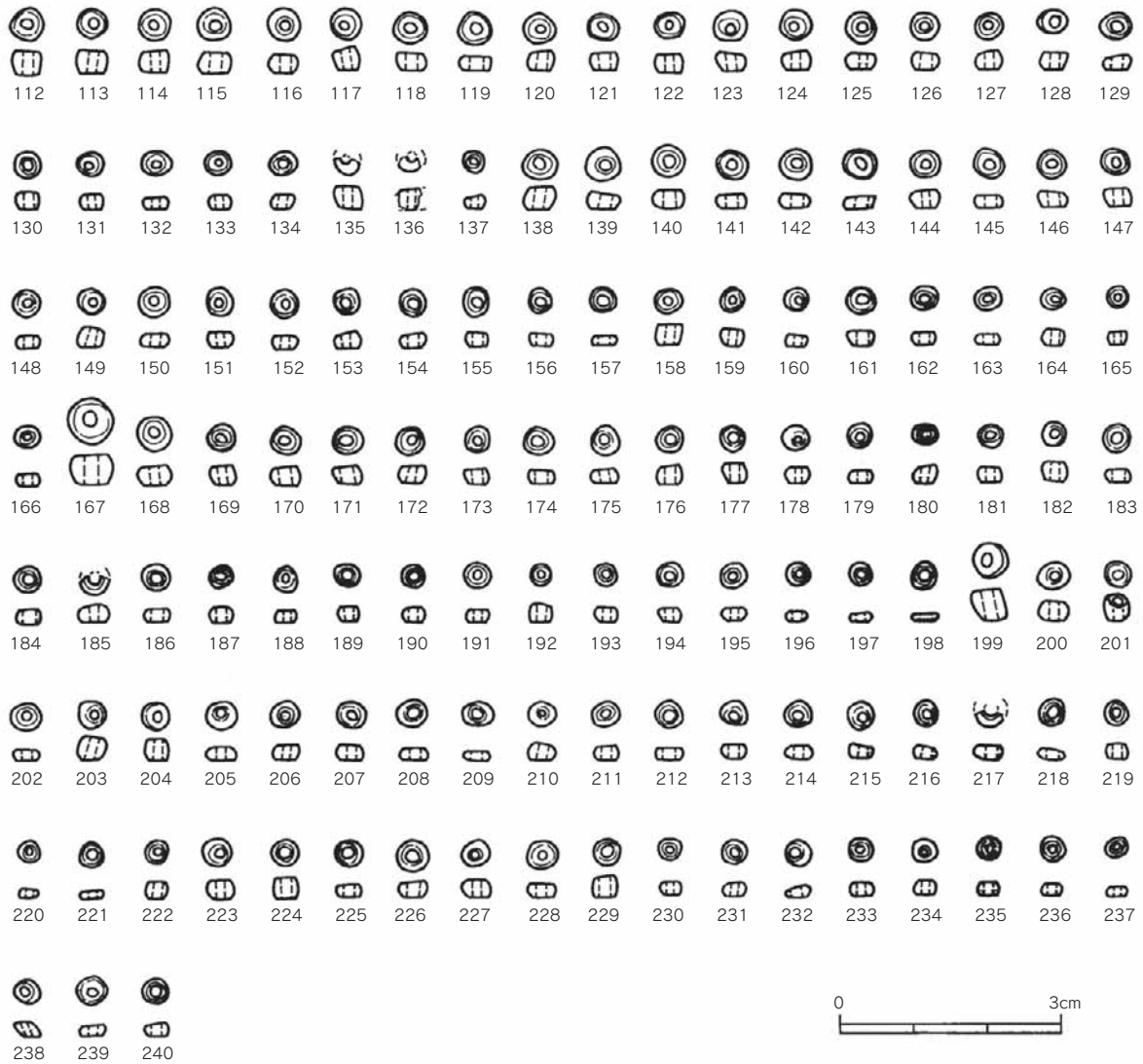
他に、用途不明の小鉄棒が3本出土している（第8図11～13）。

11は、残存長2.8cm、径約0.3cmの小鉄棒である。途中に2箇所、鉄で細い紐状の区画を貼りつけている。12・13は、やや先がとがる小鉄棒である。12は、残存長2.7cm、径約0.3cm。13は、残存長1.95cm、径約0.3cm。12には、樹皮と思われる紐状の繊維残存している。いずれも、その用途については、不明である。

耳環、勾玉、白玉、管玉、切子玉、丸玉の装身具は、計20点出土した（第9図）。

耳環は、7点、出土した（第9図1～7）。

1は、完形の銅地金張りの耳環である。長（横）径31.0mm、短（縦）径28.0mm、厚さ9.0mmを測る。重量



第11図 1号墓出土遺物（ガラス小玉）

は、19.3gである。

2～4は、青銅製の耳環である。

2は、長（横）径28.0mm、短（縦）径25.0mm、厚さ4.5mmを測る。重量は、6.22gである。3は、長（横）径27.5mm、短（縦）径26.0mm、厚さ6.0mmを測る。重量は、7.56gである。4は、長（横）径25.0mm、短（縦）径22.0mm、厚さ7.0mmを測る。重量は、12.12gである。

5～7は、完形の銅地金張りの耳環である。

5は、長（横）径25.0mm、短（縦）径22.0mm、厚さ8.5mmを測る。重量は、11.72gである。6は、長（横）径22.5mm、短（縦）径22.0mm、厚さ7.0mmを測る。重量は、3.60gである。7は、長（横）径20.5mm、短（縦）径19.0mm、厚さ7.0mmを測る。重量は、8.35gである。

勾玉は、1点、出土した（第9図8）。

8は、メノウ製の勾玉である。一部が欠損しており、残存長は27.0mmである。厚さは、10.0mm、を測り、重量は、7.57gである。片側から穿孔されており、孔径は1.5mmである。色調は、こはく色を呈する。

白玉は、3点、出土した（第9図9～11）。全て、滑石製の完形のものである。

9は、長径8.0mm、厚さ4.0mm、孔径1.5mmを測る。重量は、0.40gである。10は、長径8.0mm、厚さ2.0mm、

第4表 1号墓出土ガラス小玉観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 | 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|
| 11 | 112 | 排土 | 濃紺 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | 0.09 | 完形 | 11 | 177 | 排土 | 青 | 3.5 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 113 | No.17 | 濃紺 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | 0.08 | 完形 | 11 | 178 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 114 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | 0.08 | 完形 | 11 | 179 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 115 | 床面直上 | 濃紺 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | 0.07 | 完形 | 11 | 180 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 116 | 排土 | 濃紺 | 4.5 | 2.5 | 1.5 | 0.07 | 完形 | 11 | 181 | 排土 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 117 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | 0.07 | 完形 | 11 | 182 | 排土 | 青 | 3.0 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 118 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.07 | 完形 | 11 | 183 | No.12 | 青 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 119 | 排土 | 濃紺 | 4.5 | 2.0 | 1.8 | 0.06 | 完形 | 11 | 184 | 排土 | 青 | 4.0 | 2.0 | 2.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 120 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.06 | 完形 | 11 | 185 | 排土 | 青 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.03 | 50% |
| 11 | 121 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 11 | 186 | 排土 | 青 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 122 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.06 | 完形 | 11 | 187 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 123 | 床面直上 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 11 | 188 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 124 | 床面直上 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 189 | 排土 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 125 | No.15 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 190 | 排土 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 126 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 2.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 191 | 排土 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 127 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 192 | 排土 | 青 | 3.0 | 2.5 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 128 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 193 | No.16 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 129 | 床面直上 | 濃紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 194 | 床面直上 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 130 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 195 | No.27 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 131 | 排土 | 濃紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 196 | 排土 | 青 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 132 | 床面直上 | 濃紺 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 11 | 197 | 排土 | 青 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 133 | 排土 | 濃紺 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 11 | 198 | 排土 | 青 | 3.5 | 1.0 | 1.5 | 0.01 | 完形 |
| 11 | 134 | 床面直上 | 濃紺 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 11 | 199 | 排土 | 水色 | 5.0 | 4.5 | 2.0 | 0.14 | 完形 |
| 11 | 135 | 排土 | 濃紺 | 3.5 | 3.0 | 1.0 | 0.03 | 50% | 11 | 200 | 排土 | 水色 | 4.5 | 2.5 | 1.0 | 0.06 | 完形 |
| 11 | 136 | 排土 | 濃紺 | | 3.0 | | 0.03 | 30% | 11 | 201 | No.14 | 水色 | 3.5 | 3.5 | 1.0 | 0.06 | 完形 |
| 11 | 137 | 排土 | 濃紺 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 | 11 | 202 | 排土 | 水色 | 4.0 | 1.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 11 | 138 | 排土 | 紺 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | 0.08 | 完形 | 11 | 203 | 排土 | 水色 | 3.5 | 3.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 11 | 139 | 床面直上 | 紺 | 4.5 | 2.5 | 1.5 | 0.07 | 完形 | 11 | 204 | 床面直上 | 水色 | 3.0 | 3.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 11 | 140 | 床面直上 | 紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.07 | 完形 | 11 | 205 | 排土 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 141 | 排土 | 紺 | 4.5 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 206 | 排土 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 142 | 排土 | 紺 | 4.5 | 2.0 | 2.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 207 | 排土 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 143 | 排土 | 紺 | 4.0 | 1.5 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 208 | 排土 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 144 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 209 | 排土 | 水色 | 4.0 | 1.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 145 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 210 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 146 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 211 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 147 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 212 | 排土 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 2.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 148 | 排土 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 213 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 149 | 床面直上 | 紺 | 3.5 | 3.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 214 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 150 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 215 | 床面直上 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 151 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 216 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 152 | 床面直上 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 217 | 排土 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.02 | 40% |
| 11 | 153 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 218 | 排土 | 水色 | 3.5 | 1.5 | 1.5 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 154 | 排土 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 219 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 155 | 排土 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 220 | 排土 | 水色 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 156 | No.13 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 221 | 排土 | 水色 | 3.5 | 1.5 | 1.0 | 0.01 | 完形 |
| 11 | 157 | 排土 | 紺 | 3.5 | 1.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 222 | 排土 | 緑 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | 0.06 | 完形 |
| 11 | 158 | 床面直上 | 紺 | 3.5 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 223 | 床面直上 | 緑 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 11 | 159 | 排土 | 紺 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 224 | 床面直上 | 緑 | 3.5 | 3.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 |
| 11 | 160 | 排土 | 紺 | 3.5 | 1.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 11 | 225 | 排土 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 |
| 11 | 161 | 排土 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 11 | 226 | 床面直上 | 緑 | 4.0 | 2.0 | 2.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 162 | 排土 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 11 | 227 | 排土 | 緑 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 163 | 排土 | 紺 | 3.5 | 1.5 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 11 | 228 | No.11 | 緑 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 164 | 床面直上 | 紺 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 11 | 229 | 排土 | 緑 | 3.5 | 3.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 165 | 排土 | 紺 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 11 | 230 | 床面直上 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 11 | 166 | 排土 | 紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.02 | 完形 | 11 | 231 | 床面直上 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 167 | No.18 | 青 | 6.0 | 4.0 | 2.0 | 0.23 | 完形 | 11 | 232 | 排土 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 168 | 排土 | 青 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | 0.08 | 完形 | 11 | 233 | 床面直上 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 169 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.06 | 完形 | 11 | 234 | 排土 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 170 | 排土 | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.05 | 95% | 11 | 235 | 排土 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 171 | 排土 | 青 | 4.0 | 2.5 | 2.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 236 | 排土 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 172 | No.26 | 青 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 11 | 237 | 排土 | 緑 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 11 | 173 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 11 | 238 | 排土 | 黄 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 174 | 排土 | 青 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 239 | 排土 | 紫 | 4.0 | 1.5 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 175 | 排土 | 青 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 11 | 240 | 排土 | 紫 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 11 | 176 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 | | | | | | | | | |

孔径2.0mmを測る。重量は、0.19gである。11は、長径8.0mm、厚さ2.0mm、孔径2.0mmを測る。重量は、0.16gである。

管玉が、7点、出土している（第9図12～18）。全て、碧玉製であり、18が、一部、欠損しているが、その他については、全て完形である。

12は、長さ35.0mm、径10.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、8.26gである。13は、長さ29.0mm、径11.5mmを測る。孔径については、4.5mm、重量は、7.19gである。14は、長さ32.5mm、径11.0mmを測る。孔径については、4.5mm、重量は、7.11gである。15は、長さ27.0mm、径11.0mmを測る。孔径については、4.0mm、重量は、6.66gである。16は、長さ27.5mm、径12.0mmを測る。孔径については、3.5mm、重量は、5.69gである。17は、長さ16.5mm、径10.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、4.16gである。18は、長さ22.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、2.73gである。

切子玉は、1点、出土した（第9図19）。

19がそれで、淡黒色を呈する埋木製である。長さ16.5mm、径12.0mm、孔径2.0mmを測る。完形で、重量は、1.69gである。

丸玉が、1点、出土した（第9図20）。

20がその丸玉であり、水晶製で、やや白濁した透明のものである。径10.0mm、厚さ9.0mm、孔径2.0mmを測る。完形で、重量は、1.35gである。

土製丸玉は93点が出土している。うち、破片のため図化できない2点を除く91点を図示した（第10図21～111）。

その出土位置は、各屍床の床面に近い場所からのものが多いが、それ以外に、排土の水洗フルイから検出したものもある。ただし、出土位置を図示（第7図）したものの以外については、屍床ごとに排土を分けていないため、正確な出土位置は不明である。

土製丸玉の個々の出土位置や大きさ等の詳細については、観察表に示したとおりである（第3表）。

ガラス小玉は、131点、出土した。うち、破片のため、図化できない2点を除く129点を図示した（第11図112～240）。

その材質は、ガラスであるが、色調は、見かけ上、濃紺色、紺色、青色、水色、緑色と、6種類に分けられる。

ガラス小玉の出土位置についても、各屍床の床面に近い場所からのものが多いが、それ以外に、排土をフルイにより水洗した結果、検出したものも多い。なお、土製丸玉と同様、出土位置を図示（第7図）したものの以外については、排土を屍床ごとに分けていないため、その正確な位置は不明である。

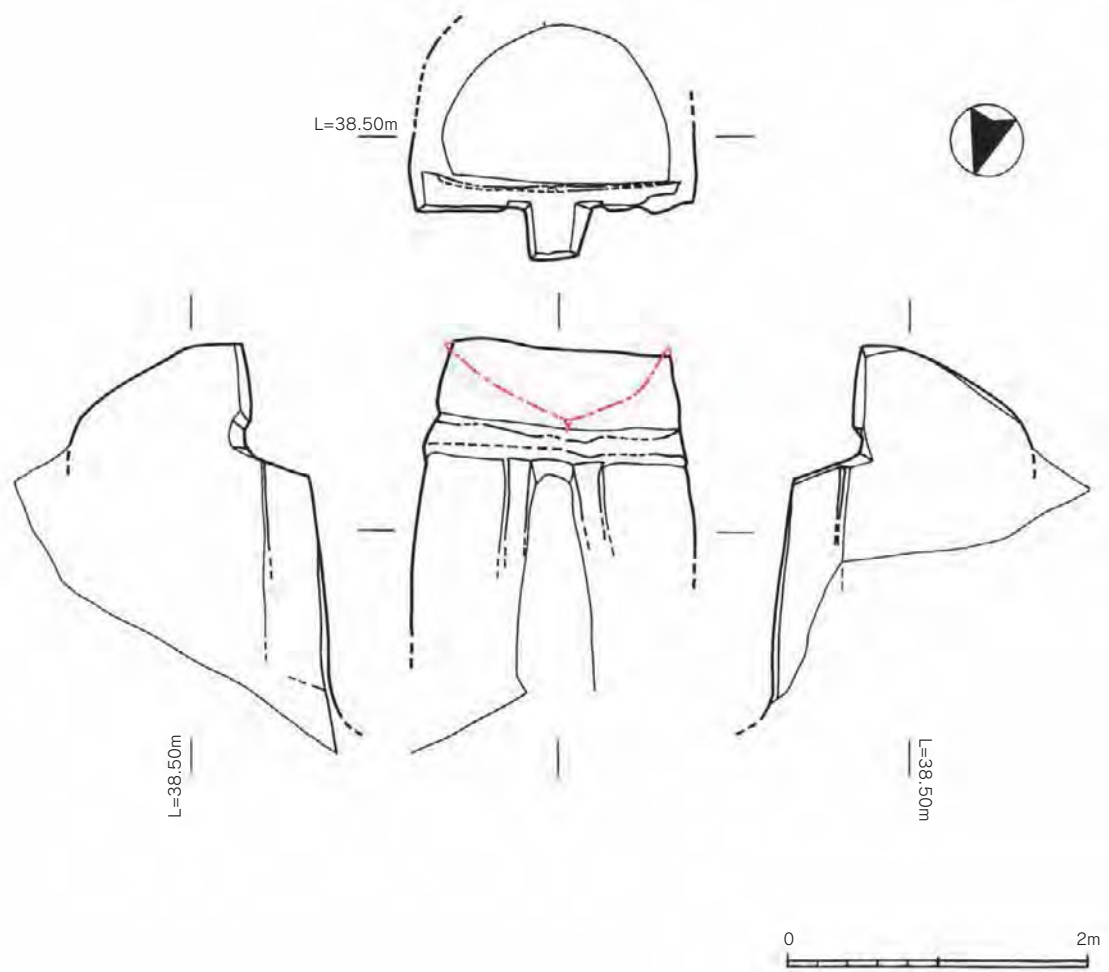
ガラス小玉の詳細についても、観察表に提示することをもってかえたい（第4表）。

2 2号墓（第12図）

遺構 中段の、一番、右側に位置する。1号墓のすぐ斜め上方に位置し、左の3A号墓とは主軸方向に近い。主軸方向は、N29° Wで北北西に開口している。

平面配置では、右側の1号墓と、ほぼ、接している。右屍床面の高さが、左屍床面より高いのは、1号墓と貫通するのを避けたためと考える。2号墓は、1号墓の後に築造されたと考えている。なお、左側の3A号墓とは、近い時期に築造された可能性を考えている。

調査開始時点では、重機により斜めに削平されており、玄室の床面上ではほぼ3分の1程度、側壁及び天井部については、約半分が削平のため破壊されていた状態であった。開口していた玄室内には、土砂等はほとんど堆積していなかった。



第12図 2号墓実測図 (S=1/50)

玄室の規模については、残存している最大部で、幅186cm、奥行236cm、高さ210cmである。玄室の平面形態は、奥壁が狭く手前側がやや広がる長方形であり、側壁は中央部付近で自然に外側に湾曲している。奥壁の掘削については、側壁に比べても雑であり、ややいびつである。

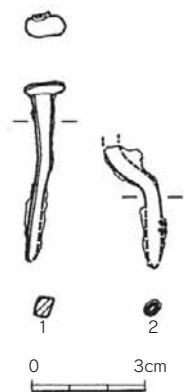
天井部はほとんど残存していないが、奥壁及び側壁の形状から推定して、その形態は家形であると思われる。棟線へ向かう天井部の角度は、ゆるやかな丸みを帯びながらも、棟線付近は三角形に近い形状である。なお、軒先線については、残存状況の悪さから確認できなかった。

玄室内は、通路と仕切によって三区画され、屍床が「コ」字形に配置される。奥仕切は、奥屍床と左右屍床を明確に区画する。その後、左右の屍床配置と大きさを意識していたことが分かる。奥屍床は、左右の屍床より若干、高い場所に位置している。

通路は、40cm近い深さでしっかりと掘りこまれており、手前側もあまり広がらない。なお、残存する仕切部分には、排水溝は確認できなかった。

遺物 鉄釘が2点、出土したのみである（第13図1・2）。

1は、全長4.7cmで方形の釘頭をもつ。2は、上部が欠損し、途中で折れ曲がっている。その折れ曲がった場所に木質が付着している。排土を水洗フルイにかけた結果、検出したため、出土位置等は不明である。



第13図
2号墓出土遺物
(鉄製品)

3 3A号墓 (第14図)

遺構 中段、向かって右側から2番目に位置する。2号墓のすぐ左側に位置する。主軸方向は、N12° Wで北北西に開口している。主軸方向は、2号墓と近似している。玄室床面のレベルについても、2号墓より、ごくわずかに高い程度である。

調査開始時においては、2号墓と同様に、重機により斜めに破壊されていた。ただし、2号墓より、やや、現道から離れているため、割と残存状況は良い。天井部はあまり残存していないが、床面レベルでは、玄門の立ちあがりまで残り、玄室は全て残存していた。また、飾縁と考えられる屈曲も確認した。ただし、こちらについては風化が激しく、あまり明瞭ではなかった。

玄室の平面形態については、やや正方形に近い長方形である。その規模は、幅212cm、奥行256cm、高さ188cmである。奥壁はまっすぐに掘り込まれているが、奥屍床部分については、やや向かって右側にはみ出している。棟線も右屍床の上部にずれている。天井形態は、家形であり、側壁と天井部の境には、軒先線が残る。

羨道部については、わずかだが、幅140cm、長さ50cmをそれと確認した。

通路は、しっかりと深く、また、奥屍床手前から手前側に傾斜をつけて造られている。その幅については、手前側であまり広がらず直線的に羨道部へと続く。羨門は、幅約55cmで、長さ約48cmである。

玄室内は、仕切によって三区区分され、屍床は、「コ」字形に配置される。奥屍床は他の二つより、若干、高い場所に位置している。奥屍床については、手前側の約半分と仕切が後世に剝り込まれて欠損している。ただし、その痕跡から、横一直線に造られて左右屍床と奥屍床を明確に区画していたと考えられる。左右の仕切は、玄室からの高さはないが、丁寧にほぼまっすぐに造られている。いずれの仕切も、その中央部に屍床からの排水溝が穿たれている。

左右の屍床の規模と形態については、ほぼ似通っており、玄室の築造当初にそれぞれの配置や割付けを意識して造っていたと考えられる。奥屍床については、全体的に右側にずれている。また、天井部も同様である。奥屍床は、左右屍床を割付けた後に、造られたと考えられる。

遺物 出土していない。

4 3B号墓 (第15図)

遺構 上段の最も右、3A号墓の向かって右上方に位置する。横穴は大きく削平をうけており、残存状況は悪い。その詳細については、ほとんど分からない。

主軸方向についても、測定は不可能である。側壁の痕跡から想定すると、2号墓及び3A号墓とは、やや方向が異なる。

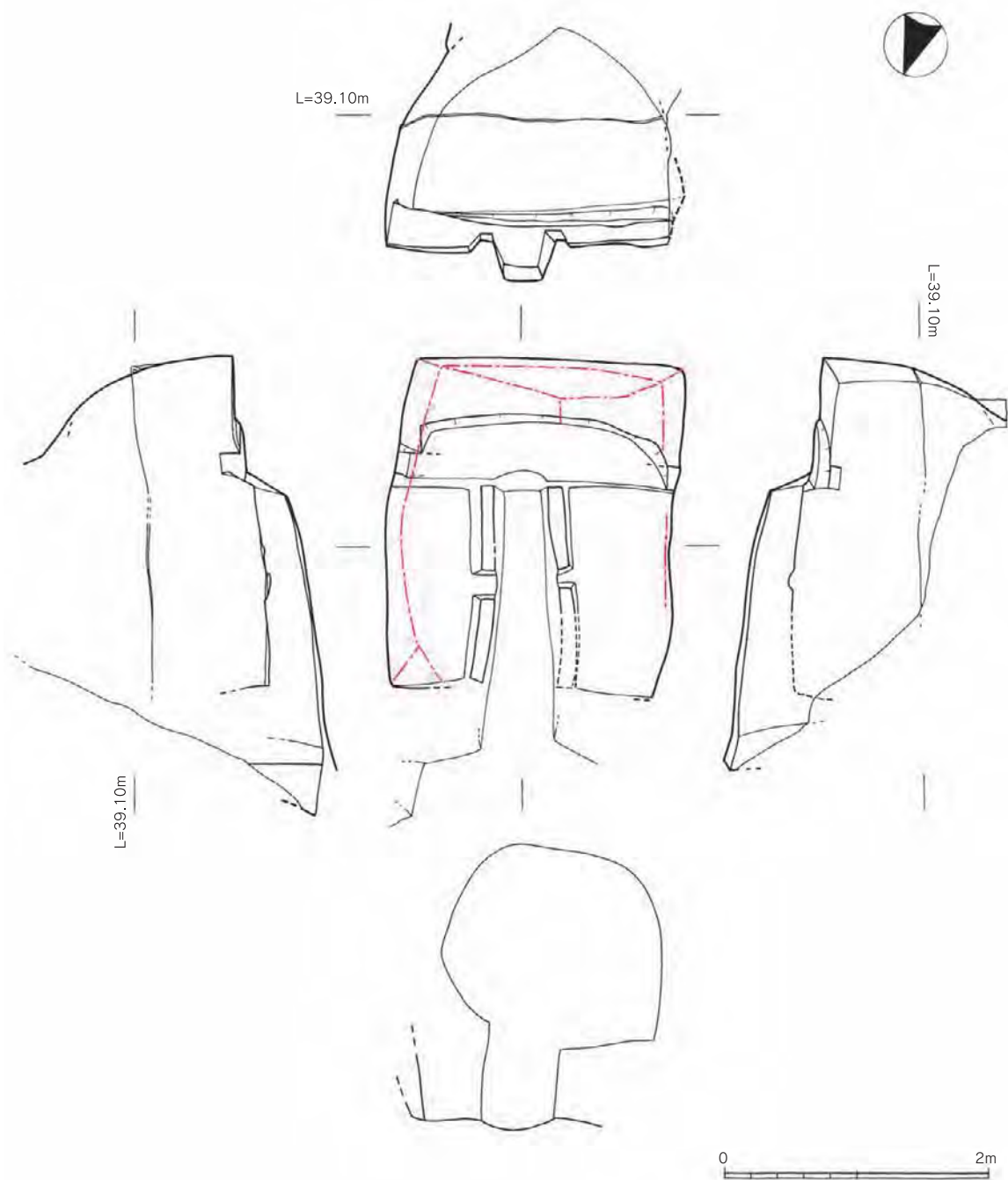
わずかに残存している玄室の残存部長については、幅46cm、奥行94cm、高さ210cmであった。

遺物 出土していない。

5 4号墓 (第16図)

遺構 上段、中央に位置する。崩壊が激しいが、奥壁や側壁の痕跡から、かろうじてその概要を推定することができる。主軸方向は、N40° Wで北西に開口している。

玄室の平面形態は、手前側がやや広がる正方形に近いと推定する。その大きさは、残存部で、幅240cm、



第14図 3A号墓実測図 (S=1/50)

奥行242cm、高さ210cmである。かろうじて、側壁から玄門に向かう部分と考えられる屈曲部を確認している
ので、玄室の規模については、ほぼ、大きさに近いものであったと考える。その場合、奥屍床まで含めた。

三つの屍床が配置できる大きさではなかったかも知れない。ただし、屍床については、床面が崩壊した上
に重機でも破壊されているので、確認できる情報はなかった。なお、奥壁については、ほぼまっすぐに掘削
されているが、後世に壁面を掘削して利用した痕が認められた。

奥壁と側壁に軒先線を確認している。天井部については、ゆるやかな傾斜をもつ家形であると考えている。

遺物 鉄釘が2点、出土した（第17図1・2）。

1は、残存長4.9cmで、断面形は0.45cm角の正方形を呈する。2は、残存長1.9cmで、断面形は0.4cm×0.3cmの長方形を呈する。

6 5号墓（第18図）

遺構 中段の中央、左右から3番目に位置する。主軸方向は、N49° Wで北西に開口している。主軸方向は、9号墓とほぼ、同じである。横穴は、天井部から羨門にかけて斜めに破壊されていたが、手前側でも床面まで破壊されている訳ではなく、羨道部については、その平面形まで確認することができた。

羨道部については、幅176cm、長さ86cm程が、それと確認できる。玄室の方向とは、若干、方向がずれている。羨門部については、上部は不明だが、下部は幅約60cm、長さは46cmを測る。

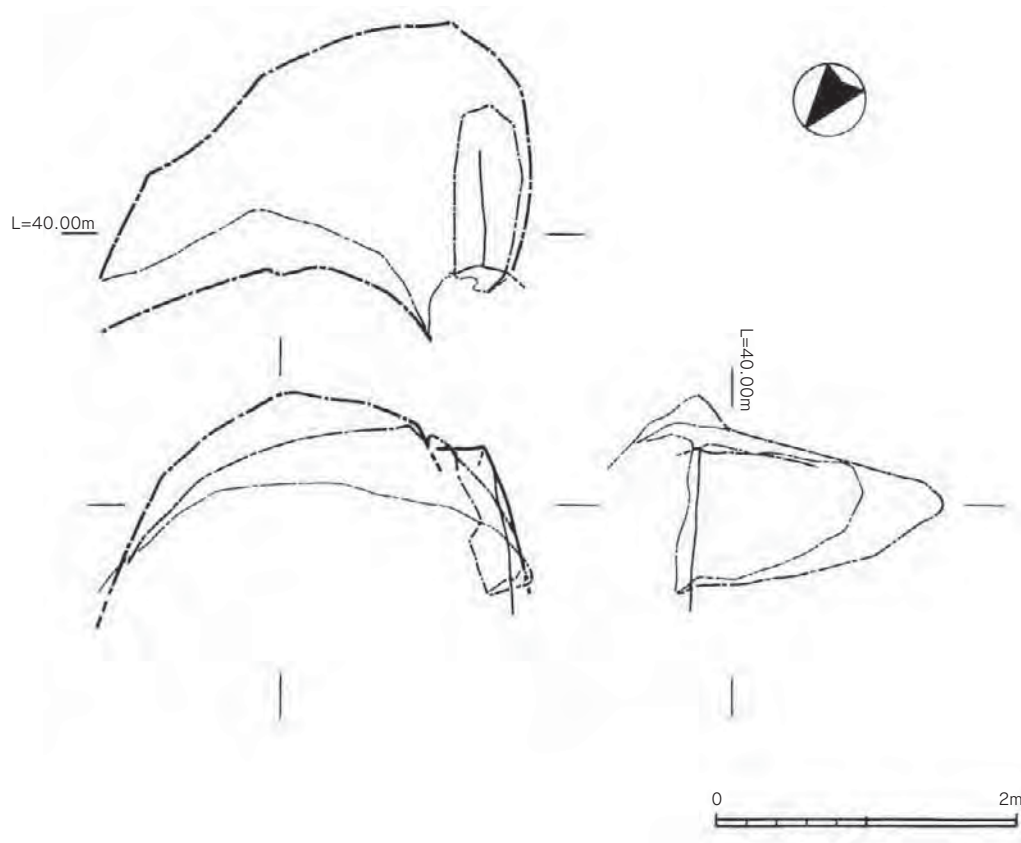
羨門部がまっすぐに造られた後、奥の玄室は、やや左方向に曲がって造られている。これは、右上に存在する4号墓をよけるためであったと考えている。

玄室の平面形態は、やや丸みを帯びた長方形であり、四隅も丸まっている。側壁と奥壁については、外側に丸みを帯びた形で掘削されている。

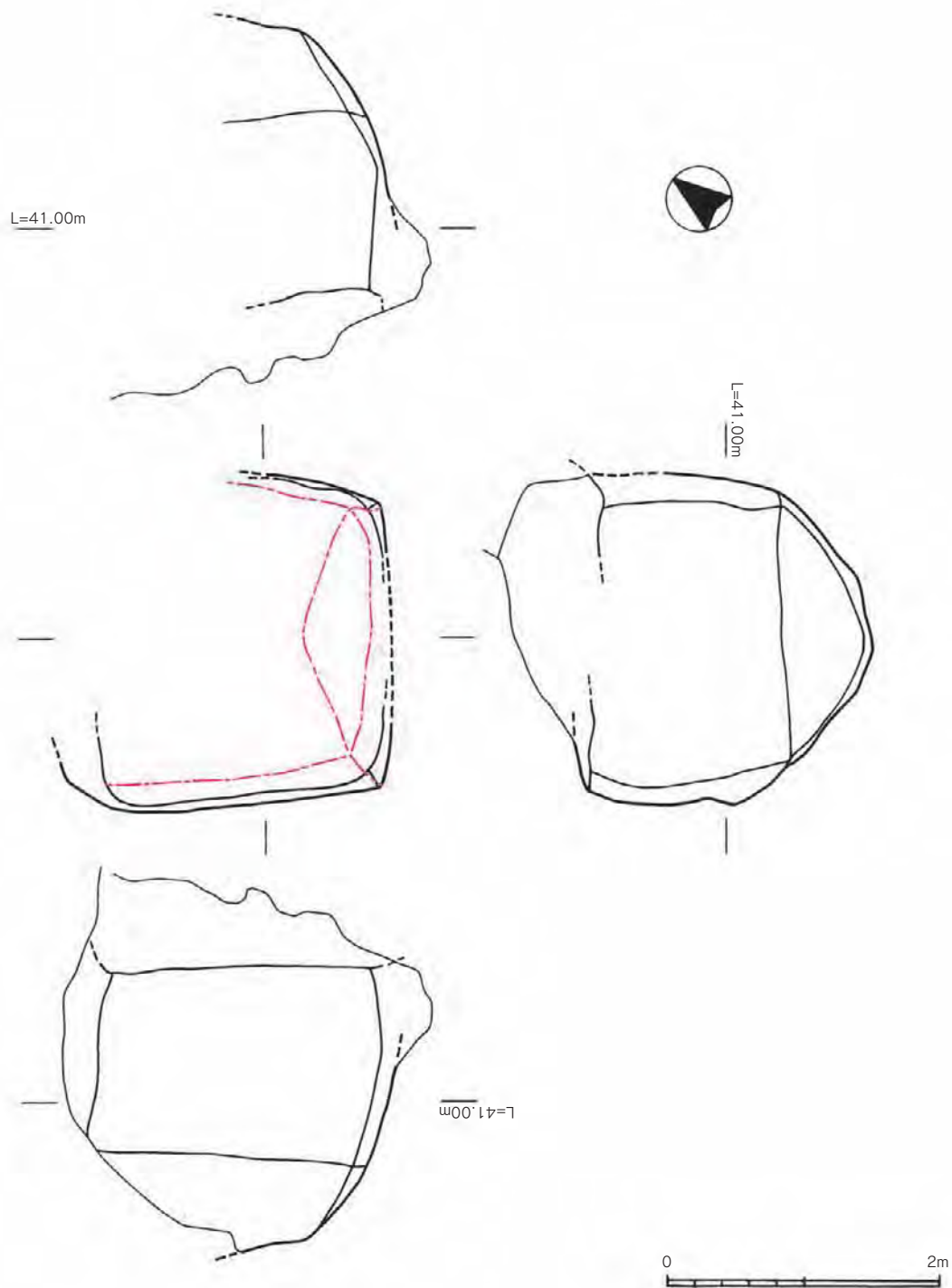
天井部は、断面が三角形の切妻に近い家形を呈する。棟線、軒先線の痕跡については、確認することはできなかった。

玄室の規模は、幅234cm、奥行278cm、残存高194cmである。

玄室内は、仕切によって三区分され、屍床は、「コ」字形に配置される。奥屍床は、直線的な仕切によって



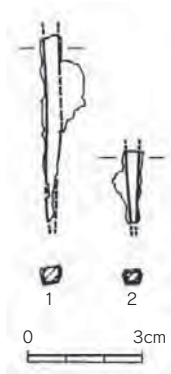
第15図 3B号墓実測図 (S=1/50)



第16図 4号墓実測図 (S=1/50)

左右の屍床と区画され、それらより、よりやや高い場所に位置する。左右の屍床は、奥屍床との仕切の位置を決めた後に造られたと考えられる。その規模と形態は、左右とも、ほぼ同じである。奥屍床は、左右屍床より、やや雑な造りである印象をうける。左右の壁面も、左右屍床の側壁から、若干、左側にずれており、左右屍床の造成後に追加して造り足した可能性も考えられる。ただし、ノミ痕の大きさや方向等の違いは確認できず、その時間差がどの程度であったのかは分からない。

左右屍床横の仕切は、屍床面を掘りくぼめることと通路の掘削により造り出される。それぞれには、通路に向かう排水溝が1条ずつ、ほぼ、並んだ位置に刻まれている。奥屍床前の仕切は、屍床面の掘りくぼめ方



第17図
4号墓出土遺物
(鉄製品)

が少ないため、やや低い。こちらにも、通路に向けての排水溝が1条、刻まれている。

通路は、奥屍床から羨道へ向かってほぼまっすぐに掘削されており、手前側でもあまり広がらない。屍床面よりもかなり低くまで掘削され、その高低差は大きい。同時に左右屍床の区画の役割を果たしている。

遺物 出土していない。

7 6号墓 (第19図)

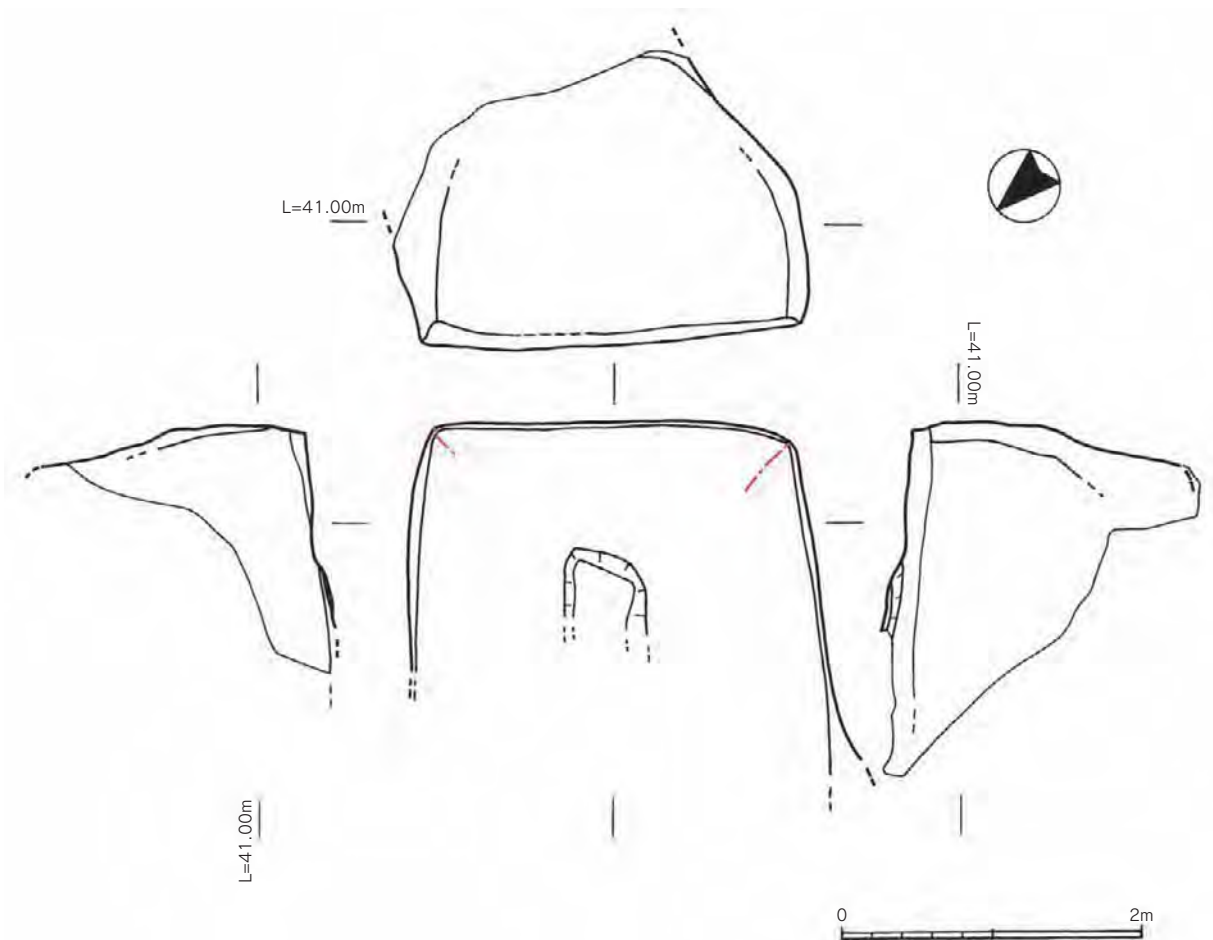
遺構 上段、最も左に位置する。主軸方向は、N53° Wで北西に開口している。

横穴の残存状況は悪く、崖面の崩壊により、玄室も半分以下しか残っていない。壁面の風化の度合いは激しく、横穴墓の観察に支障があるほどである。

玄室の残存している部分の規模は、278cm、238cm、高さ206cmである。玄室の平面形態については、長方形であったと推定できる。また、奥壁から天井部へかけての形態から判断すると、天井部は、家形かと思わ



第18図 5号墓実測図 (S=1/50)



第19図 6号墓実測図 (S=1/50)

れるが、判断することはできなかった。

仕切については、風化が激しく、確認することはできなかった。後世に削平されているのかも知れない。また、通路については、最も奥の部分の痕跡をわずかながら確認した。このことから、奥屍床を含めた三つの屍床が配置されていたと考える。ただし、その痕跡は、確認できなかった。

遺物 鉄器が1点、出土した (第20図)。

出土したのは、鉄鏃である。小型の三角形鏃である。頸部が、途中から欠損している。残存長は、1.5cm。身部の幅は1.1cm、厚さは推定で0.3cmである。身部は、片丸造りかと思われる。



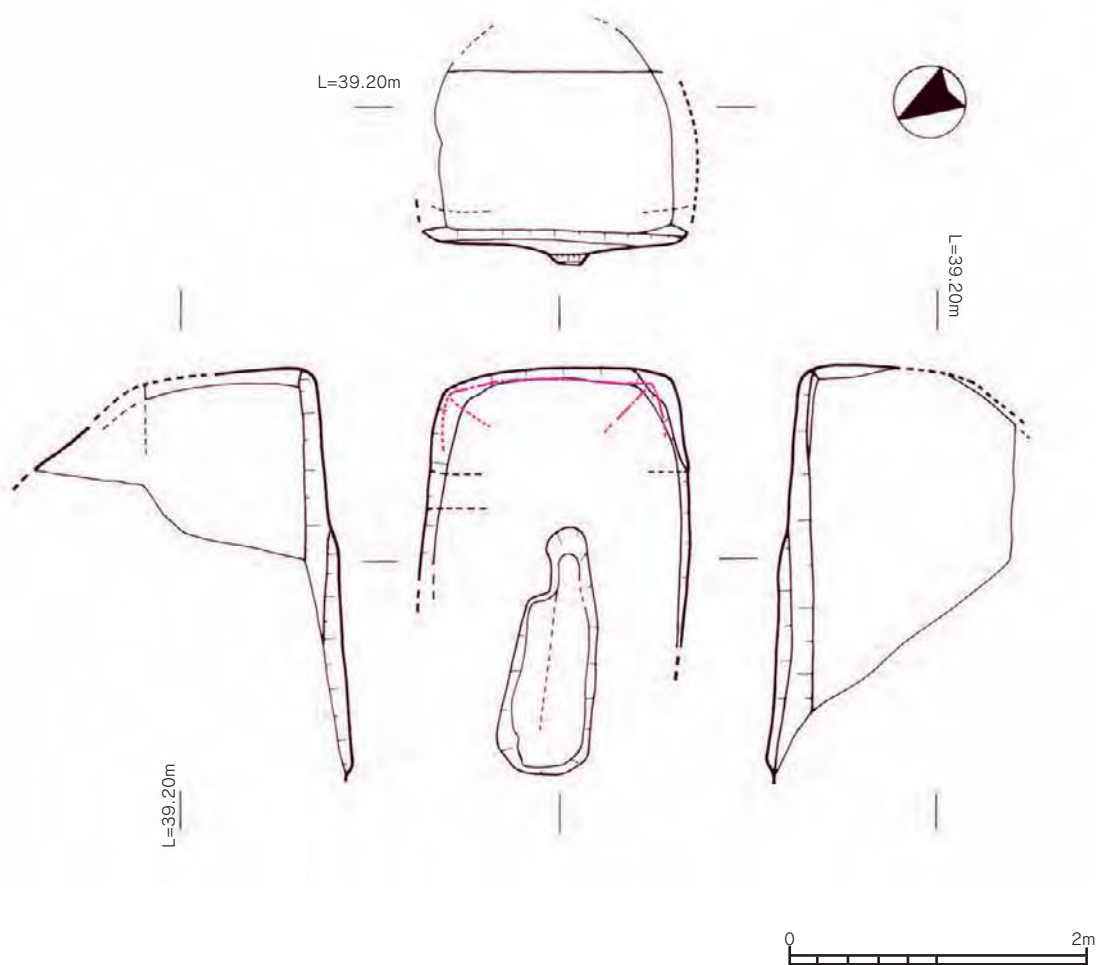
第20図
6号墓出土遺物
(鉄器)

8 7号墓 (第21図)

遺構 中段、左から2番目に位置する。主軸方向は、N63° Wで北西に開口している。

自然崩壊と近現代の2次利用のため、残存状況は非常に悪い。中で焚き火をした痕跡があり、壁面の崩壊度も激しかった。玄室の奥側、約3分の1程度しか残っておらず、通路の痕跡と側壁及び側壁の傾斜により、わずかに、その概要を推定することができる。

奥壁には、一部、軒先線が確認できた。天井部の形態は、家形であったと考える。



第21図 7号墓実測図 (S=1/50)

玄室の残存部の規模は、幅176cm、奥行270cm、高さ213cmである。玄室の平面形態は、やや細長い長方形であったと考えられる。細長い形態であったのは、左右の横穴墓の間に、後で築造したからである可能性を考えている。壁面や玄室の角の掘削は、直線的であったのではないかと推定している。

6号墓と同様に、通路の奥側の痕跡を確認したため、奥屍床を含む三つの屍床があったと考える。ただし、それぞれの形態や規模については、不明である。通路は、手前側でやや左側に広がるため、左屍床は、手前側が狭くなるいびつな形であったと考えられる。なお、仕切については、その痕跡も確認できない。

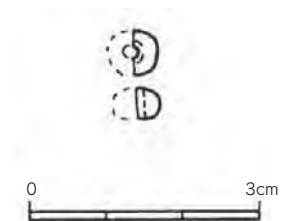
遺物 ガラス小玉（第22図）と鉄製品（第23図1～7）が出土した。

ガラス小玉は、排土を水洗フルイにかけた際に検出した。半分が欠損しており、径5.5mm、厚さ4.0cm、孔径1.5mmである。重量は、0.08gである。

鉄製品は、6・7は不明であるが、その他は、鉄釘である。

1は、残存長3.6cm。断面形は、0.4cm×0.4cmの方形を呈する。頭部は、1.1cm×0.4cmの長方形である。2は、先端部のみ、欠損している。残存長3.4cmである。断面形は、0.3cm×0.2cmの方形である。頭部は、径0.7cmで、0.45cmの厚みをもつ。3は、残存長3.1cm。断面形は、0.4cm×0.35cmの方形。頭部は、0.7cm×0.4cmの長方形である。4は、先端部が欠損している。残存長3.8cm。断面形は、0.4cm×0.35cmの方形で

ある。頭部は、0.9cmの幅で、厚さ0.2cmである。5は、残存長3.5cm。断面形は、0.2cm×0.15cmの方形である。6は、サビのため、詳細は不明であるが、残存長は、推定3.2cm。断面形は、0.25cm×0.2cmの方形である。7は、残存長2.9cm。断面形は、0.5cm×0.2cmの方形である。



第22図 7号墓出土遺物 (ガラス玉)

9 8号墓 (第24図)

遺構 下段、左から2番目に位置する。主軸方向は、N37° Wで北西に開口している。主軸方向は、5号墓とほぼ同じである。

第5表 7号墓出土ガラス小玉観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|
| 22 | | 排土 | 緑 | 5.5 | 4.0 | 1.5 | 0.08 | 50% |

天井部から、左右屍床の手前から約3分の1程度の部分まで、重機により削平されていた。玄室の左奥の部分において、左隣の10号墓と貫通している。これは、8号墓を掘削中に、誤って、先に造られていた10号墓の側壁を打ち破ってしまったものと考えられる。そのため、8号墓は途中で掘削を中止して、奥屍床を配置しない構造となったと考えている。

左右側壁及び奥壁との境には、軒先線が天井部との掘削の段差により明瞭に示される。天井部の形態については、家形を呈すると考えられる。

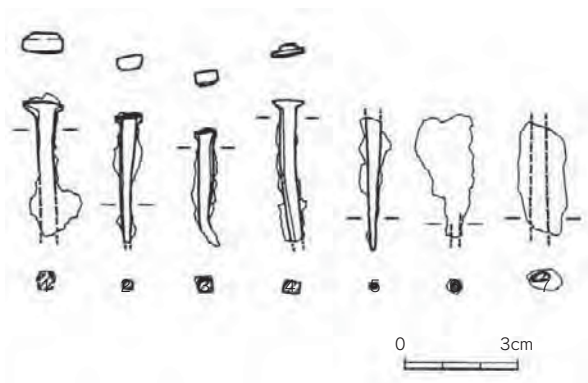
玄室の平面形態は、奥屍床が無い関係で、横長の長方形を呈する。側壁の掘削は、やや外側に湾曲するが、特別に目立つものではない。玄室の規模は、残存部で、幅260cm、奥行211cm、高さ198cmを測る。玄室内は、前述のとおり、奥屍床を配置せず、左右の屍床のみが存在する。

これらを区画する通路と仕切は、やや雑な造りである。仕切は、通路の掘削と屍床面を掘りくぼめることによって造り出されるが、その高さは、やや低めである。

通路は、他の横穴墓と比べてやや狭い。広さについても、奥壁側が狭く手前が広く造られている。また、その深さは、屍床面と比べてやや低い程度である。奥壁側に比べて手前側が低く掘削されている。

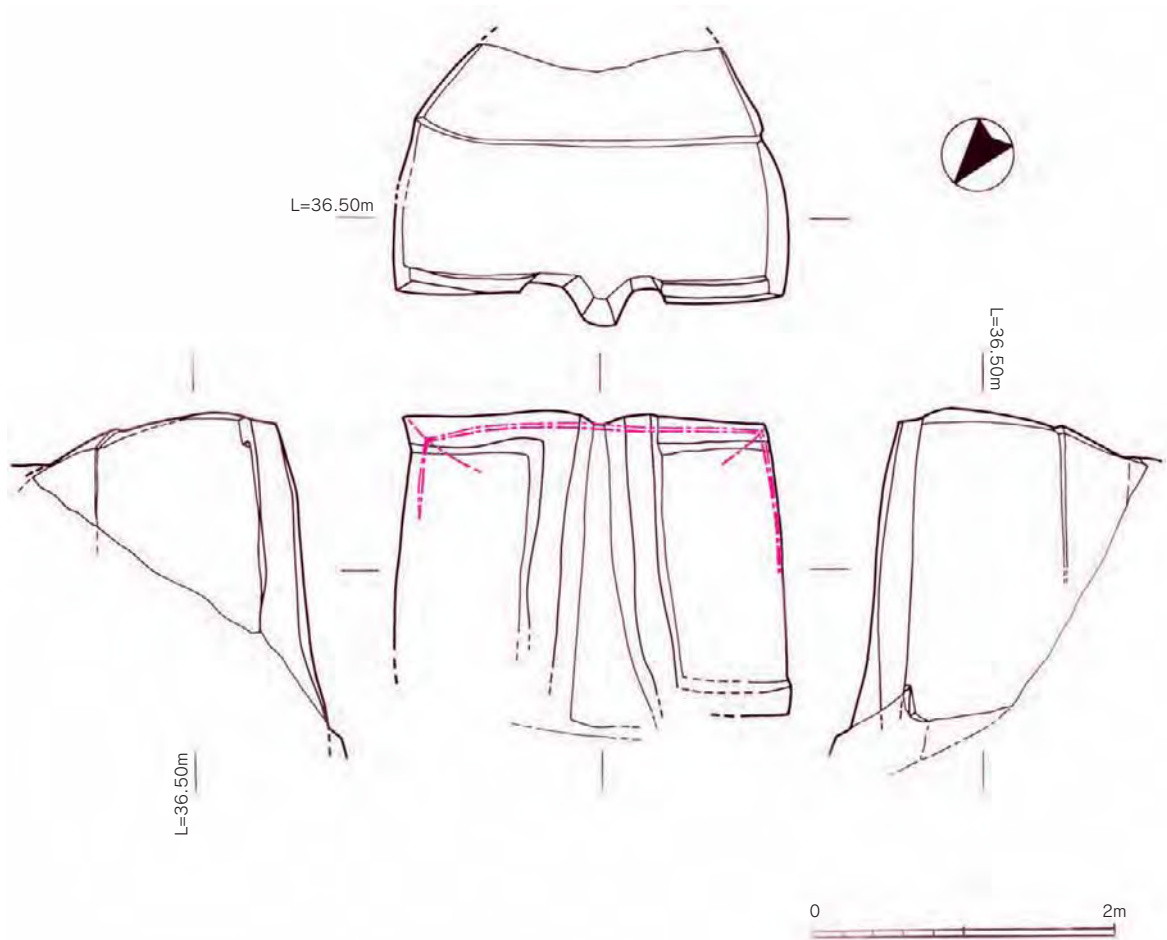
遺物 出土した遺物は、馬具、鉄鎌、刀、耳環、勾玉、管玉、ガラス小玉である。出土遺物の量が多いが、その出土状況から判断すると、遺物本来の位置であったと判断できるものは少ない。屍床面に接するか、ごく近い高さから出土した遺物について、その出土遺物の分布を示した(第25図)。また、右屍床で検出した馬具とその周辺の遺物については、その出土状況を示している(第26図)。

馬具は、2点が出土した(第27図1・28図2)。1・2ともほぼ同じ形態であり、2点で1対であったと思われる。



第23図 7号墓出土遺物 (鉄製品)

いずれも、鉸具、三連の兵庫鎖、鐙が繋がった状態で出土している。鐙については、鉄板部分のみ残る。鐙本体は、木製であったため、消失したと考えている。2点について、現状の実測図とともに推定復元図を同時に示した。右端が実測図で、左二つが復元推定図である(縦・横の復元図)。鉸具の構造と、兵庫鎖との連結部分については、サビのため観察が難しく、X線写真等を参考に、推定して復元した。推定部分については、現状実測図において破線で示した。



第24図 8号墓実測図 (S=1/50)

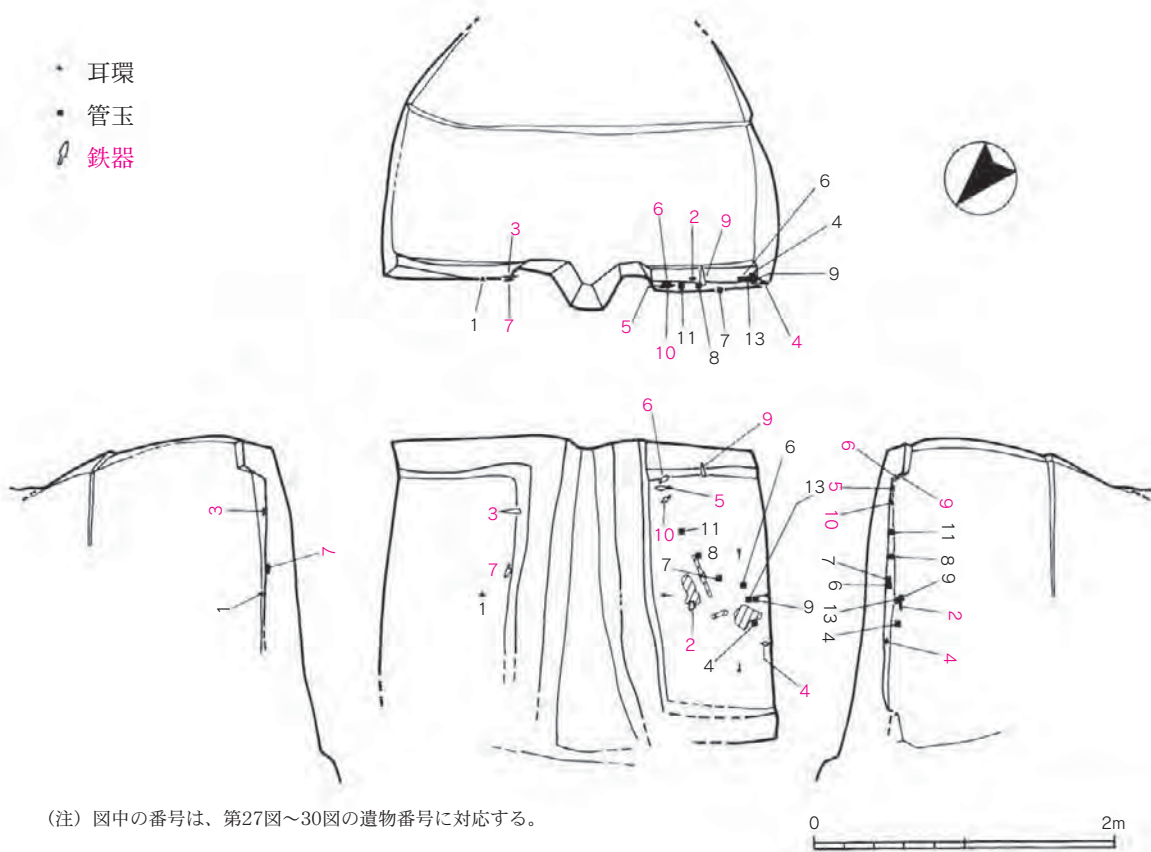
各部の法量を記す。1は、鉸具が長さ8.2cm、最大幅5.35cm、断面径0.75cm×0.8cmである。三連の鎖については、上部のものから、一連目は、長さ10.8cm、最大幅3.3cm、断面径0.75cm×0.7cm。二連目は、長さ8.5cm、最大幅3.7cm、断面径0.85cm×0.9cm。三連目は、長さ8.5cm、最大幅3.6cm、断面径0.8cm×0.9cmである。錠は、長さ10.7cm、最大幅4.0cm、断面径2.0~2.4cm×0.3cmである。全体の復元長は、37.3cmとなる。錠の鉄板の部分には、左右に2点ずつ、計4点の鉸が観察される。鉸の大きさは、円形の頭の径0.5cm、長さ1.6cm、厚さ0.4cmである。

2も同様に、その各部の法量を記す。2は、具が長さ8.4cm、最大幅5.2cm、断面径0.8cm×0.7cmである。三連の鎖については、上部のものから、一連目は、長さ7.9cm、最大幅3.8cm、断面径0.9cm×0.7cm。二連目は、長さ7.6cm、最大幅3.45cm、断面径0.9cm×0.89cm。三連目は、長さ8.5cm、最大幅は推定で3.5cm、断面径0.8cm×0.8cmである。錠は、鉄板の下部が欠損している。残存長9.6cm、最大幅4.1cm、断面径2.0~2.2cm×0.2~0.3cmである。全体の復元長は、残存部で33.6cm、復元すると34.8cmとなる。錠の鉄板の部分には、左右に2点ずつ、計4点の鉸が観察される。鉸の大きさは、円形の頭の径0.6cm、長さ1.6cm、厚さ0.4cmである。

鉄鏃は、8点、出土した(第29図1~8)。

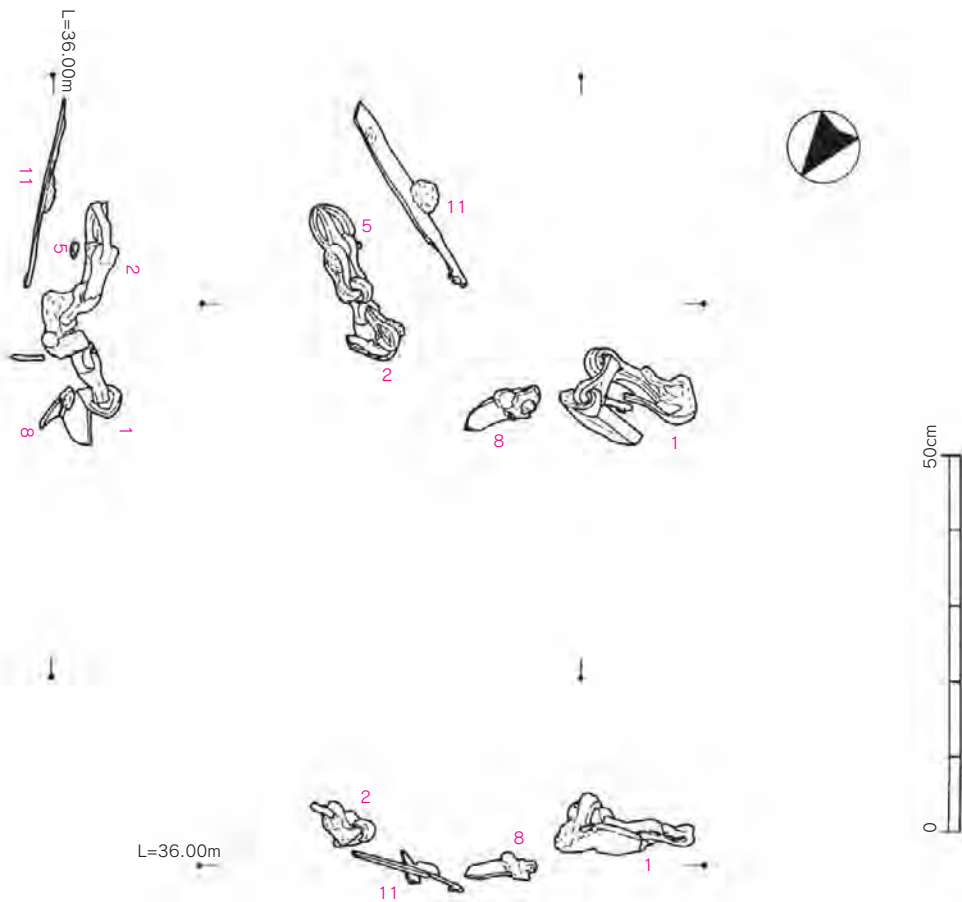
1~2は、圭頭鏃である。1は、茎の基部が若干、欠損している。鏃身関部は、X線写真で段が確認できるが、その形状は不明確である。斜関か。残存長12.6cm。身部は、長さ7.8cm、幅3.3cm、厚さ0.3cmである。茎部の残存長7.8cmで、径約5mmの丸みのある正方形を呈する。茎部には、木質が残存している。2は、完存してい

- ◆ 耳環
- 管玉
- ◊ 鉄器

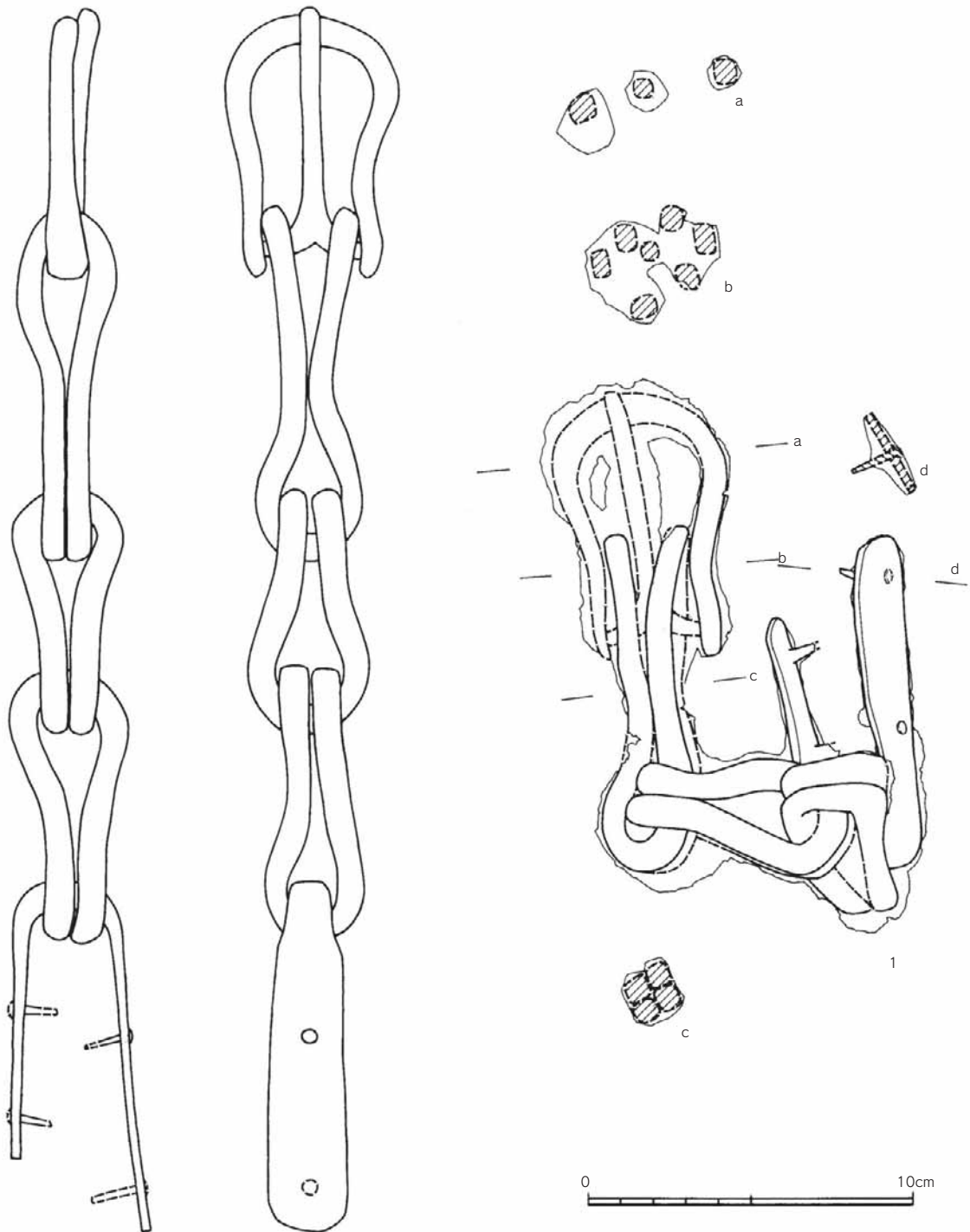


(注) 図中の番号は、第27図～30図の遺物番号に対応する。

第25図 8号墓出土遺物分布図 (S=1/50)



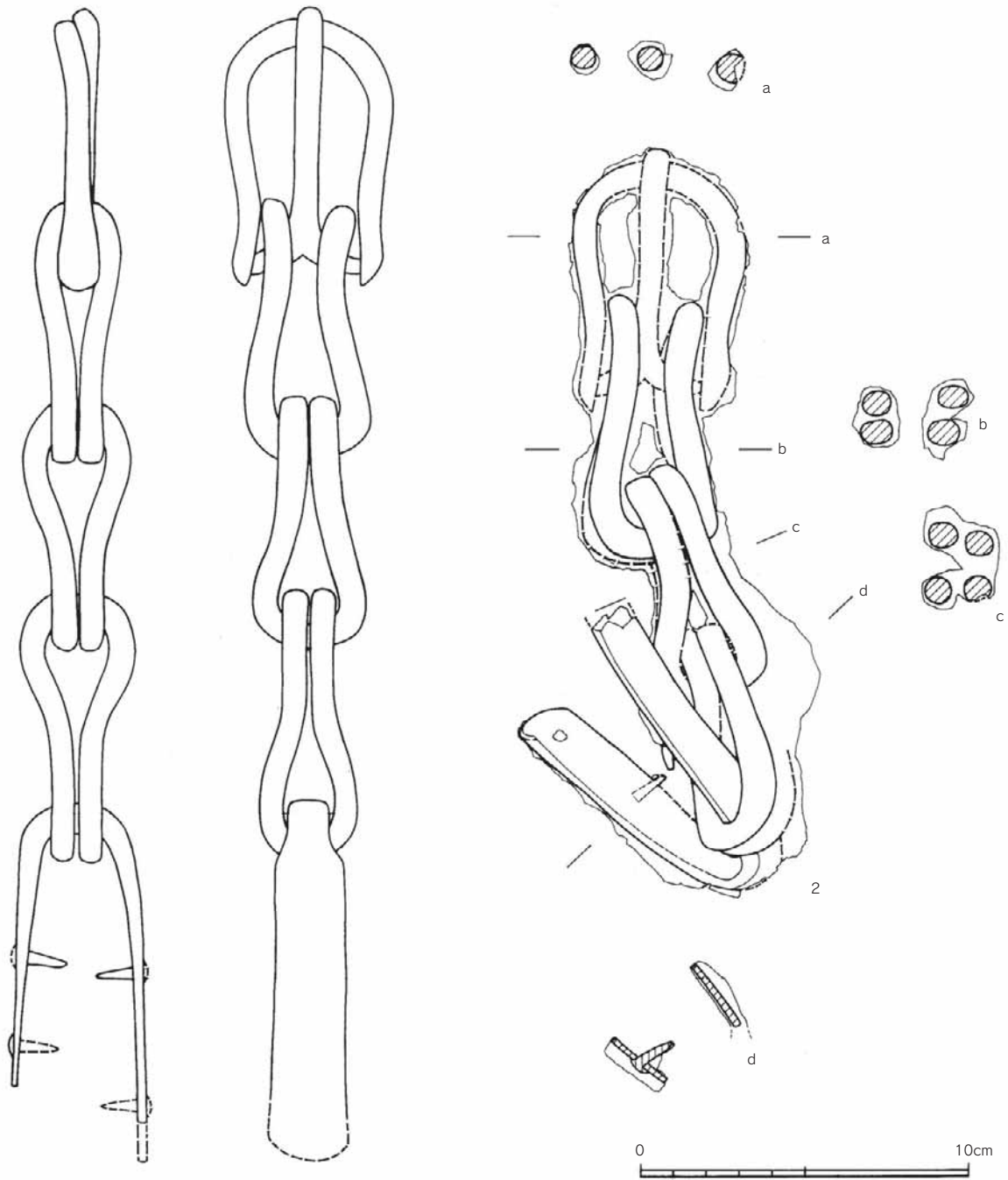
第26図 8号墓馬具出土状況



第27図 8号墓出土遺物（馬具）

と思われる。全長12.0cm。身部は、長さ6.6cm、身部幅2.8cm、厚さ0.3cmである。茎部は、長さは、5.4cmで、断面形は、約0.5cm×0.9cmのやや長方形のやや丸みを帯びた長方形を呈する。木質が付着する。関部は、肉眼での観察は不可能であるが、X線写真で棘状の突起を確認した。

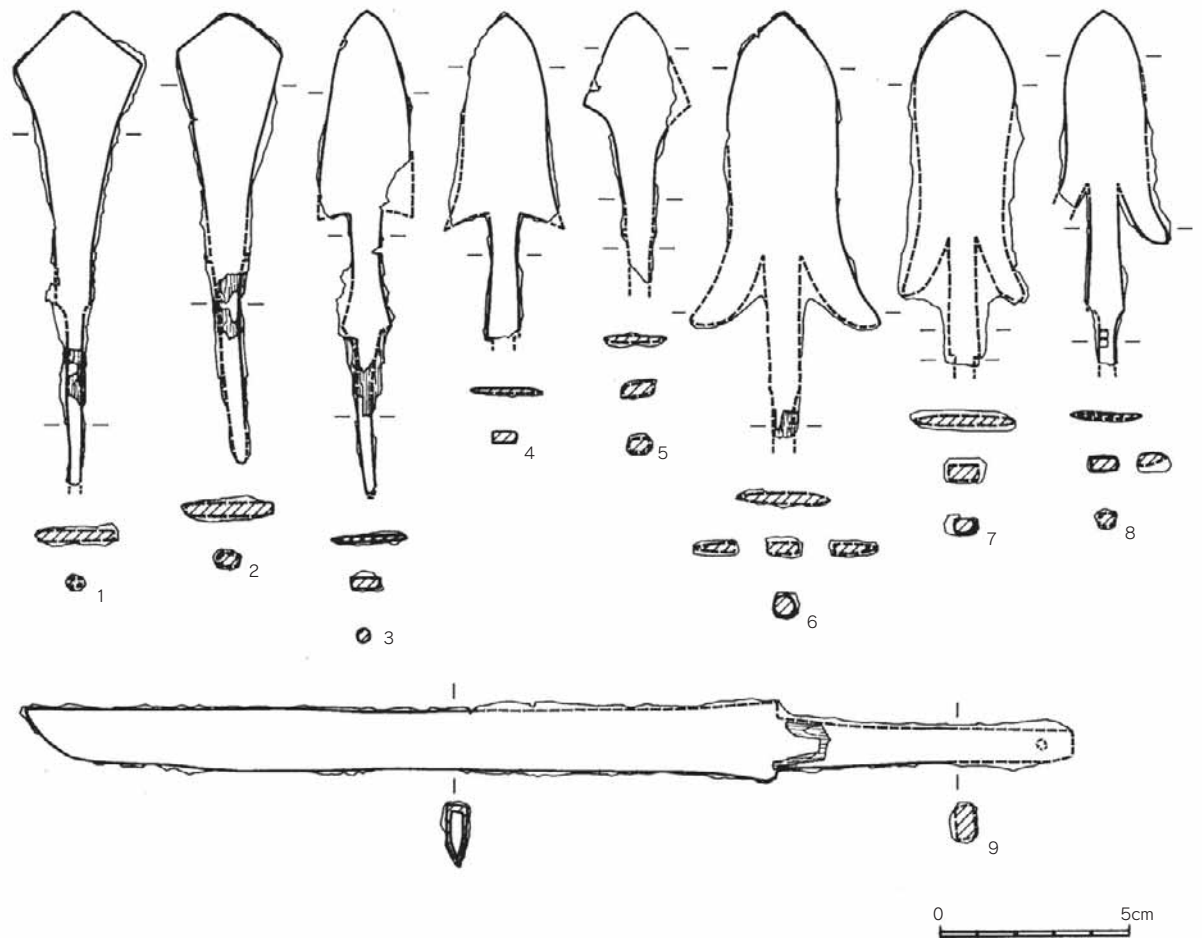
3～5は、三角形鏃である。3・4は、身部が長三角形で、浅い逆刺を有する。3は、茎部の基部と身部が一部、欠損している。残存長12.8cm。身部の残存長5.5cm、残存幅2.3cmである。関は存在するが、その形状は不明確である。頸部は、長さ3.0cmで、断面形は細長い長方形である。茎部の残存長は4.4cmで、断面形は円形を呈し、木質が残存する。4は、茎部が欠損。残存長8.6cm。身部は、長さ5.7cm、幅は推定3.2cm、厚さは0.15



第28号 8号墓出土遺物（馬具）

cmで薄く扁平な造りである。頸部は、3.3cmが残存するが、関部は欠損のため残っていない。5は、茎部が欠損している。全体がサビのため、観察が難しい。身部の形状は三角形で、斜行頸部である。残存長7.2cm。身部は、長さ2.5cm、幅は推定で2.5cm前後、厚さも推定で0.2cmほどである。頸部は、長さ3.5cmである。関部は、X線写真で棘状の突起を確認した。茎部は、1.2cmのみが残り、断面形は、0.55cm×0.4cmの長方形を呈する。

6～8は、深い逆刺をもつ腸袂式の三角形鎌である。6は、茎部が一部、欠損。残存長11.3cm。身部は、長さ7.9cm、幅5.1cm、厚さ0.3cmである。頸部は、長さ3.5cmで、断面形は、0.85cm×0.3cmの長方形を呈する。



第29図 8号墓出土遺物（鉄器）

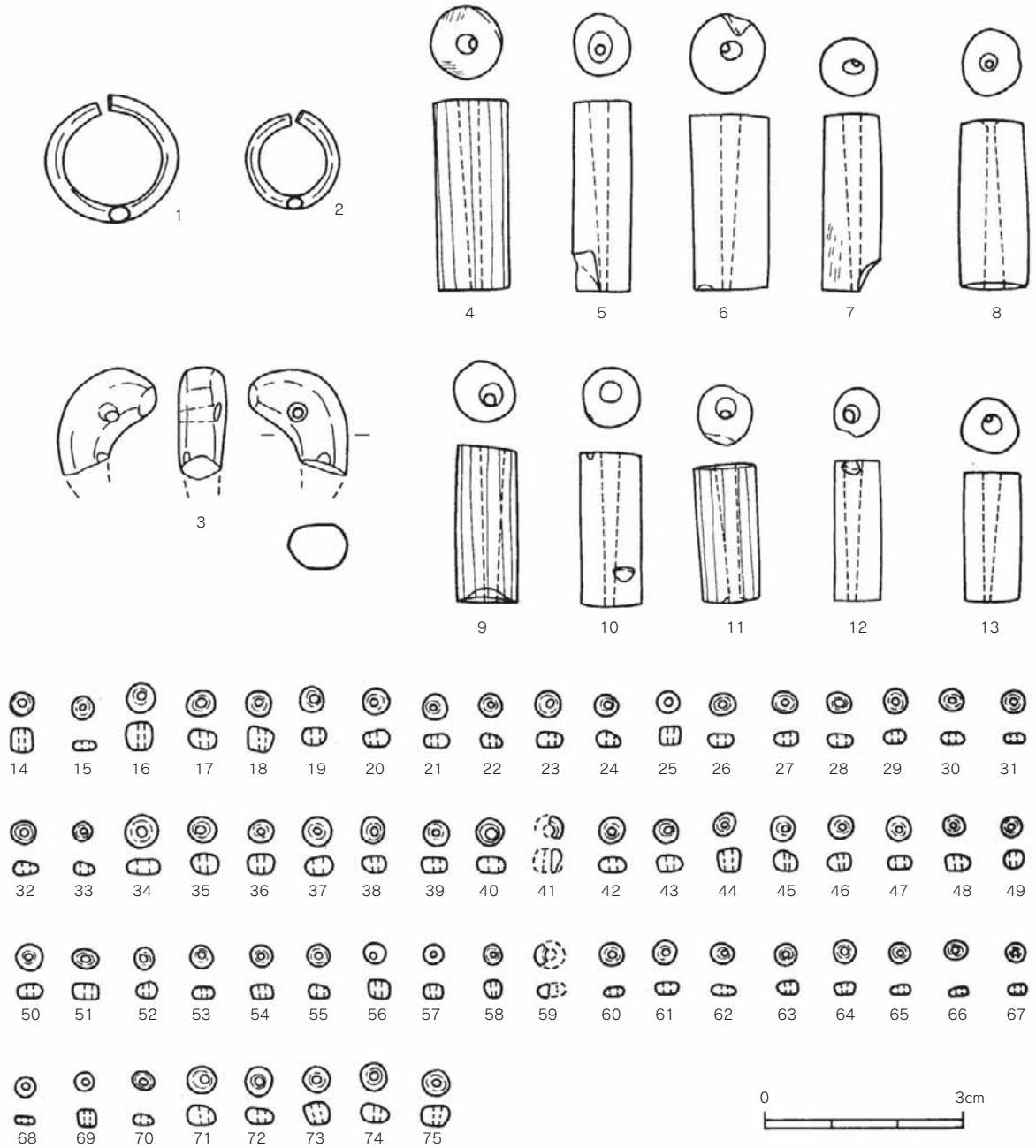
逆刺や関部については、X線写真により確認した推定ラインである。有関であるが、その形状はやや不明確である。茎部は、長さ1.3cmが残存しており、断面は円形に近い。木質が残存している。7は、基部がほとんど欠損している。また、サビにより詳細を観察するのが難しい。X線写真でその形状を確認した。関部は角関かと思われるが、やや不明確である。残存長9.45cm。身部は、長さ7.75cm、幅3.2cm、厚さは推定0.3cmで扁平な造りである。頸部は、推定で長さ3.2cm、断面形は、0.8cm×0.45cmの長方形を呈する。茎部は、0.25cmを残し欠損しているが、その断面形は、方形である。8は、茎部が、一部、欠損している。全長9.4cm。身部は、長さ6.2cm、幅は復元で約3.5cm、厚さは推定0.15cmである。頸部は、長さ3.4cmで、断面形は、長方形を呈する。茎部は、残存長が1.4cmで、断面形は、0.4cm×0.4cmのほぼ正方形である。関部は斜関かと考えているが、やはり、サビのため、不明確である。

9は、刀である（第29図9）。右屍床で、馬具の近くから出土した。全長27.7cm。身部は、長さ20.0cm、幅1.7cm、厚さ0.7cmである。茎部長は、7.7cm、幅1.3cm～0.9cm、厚さ0.5cm～0.6cmを測る。茎部には、木質が残存している。基部には、X線写真で目釘穴かと思われる穴を確認した。関は角関と考えているが、X線写真でも、その形状は不明瞭であった。

耳環は、2点、出土した（第30図1・2）。1・2とも、銀製である。

1は、長（横）径19.0mm、短（縦）径18.5mm、厚さ3.0mmを測る。重量は、2.56gである。2は、長（縦）径15.0mm、短（横）径13.7mm、厚さ2.0mmを測る。重量は、1.24gである。

3は、水晶製の勾玉である（第30図3）。一部、欠損しており、残存長は16.0mmである。幅14.5mm、厚さ



第30図 8号墓出土遺物（装身具）

第6表 8号墓出土装身具観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 遺物 種類 | 材質 | 色調 | 幅 (mm) | 径 (mm) | 長さ (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----------|----|--------|-----------|-----------|-----------------|------------|------------|-----------|------|
| 30 | 1 | No.7 | 耳環 | 銀 | 黒ずんだ金色 | | | 18.5(縦)×19.0(横) | 3.0 | | 2.56 | 完形 |
| 30 | 2 | 右屍床 | 耳環 | 銀 | 黒ずんだ銀色 | | | 15.0(縦)×13.7(横) | 2.0 | | 1.24 | 完形 |
| 30 | 3 | 右屍床 | 勾玉 | 水晶 | 白濁した透明 | 14.5 | | (16.0) | 6.5 | 3.0 | 2.04 | 70% |
| 30 | 4 | No.1 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 18.0 | 28.5 | | 3.0 | 6.07 | 完形 |
| 30 | 5 | No.18 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 9.0 | 28.0 | | 4.0 | 3.93 | 90% |
| 30 | 6 | No.11 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 12.0 | 26.0 | | 3.0 | 6.71 | ほぼ完形 |
| 30 | 7 | No.10 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 8.0 | 26.0 | | 3.0 | 3.57 | 90% |
| 30 | 8 | No.9 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 10.0 | 24.5 | | 3.0 | 4.60 | 完形 |
| 30 | 9 | No.12 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 9.0 | 23.4 | | 3.5 | 3.69 | 完形 |
| 30 | 10 | 左屍床 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 9.0 | 23.0 | | 3.0 | 3.40 | 完形 |
| 30 | 11 | No.8 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 8.5 | 21.0 | | 3.0 | 2.76 | 完形 |
| 30 | 12 | 右屍床 | 管玉 | 碧玉 | 淡い深緑色 | | 8.0 | 21.0 | | 2.5 | 1.71 | ほぼ完形 |
| 30 | 13 | No.13 | 管玉 | 碧玉 | 深緑色 | | 8.5 | 19.0 | | 2.5 | 2.64 | 完形 |

第7表 8号墓出土ガラス小玉観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 | 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|
| 30 | 14 | 右屍床 | 青 | 3.5 | 3.5 | 1.3 | 0.06 | 完形 | 30 | 45 | 左屍床 | 緑 | 3.5 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 30 | 15 | 右屍床 | 青 | 3.5 | 1.5 | 1.3 | 0.04 | 完形 | 30 | 46 | 左屍床 | 緑 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 30 | 16 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 4.0 | 1.5 | 0.10 | 完形 | 30 | 47 | 右屍床 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 95% |
| 30 | 17 | 左屍床 | 水色 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 30 | 48 | 右屍床 | 緑 | 3.0 | 2.3 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 30 | 18 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 3.7 | 1.3 | 0.06 | 80% | 30 | 49 | 右屍床 | 緑 | 3.0 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 30 | 19 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 2.7 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 30 | 50 | 右屍床 | 緑 | 3.8 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 20 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 2.7 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 30 | 51 | 右屍床 | 緑 | 3.8 | 2.3 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 21 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 30 | 52 | 右屍床 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 22 | 左屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 30 | 53 | 左屍床 | 緑 | 3.2 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 23 | 左屍床 | 水色 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 30 | 54 | 左屍床 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 24 | 左屍床 | 水色 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 30 | 55 | 右屍床 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 25 | 左屍床 | 水色 | 3.3 | 2.7 | 1.3 | 0.04 | 完形 | 30 | 56 | 右屍床 | 緑 | 3.0 | 2.8 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 26 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 30 | 57 | 右屍床 | 緑 | 3.0 | 2.8 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 27 | 右屍床 | 水色 | 3.8 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 30 | 58 | 右屍床 | 緑 | 2.5 | 3.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 30 | 28 | 左屍床 | 水色 | 3.7 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 30 | 59 | 右屍床 | 緑 | | 2.0 | | 0.01 | 25% |
| 30 | 29 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 30 | 60 | 右屍床 | 緑 | 3.8 | 1.5 | 1.5 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 30 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.3 | 0.03 | 完形 | 30 | 61 | 左屍床 | 緑 | 3.7 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 31 | 右屍床 | 水色 | 3.3 | 1.5 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 30 | 62 | 右屍床 | 緑 | 3.5 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 32 | 左屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.3 | 0.02 | 完形 | 30 | 63 | 左屍床 | 緑 | 3.3 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 33 | 右屍床 | 水色 | 2.8 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 | 30 | 64 | 左屍床 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 34 | 右屍床 | 緑 | 5.0 | 2.0 | 2.0 | 0.08 | 完形 | 30 | 65 | 左屍床 | 緑 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 35 | 左屍床 | 緑 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | 0.06 | 完形 | 30 | 66 | 左屍床 | 緑 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 36 | 左屍床 | 緑 | 3.7 | 3.0 | 1.0 | 0.06 | 完形 | 30 | 67 | 右屍床 | 緑 | 2.7 | 1.7 | 0.8 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 37 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 4.0 | 2.5 | 0.05 | 完形 | 30 | 68 | 右屍床 | 緑 | 2.2 | 1.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 30 | 38 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 30 | 69 | 左屍床 | 緑 | 2.9 | 2.5 | 1.0 | 0.01 | 完形 |
| 30 | 39 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.2 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 30 | 70 | 右屍床 | 緑 | 3.0 | 1.5 | 1.0 | 0.01 | 完形 |
| 30 | 40 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.0 | 1.7 | 0.04 | 完形 | 30 | 71 | 左屍床 | 黄色 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.07 | 完形 |
| 30 | 41 | 左屍床 | 緑 | | 3.0 | | 0.04 | 25% | 30 | 72 | 右屍床 | 黄色 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.06 | 完形 |
| 30 | 42 | 左屍床 | 緑 | 3.8 | 2.0 | 1.2 | 0.04 | 完形 | 30 | 73 | 左屍床 | 黄色 | 4.0 | 3.3 | 1.5 | 0.06 | 完形 |
| 30 | 43 | 右屍床 | 緑 | 3.7 | 4.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 30 | 74 | 右屍床 | 黄色 | 3.2 | 3.0 | 1.0 | 0.06 | 完形 |
| 30 | 44 | 左屍床 | 緑 | 3.5 | 3.3 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 30 | 75 | 右屍床 | 黄色 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 |

6.5mmを測る。重量は、2.04gである。

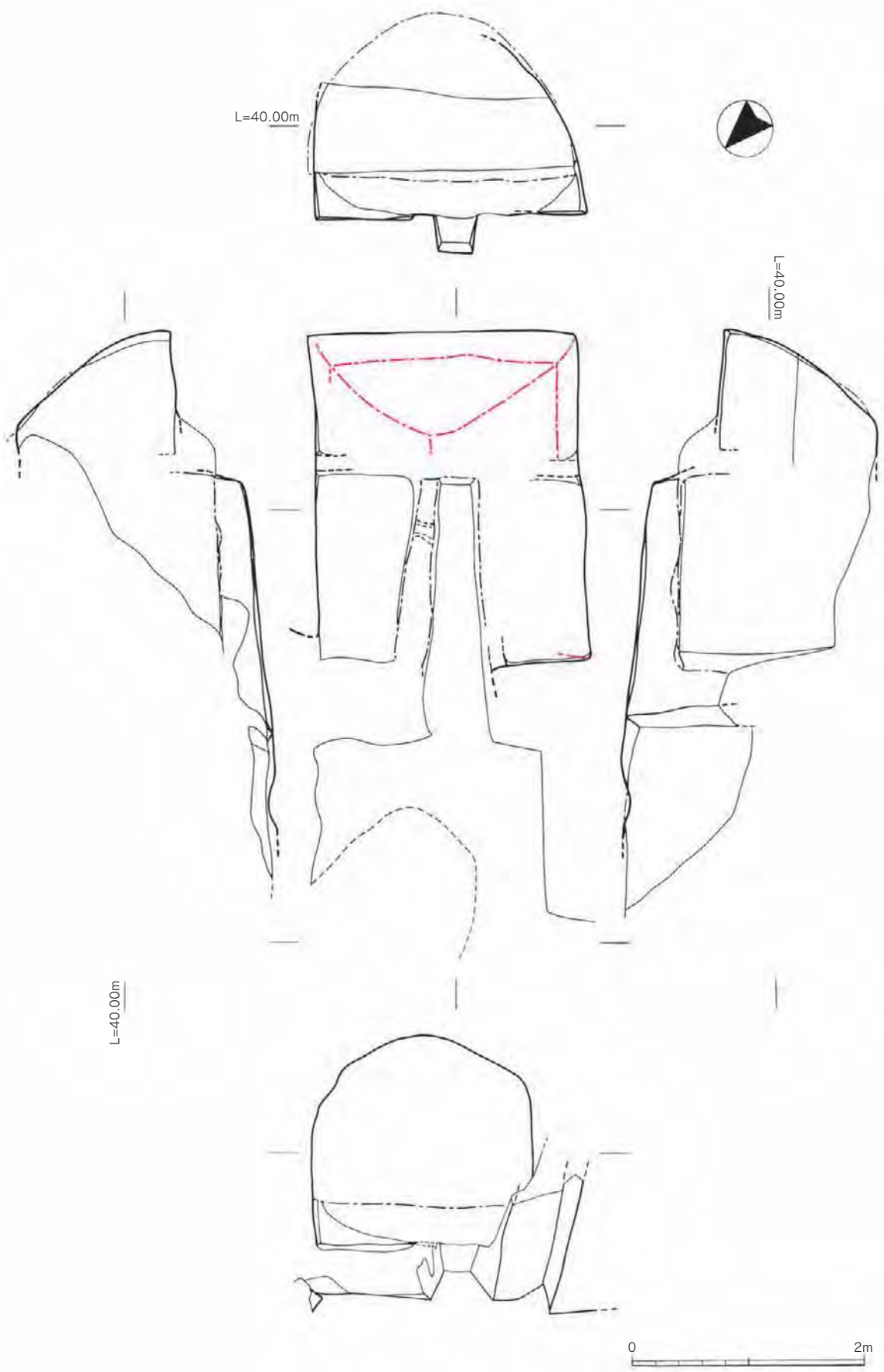
碧玉製の管玉が10点、出土している（第30図4～13）。8と11については、両側からの穿孔であることを確認した。

4は、長さ28.5mm、径18.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、6.07gである。5は、長さ28.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、4.0mm、重量は、3.93gである。6は、長さ26.0mm、径12.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、6.71gである。7は、長さ26.0mm、径8.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、3.57gである。8は、長さ24.5mm、径10.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、4.60gである。

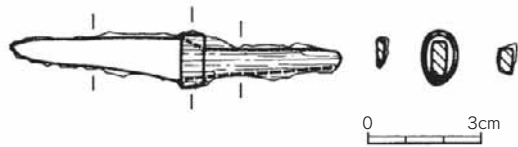
9は、長さ23.4mm、径9.0mmを測る。孔径については、3.5mm、重量は、3.69gである。10は、長さ23.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、3.40gである。11は、長さ21.0mm、径8.5mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、2.76gである。12は、長さ21.0mm、径8.0mmを測る。孔径については、2.5mm、重量は、1.71gである。13は、長さ19.0mm、径8.5mmを測る。孔径については、2.5mm、重量は、2.64gである。

ガラス小玉は、62点、出土した（第30図14～75）。全て、水洗フルイにより検出したため、出土位置については、左右の屍床の違いのみを示した（第7表）。

色調は、青色・水色・緑色・黄色の4種類であるが、黄色のガラス小玉については、その材質と産地が注目されるが、詳細について、検討することができなかった。なお、それぞれの法量等の詳細については、煩雑になるため、観察表をもってかえたい（第7表）。



第31图 9号墓实测图 (S=1/50)



第32図 9号墓出土遺物（鉄器）

10 9号墓（第31図）

遺構 中段、最も左に位置する。主軸方向は、N48° Wで、北西に開口している。

横穴は、天井部付近まで斜めに破壊されているが、床面レベルでは、羨道の痕跡までを確認することができた。

羨道部は、残存部で幅200cm、長さ146cmである。羨門部の長さについては、60cmであった。羨道部と羨門部からは、遺物は出土していない。

玄室の平面形態は、正方形に近いやや縦長の長方形である。左右の側壁と奥壁については、ほぼ直線的に掘削されている。その規模は、幅230cm、奥行294cm、高さ212cmである。天井部は、寄棟状の家形を呈し、奥壁と右側壁に軒先線が確認できる。

玄室内は、仕切によって三区区分される。仕切は、破壊されているものの、その破壊痕等から、わずかにその痕跡を確認することができる。また、屍床面そのものは破壊されておらず、その位置関係を把握することは可能である。屍床は、「コ」字形に配置される。奥屍床は、左右の屍床より、若干、高い場所に位置する。通路は、屍床面よりかなり低く掘りくぼめられており、左右屍床との高低差がある。奥屍床側から手前側へ向けて傾斜をつけて低くなっている。また、その広さについても、手前側が、若干、広くなる。左右屍床の大きさは、ほぼ同じと考えられるが、通路が、手前側で左側に広がることから、左屍床は、手前が狭くなるいびつな形となる。

左屍床の仕切には、排水溝と考えられる痕跡を1条、確認した。

遺物 鉄器が1点、出土した（第32図）。

鉄器は、刀子である。屍床面からではなく、排土のフルイの中から出土した。全長8.8cm、身部長4.5cm、身部幅0.8cm、身部厚さ0.2cmである。柄の部分の長さは、4.3cmであり、柄金具が装着されたままであった。また、柄の部分には、柄金具の上まで木質が残存していた。

11 10号墓（第33図）

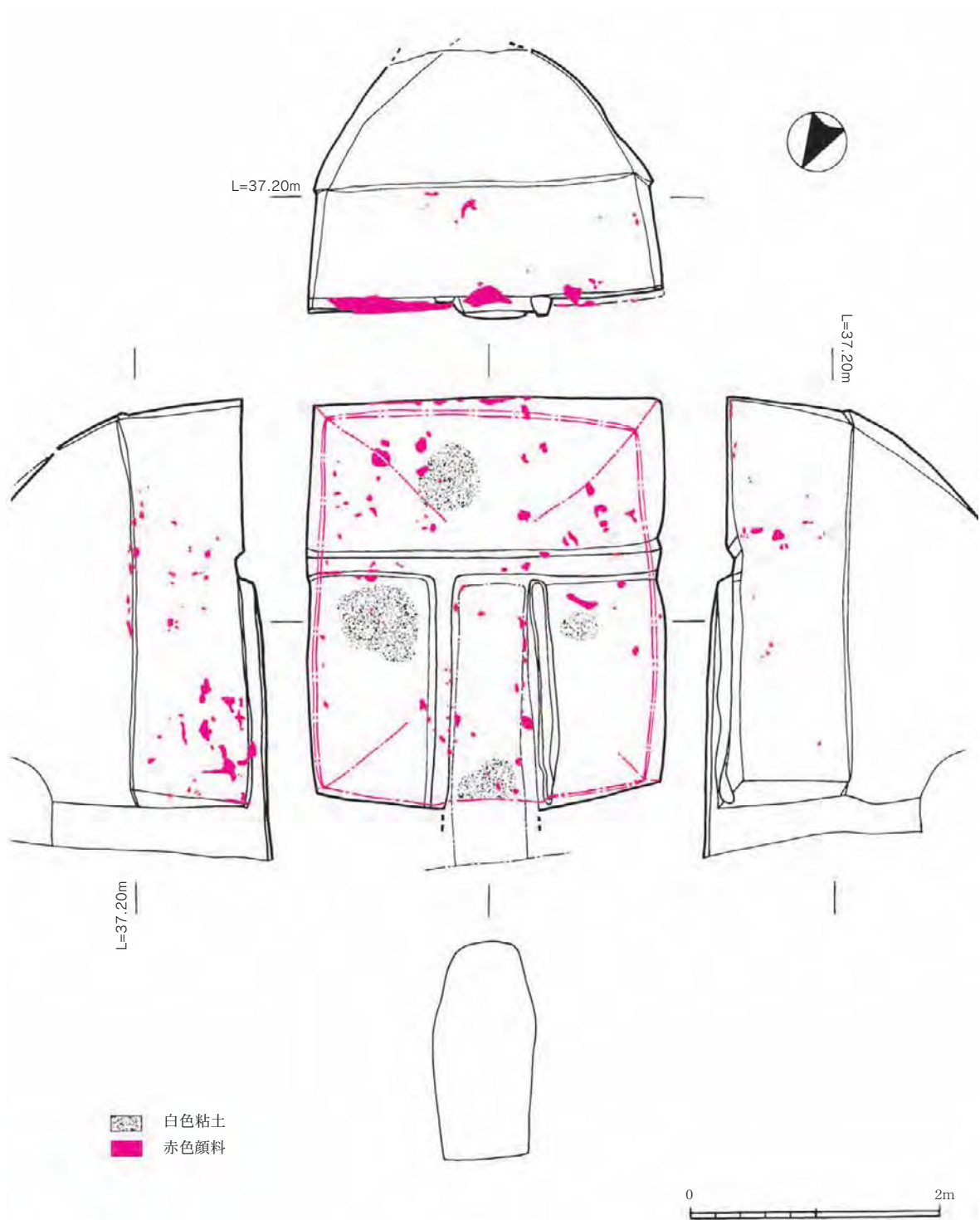
遺構 下段、最も左に位置する。崖面が、道路からやや奥側に離れているため、玄室の残りは最も良い。天井部は、一部、崩壊しているが、玄門の部分まで、その形をとどめている。主軸方向は、N24° Wで北北西に開口している。

羨門部の痕跡と考えているのは、長さ45cmである。ただし、玄室の手前側は、削平をうけており、飾縁も確認できない。この場所の形態が、当時の状態であるのかは断定できない。前庭部は、確認できない。

天井部は、寄棟の屋根を表現した家形を呈する。奥壁及び側壁は、垂直に近い角度でたちあがり、屋根部になると、棟線にむけて角度が急になる。天井部の境には、明瞭な軒先線が表現される。軒先線は、玄室内の壁面を一周する。なお、棟線については、天井部の頂点部分が崩落していたため、確認することができなかった。

玄室の平面形態は、若干、縦長ではあるが、ほぼ正方形である。その規模は、幅276cm、奥行332cm、高さは残存部で222cmである。

玄室内は、仕切によって三区区分される。屍床は、「コ」字形配置である。奥仕切と左仕切は、通路の掘り込みと屍床面を掘りくぼめることで造り出されている。これらは、直線的で、丁寧な造りである。右屍床については、突起状の仕切は存在せず、仕切部分が掘り込まれている。この掘りこみが、横穴墓築造当時のもの

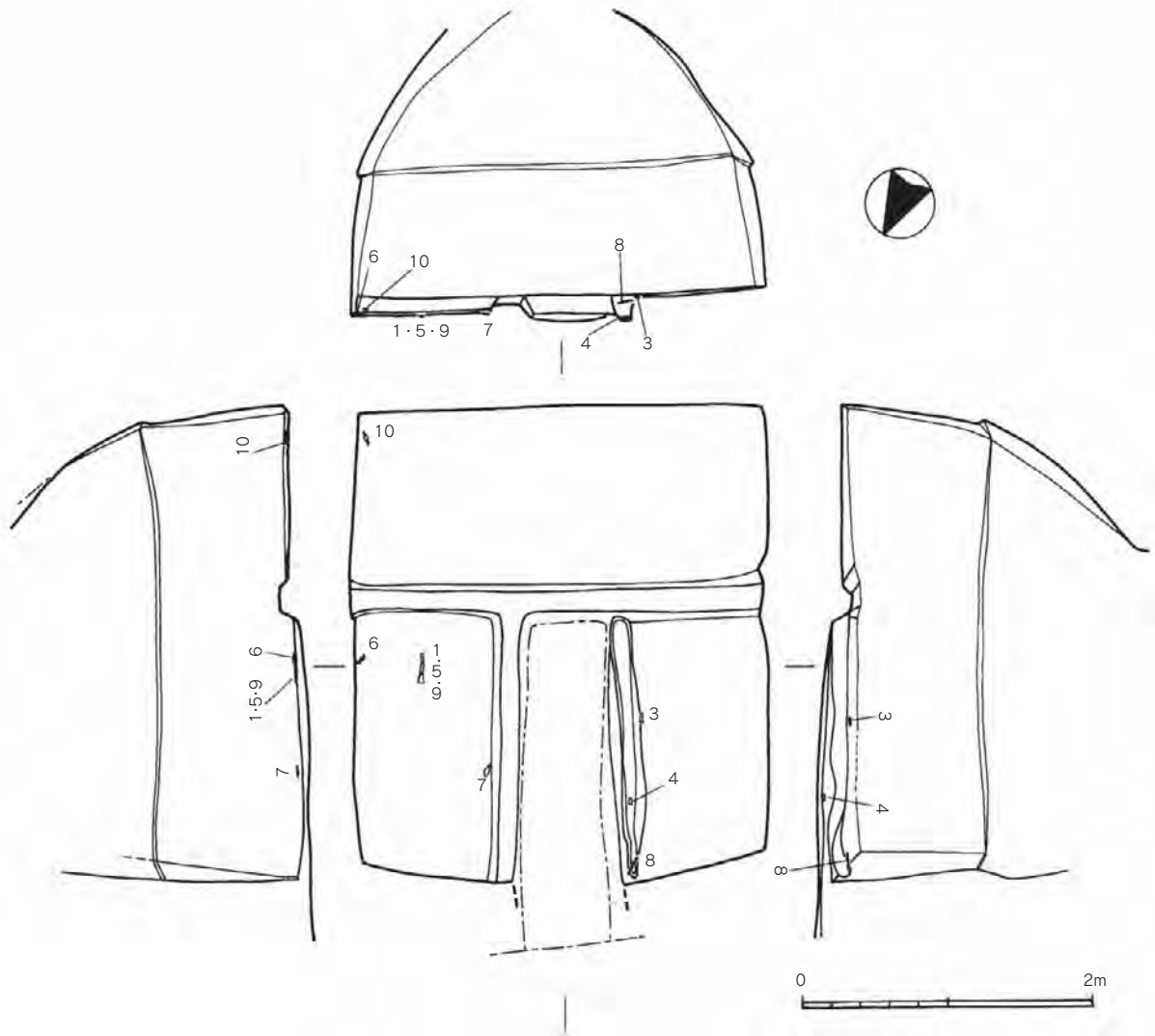


第33図 10号墓実測図 (S=1/50)

であれば、掘りくぼめた穴に板石等をたてて石障としていた可能性もある。ただし、その痕跡は確認できなかった。なお、どの仕切にも排水溝は穿たれていない。屍床が配される高さについては、奥屍床と右屍床は屍床面がほぼ同じである。左屍床が、その他の屍床より、若干、低くなっている。

通路の幅は、広く、奥側と手前側で、その広さに違いはない。その深さは、他の横穴墓に比べると浅く、左右の屍床面からあまり低くならない。また、奥から手前に向けての傾斜もほとんどない。

玄室内には、軒先線より下部にベンガラをぬった跡を確認した。これらによる図柄等の表現は確認できな



(注) 図中の番号は、第35図の遺物番号に対応する。

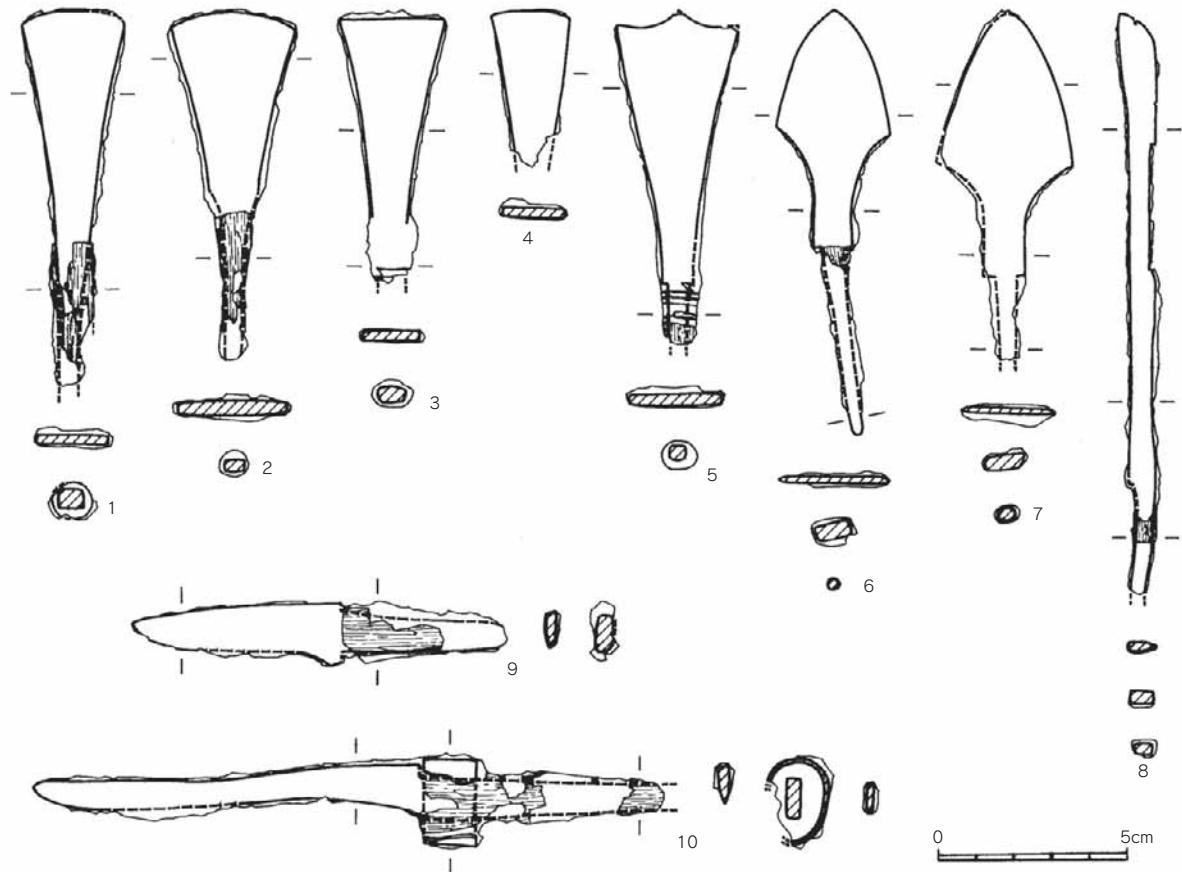
第34図 10号墓出土遺物分布図 (S=1/50)

できなかった。図柄ではないという明確な根拠は無いが、玄室内は、屋根部を除いてほぼ全面がベンガラで塗られていたと考えている。また、玄室内には、白色粘土が堆積していた。ただし、少量であり、その用途は分からなかった。

遺物 玄室内から、鉄鍬、刀子、耳環、ガラス小玉が出土した。出土位置が確認できたものについては、その分布を示した(第34図)。

鉄器は、10点、出土した(第35図1~10)。

1~4は、方頭鍬。1は、基部が一部、欠損。残存長9.9cm。身部長6.2cm、身部幅2.7cm、身部の厚さは、推定で0.3cmである。茎部の長さは、残存長3.7cm。刃部はやや丸みを帯び、鍬身はやや、長身化している。関はみられない。茎の断面形は、やや丸みを帯びた方形である。茎部には、木質が残存する。2は、ほぼ完存しており、全長は9.3cm。身部長は、4.8cm、身部幅3.3cm、身部の厚さは推定で0.3cmである。刃部は、やや丸みを帯び、1よりもやや広い。鍬身部は、1よりやや短めである。関は存在するが、その位置と形状はやや不明確。茎部長は、4.5cm。茎の断面形は、長方形もしくは楕円形と考えられる。茎部には、木質と樹皮が残存しており、木質の下には、横方向に巻かれた細かい紐状痕が確認できる。3は、直線的な刃部で、



第35図 10号墓出土遺物(鉄器)

関部へ向かってわずかに内湾しながら狭くなる。鍔身長は、サビのため不明確であるが、1と同様、やや長身化していると思われる。茎部は、大部分、欠損している。残存長7.2cm。身部の幅は、2.8cm、身部の厚さは推定で0.3cmである。身部と茎部の境に、樹皮が残存している。茎の断面形は、楕円形に近い長方形である。関については、サビの付着もあり確認できなかった。4は、身部のみが残存していた。やや丸みを帯びた刃部である。残存部長4.1cm、身部幅2.1cm、身部厚さ0.3cmである。

5は、圭頭鍔の一種か。サビのため、不確かであるが、刃部が左右とも、やや内湾している。茎部が、一部、欠損している。残存長8.8cm。身部残存長7.2cm、身部幅3.2cm、身部の厚さは、推定で0.3cmである。茎部は、1.6cmが残存しており、その断面形は、丸みのある方形である。X線写真で直角の関を確認した。茎には、木質が残存する。

6・7は、三角形鍔である。いずれも、身部はやや丸みを帯びた三角形で、頸部は斜行して関部へ至る形状である。6は、完形で全長11.2cmを測る。身部長5.0cm、身部幅3.0cm、身部厚さは、推定で0.2cmである。頸部長は、2.9cm。茎部は、長さ5.0cmで、断面形は、細長い長方形を呈する。直角の関の下部に木質が残存している。7は、基部が、一部、欠損している。サビのため、観察が難しい部分も多い。残存長9.2cm。身部長9.2cm、身部幅は推定3.6cmである。茎部は、残存長2.2cmであり、断面形はやや丸みを帯びた方形を呈する。関は、サビのため、不明確であるが、直角関であると推定した。茎部には、木質が残存する。

8は、長頸の片刃鍔である。基部が、一部、欠損。頸部は非常に長頸化している。身部には、逆刺を確認

した。関部は、サビのため、その形状は詳しくは分からない。残存部長15.4cm。身部長3.5cm、身部幅1.0cm、身部の厚さは、推定で0.3cmである。頸部長は、9.0cm。茎部は、長さ2.9cmで、断面形は、細長い長方形を呈する。

9・10は、刀子である。9は、全長10.0cm。身部長5.6cm、身部幅1.7cm、身部厚さ0.3cmである。茎部長は、4.4cm。断面形は、幅1.0cm×厚さ0.5cmの長方形を呈する。茎部には、木質が残存する。10は、基部が、ごく一部のみ欠損している。残存部長16.7cm。刃部長は、10.3cm、刃部幅と厚さは、それぞれ推定で幅1.3cm、厚さ0.35cmである。刃部は、刃を研ぎなおしたためか、中央部が、柄部の幅よりもかなり狭くなっている。実際に使用したものである可能性がある。柄には、幅1.4cm、厚さ0.15cmの金具が装着されている。茎部は、残存部で6.4cmであるが、柄金具から茎部まで、その表面に木質が残存している。木質部には、横方向に繊維状の樹皮が確認できる。

装身具は、耳環、ガラス小玉の形9点が出土した（第36図）。

1・2は、通路から出土した銀製の耳環である（第36図1・2）。1は、長（横）径15.5mm、短（縦）径14.0mm、厚さ2.0mmを測る。重量は、0.64gである。2は、長（横）径13.5mm、短（縦）径13.0mm、厚さ1.5mmを測る。重量は、0.55gである。

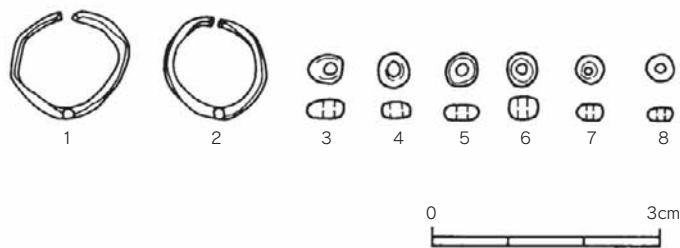
3～9は、ガラス小玉である（第36図3～9）。7は、右屍床から出土した。それ以外の遺物については、排土を水洗フルイにかけた結果、検出したものである。色調は、大まかに、濃紺色、紺色、青色、水色の4種類に分けられる。それぞれの法量等の詳細については、煩雑となるため、観察表の記載をもってかえたい（第8表）。

12 11号墓（第37図）

遺構 下段、右から2番目に位置する。主軸方向は、N38° Wで北西に開口している。

本横穴については、過去の擁壁工事により、玄室が半分以上、破壊されていた。今回の工事により、古い擁壁を取り除いた際に現れた。また、天井部については、重機による破壊ではなく、早い段階に、崩落していたと考えている。

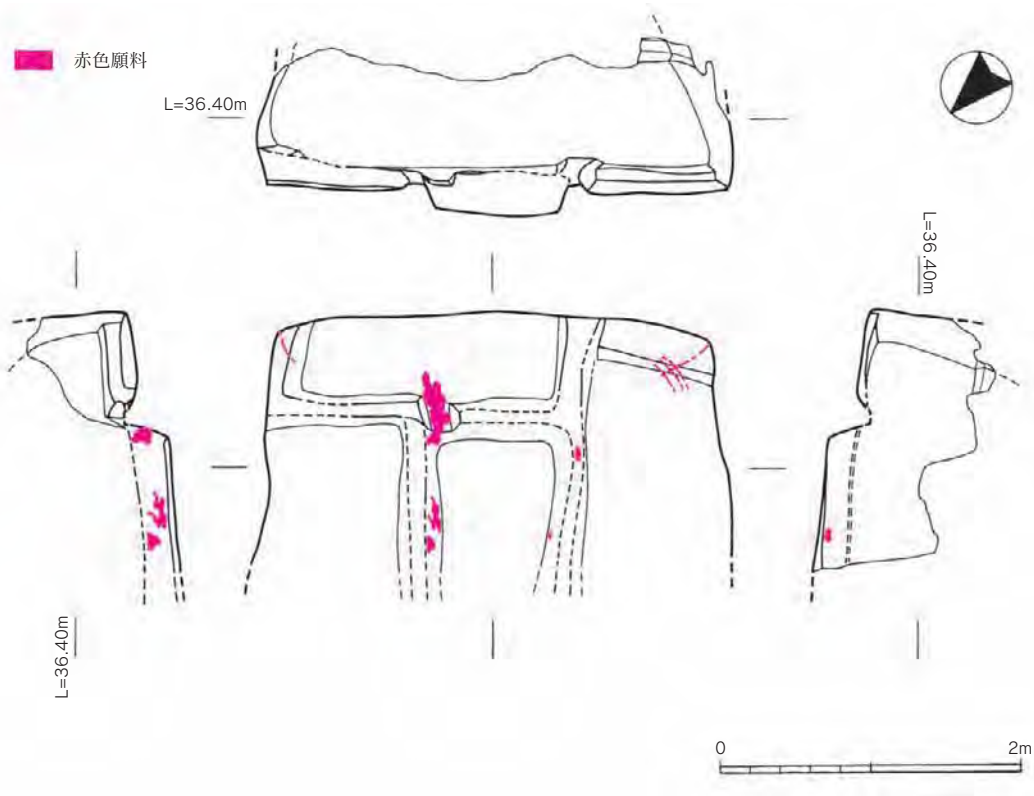
11号墓の推定天井部と、右上に位置する3号墓の羨道部が重なることから、11号墓築造後に、3号墓が築



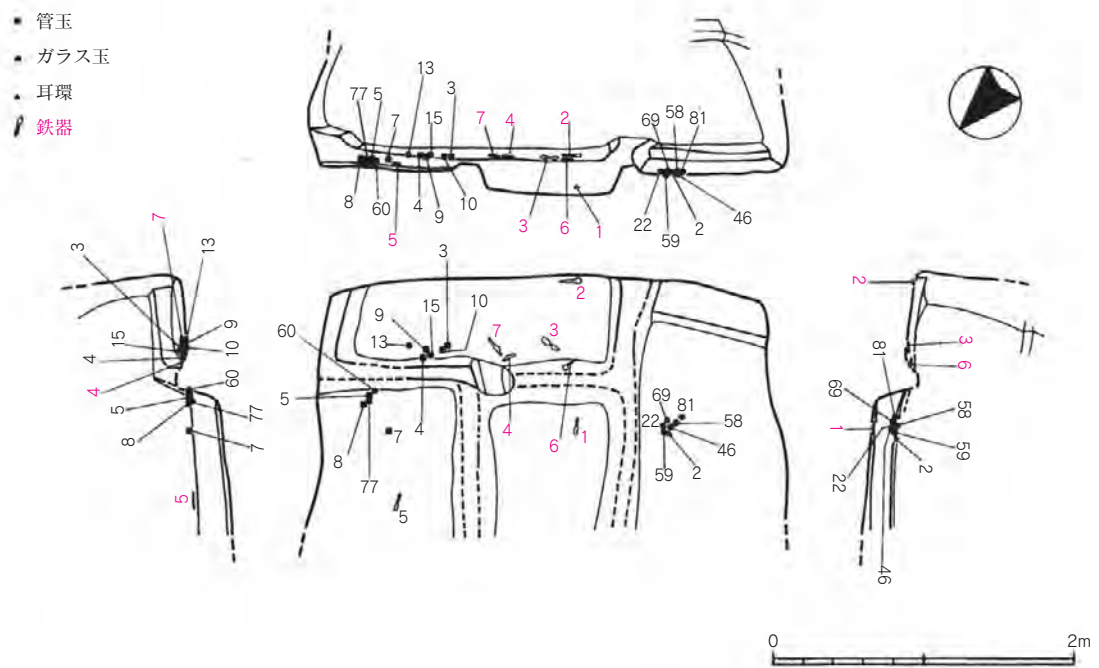
第36図 10号墓出土遺物（装身具）

第8表 10号墓出土装身具観察表

| 図版番号 | 遺物番号 | 出土位置 | 遺物種類 | 材質 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|------|------|------|------|-----|--------|-----------------|---------|---------|--------|-----|
| 36 | 1 | 通路 | 耳環 | 銀 | 黒ずんだ銀色 | 14.0(縦)×15.5(横) | 2.0 | | 0.64 | 完形 |
| 36 | 2 | 通路 | 耳環 | 銀 | 黒ずんだ銀色 | 13.0(縦)×13.5(横) | 1.5 | | 0.55 | 完形 |
| 36 | 3 | 排土 | 小玉 | ガラス | 濃紺 | 4.5 | 3.0 | 1.5 | 0.07 | 完形 |
| 36 | 4 | 排土 | 小玉 | ガラス | 濃紺 | 4.5 | 1.5 | 1.3 | 0.05 | 完形 |
| 36 | 5 | 排土 | 小玉 | ガラス | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.7 | 0.07 | 完形 |
| 36 | 6 | 排土 | 小玉 | ガラス | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.07 | 完形 |
| 36 | 7 | 右屍床 | 小玉 | ガラス | 水色 | 4.0 | 2.2 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 36 | 8 | 排土 | 小玉 | ガラス | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.2 | 0.02 | 完形 |
| 36 | 9 | 排土 | 小玉 | ガラス | 水色 | 3.2 | 2.0 | 1.5 | 0.01 | 完形 |

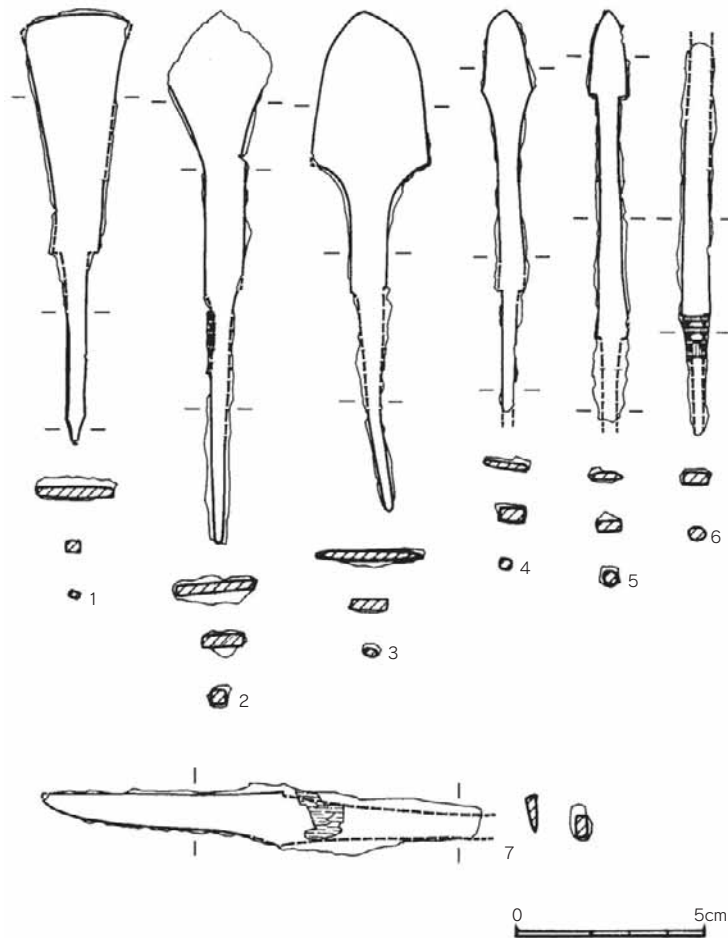


第37図 11号墓実測図 (S=1/50)



(注)図中の番号は、第39図～40図の遺物番号に対応する。

第38図 11号墓出土遺物分布図 (S=1/50)



第39図 11号墓出土遺物（鉄器）

家形であった可能性が高いと考えている。

玄室内は、仕切によって三区分される。屍床配置は、「コ」字形である。ただし、奥屍床は、右側壁まで広がらず、右仕切の部分で仕切が造られる。代わりに、右屍床が奥壁までの長い広さとなる。仕切については、通路の掘削と、屍床面を掘りくぼめることによって造られている。仕切の構造と屍床面の高さを観察した結果、この屍床配置は、築造当初からのものであったと考える。なお、右屍床奥には、枕状の仕切が存在する。奥仕切上には、通路前の場所に溝が1条、刻まれる。

玄室の規模は、幅236cm、奥行は残存長209cm、高さは、残存部で138cmを測る。

通路の幅は広い。ほぼ、直線的に造られ、その幅は手前側でも広がらない。掘削は、浅く、左右屍床面より、若干、低い程度である。手前側への傾斜は、あまりつかない。

なお、屍床面において、ベンガラと考えられる赤色顔料を確認した。10号墓と同様、玄室内が彩色されていたと考えているが、全体の様子については、確認することができなかった。

遺物 玄室内から、鉄鏃、刀子、耳環、管玉、丸玉、ガラス小玉が出土した。出土地点を記録したものについては、その分布を示した（第38図）。

鉄器は、7点、出土した（第39図1～7）。

1は、方頭鏃。刃部は、やや丸みを帯びた形状である。鏃身関部は、サビのため、不明確であるが、直角関ではないかと推定した。全長11.3cm。身部長6.4cm、身部幅2.9cm、身部厚さは、復元で0.3cmである。

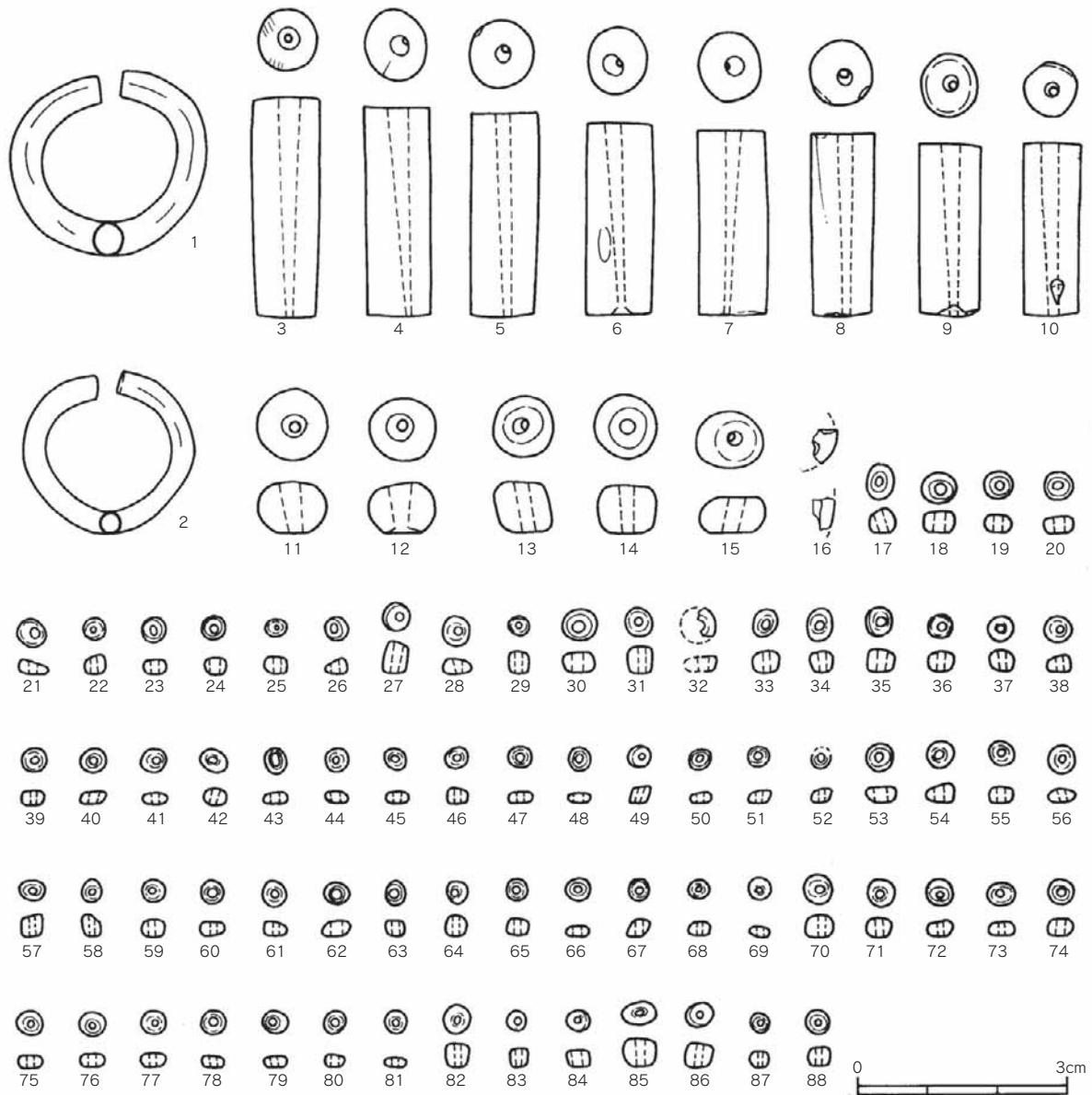
かれたと考える。3号墓が築造された際、もしくは、その前に11号墓の天井部は、崩落していた可能性もある。

また、2号墓の墓道については、11号墓の天井部を避けて、その奥に細長いものであったと考えることも可能である。

なお、11号墓の左屍床は、左に位置する12号墓によって、一部、削平されている。このことにより、11号墓が、12号墓より前に築造されたと判断できる。

玄室の平面形態については、半分以上が破壊されているため、詳しいことは分からない。正方形に近い形であったのではないかと推定している。玄室の残存部の規模は、幅318cm、奥行174cm、高さ121cmである。

天井部は、ほとんど残存していないが、奥壁と右側壁には、一部、軒先線が確認される。天井部は、



第40図 11号墓出土遺物（装身具）

第9表 11号墓出土装身具観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 遺物 種類 | 材質 | 色調 | 径 (mm) | 長さ (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----------|----|------------|-----------------|------------|------------|------------|-----------|-----|
| 40 | 1 | 右屍床 | 耳環 | 青銅 | 青緑色 | 26.5(縦)×28.0(横) | | 5.0 | | 6.42 | 完形 |
| 40 | 2 | No.5 | 耳環 | 青銅 | 黒褐色部分的に青緑色 | 23.3(縦)×24.5(横) | | 3.0 | | 2.72 | 完形 |
| 40 | 3 | No.13 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 9.0 | 32.0 | | 3.0 | 5.14 | 完形 |
| 40 | 4 | No.17 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 9.0 | 30.0 | | 3.0 | 5.34 | 完形 |
| 40 | 5 | No.20 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 9.0 | 29.0 | | 2.0 | 4.72 | 完形 |
| 40 | 6 | 左屍床 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 9.0 | 27.5 | | 2.5 | 4.56 | 完形 |
| 40 | 7 | No.22 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 10.0 | 26.5 | | 3.0 | 4.98 | 完形 |
| 40 | 8 | No.21 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 9.0 | 26.0 | | 2.0 | 4.24 | 完形 |
| 40 | 9 | No.16 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 8.5 | 24.5 | | 2.0 | 3.34 | 完形 |
| 40 | 10 | No.14 | 管玉 | 碧玉 | 深緑 | 8.0 | 25.0 | | 2.0 | 2.94 | 完形 |
| 40 | 11 | 左屍床 | 丸玉 | 水晶 | 白濁した透明 | 10.5 | | 7.5 | 3.0 | 1.04 | 完形 |
| 40 | 12 | 左屍床 | 丸玉 | 水晶 | 白濁した透明 | 9.5 | | 7.0 | 4.0 | 0.89 | 完形 |

第10表 11号墓出土ガラス小玉観察表

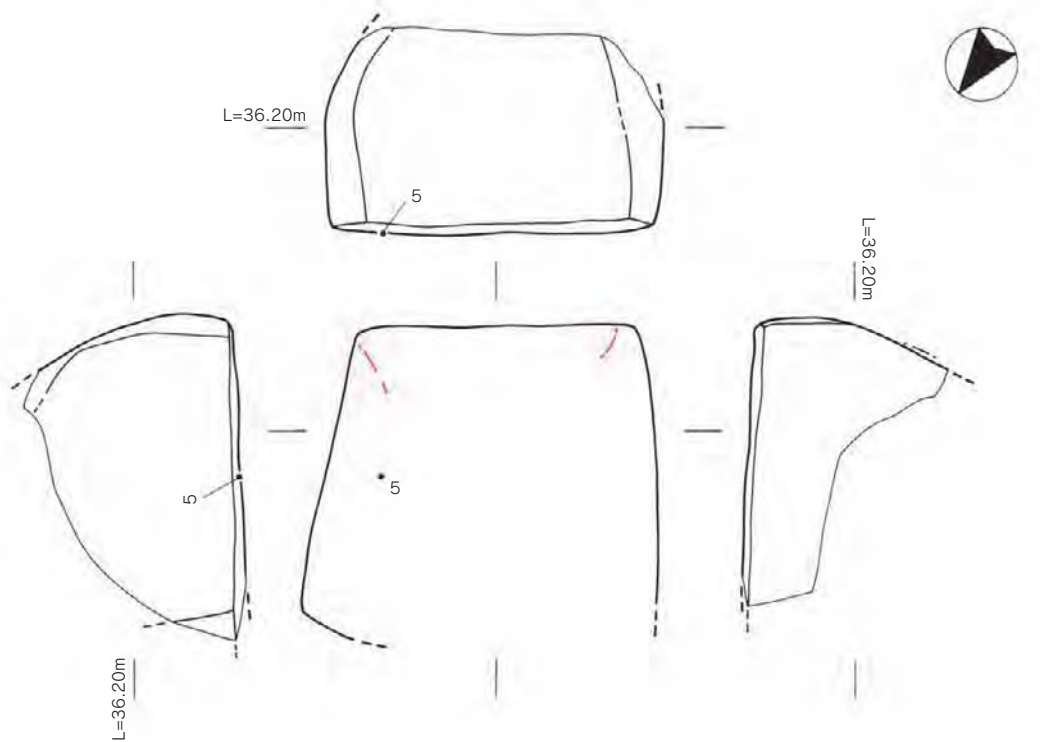
| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 | 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|
| 40 | 13 | No.18 | 濃紺 | 8.5 | 7.0 | 2.5 | 0.86 | 完形 | 40 | 51 | 左屍床 | 青 | 3.0 | 1.8 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 14 | 奥屍床 | 濃紺 | 9.5 | 7.0 | 2.0 | 0.84 | 完形 | 40 | 52 | 左屍床 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.01 | 60% |
| 40 | 15 | No.15 | 濃紺 | 10.0 | 5.0 | 2.5 | 0.66 | 完形 | 40 | 53 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 2.0 | 0.06 | 完形 |
| 40 | 16 | 左屍床 | 濃紺 | | | | 0.06 | 30% | 40 | 54 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.06 | 完形 |
| 40 | 17 | 右屍床 | 濃紺 | 5.5 | 3.5 | 1.5 | 0.10 | 完形 | 40 | 55 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 2.5 | 1.0 | 0.06 | 完形 |
| 40 | 18 | 右屍床 | 濃紺 | 5.0 | 3.0 | 1.5 | 0.08 | 完形 | 40 | 56 | 右屍床 | 水色 | 4.0 | 1.9 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 40 | 19 | 右屍床 | 濃紺 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 40 | 57 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 40 | 20 | 右屍床 | 濃紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 40 | 58 | No.7 | 水色 | 3.2 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 40 | 21 | 左屍床 | 濃紺 | 4.5 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 40 | 59 | No.4 | 水色 | 3.0 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 |
| 40 | 22 | No.3 | 濃紺 | 3.3 | 3.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 | 40 | 60 | No.19 | 水色 | 3.8 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 23 | 右屍床 | 濃紺 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 40 | 61 | 右屍床 | 水色 | 3.7 | 2.0 | 1.3 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 24 | 右屍床 | 濃紺 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 40 | 62 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 25 | 右屍床 | 濃紺 | 3.0 | 2.2 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 40 | 63 | 左屍床 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 26 | 右屍床 | 濃紺 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 40 | 64 | 右屍床 | 水色 | 3.0 | 3.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 27 | 奥屍床 | 紺 | 4.0 | 4.5 | 1.5 | 0.10 | 完形 | 40 | 65 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 2.2 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 28 | 右屍床 | 紺 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.05 | 完形 | 40 | 66 | 右屍床 | 水色 | 3.5 | 1.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 29 | 右屍床 | 紺 | 3.0 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 40 | 67 | 左屍床 | 水色 | 3.3 | 2.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 30 | 右屍床 | 青 | 5.0 | 3.0 | 2.0 | 0.09 | 完形 | 40 | 68 | 右屍床 | 水色 | 3.0 | 2.0 | 1.2 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 31 | 左屍床 | 青 | 4.0 | 3.5 | 1.0 | 0.09 | 完形 | 40 | 69 | No.2 | 水色 | 3.0 | 1.6 | 0.9 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 32 | 左屍床 | 青 | | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 40% | 40 | 70 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.08 | 完形 |
| 40 | 33 | 右屍床 | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.07 | 完形 | 40 | 71 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.06 | 完形 |
| 40 | 34 | 右屍床 | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 40 | 72 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 40 | 35 | 奥屍床 | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.5 | 0.06 | 完形 | 40 | 73 | 左屍床 | 緑 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 40 | 36 | 右屍床 | 青 | 4.0 | 2.7 | 1.5 | 0.04 | 完形 | 40 | 74 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.5 | 1.5 | 0.04 | 完形 |
| 40 | 37 | 右屍床 | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 40 | 75 | 右屍床 | 緑 | 4.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 38 | 右屍床 | 青 | 3.8 | 2.4 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 40 | 76 | 右屍床 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 39 | 右屍床 | 青 | 3.7 | 2.0 | 1.0 | 0.04 | 完形 | 40 | 77 | No.25 | 緑 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 40 | 右屍床 | 青 | 4.0 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 40 | 78 | 奥屍床 | 緑 | 3.5 | 1.8 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 41 | 奥屍床 | 青 | 3.7 | 1.5 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 40 | 79 | 右屍床 | 緑 | 3.5 | 1.5 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 42 | 右屍床 | 青 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 40 | 80 | 左屍床 | 緑 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 43 | 右屍床 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 40 | 81 | No.1 | 緑 | 3.0 | 1.5 | 0.8 | 0.02 | 完形 |
| 40 | 44 | 右屍床 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 40 | 82 | 右屍床 | 黄 | 4.0 | 3.5 | 1.0 | 0.05 | 完形 |
| 40 | 45 | 奥屍床 | 青 | 3.5 | 2.0 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 40 | 83 | 奥屍床 | 黄 | 2.8 | 3.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 46 | No.6 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 | 40 | 84 | 右屍床 | 赤 | 3.0 | 2.5 | 1.5 | 0.03 | 完形 |
| 40 | 47 | 奥屍床 | 青 | 3.5 | 1.7 | 1.5 | 0.02 | 完形 | 40 | 85 | 右屍床 | 紫 | 5.0 | 4.0 | 1.5 | 0.10 | 完形 |
| 40 | 48 | 左屍床 | 青 | 3.0 | 1.5 | 1.5 | 0.02 | 完形 | 40 | 86 | 右屍床 | 紫 | 4.5 | 3.5 | 1.0 | 0.07 | 完形 |
| 40 | 49 | 奥屍床 | 青 | 3.3 | 2.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 | 40 | 87 | 右屍床 | 紫 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 80% |
| 40 | 50 | 左屍床 | 青 | 3.0 | 2.0 | 1.0 | 0.02 | 完形 | 40 | 88 | 右屍床 | 黒 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.04 | 完形 |

茎部長は、4.9cmで、ほぼ方形の断面形を呈す。

2は、ほぼ完形であるが、サビのため、全体の遺存状態が悪い。圭頭鎌か。全長14.1cm。茎部長6.6cmである。その断面形も、方形なのか円形かサビのため良く分からない。鎌身関部は、屈曲は確認できるが、サビと欠損のため、形状は不明である。茎には、木質が残存する。

3は、ほぼ完存している三角形鎌。ふくらを有するやや幅広の身部で、斜行頸部である。関部は、サビのため、その有無を含めて不明確である。残存長13.2cm。身部長4.0cm、身部幅3.1cm、身部の厚さは、推定で0.3cmである。頸部長は、サビのため、推定3.8cm。茎部も、推定5.8cm。

4～6は、長頸鎌である。4は、身部は、長三角形で、鎌身関部は斜関である。関部は、角関かと思われるが、サビのため、不明確。茎部が、一部、欠損している。残存長10.6cm。身部長2.1cm、身部幅1.4cm、身部の厚さは、推定で0.2cmである。頸部長は、5.3cm。その断面形は、横長の長方形である。茎部は、3.2cmが残存しており、その断面形は、方形である。5は、身部が長三角形。鎌身関部は、角関。関部は、角関かと思われるが、サビのため、不明確。茎部が、一部、欠損している。残存長10.9cm。身部長2.3cm、身部幅1.0cm、身部厚さは、0.3cmである。頸部長は6.4cm。その断面形は、長方形である。茎部は、2.2cmが残存



(注) 図中の番号は、第42図の遺物番号に対応する。

第41図 12号墓実測図 (S=1/50)

しており、その断面形は、やや丸みのある方形である。6は、両端が、一部、欠損している。関部は、台形関か。残存長10.4cm。頸部長7.2cm。基部は、3.2cmが残存しており、その断面形は、丸みのある方形である。直角の関を確認した。茎には、木質とその上に巻かれた樹皮が残存する。

7は刀子である(第39図7)。基部が、一部、欠損している。サビのため、詳細が観察できない部位がある。残存長11.6cm。身部の推定残存長6.4cm、身部幅1.0cm、身部の厚さは、0.25cmである。基部の推定残存長5.2cm。その断面形は、やや丸みのある長方形である。関の形状は、サビのため、不明である。茎には、木質が残存する。

耳環は、2点、出土した(第40図1・2)。いずれも青銅製である。

1は、長(横)径28.0mm、短(縦)径26.5mm、厚さ5.0mmを測る。重量は、6.42gである。2は、長(横)径24.5mm、短(縦)径23.3mm、厚さ3.0mmを測る。重量は、2.72gである。

碧玉製の管玉が、8点、出土した(第40図3~10)。6は、両側からの穿孔である。

3は、長さ32.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、5.14gである。4は、長さ30.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、5.34gである。5は、長さ29.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、2.0mm、重量は、4.72gである。6は、長さ27.5mm、径9.0mmを測る。孔径については、2.5mm、重量は、4.56gである。7は、長さ26.5mm、径10.0mmを測る。孔径については、3.0mm、重量は、4.98gである。8は、長さ26.0mm、径9.0mmを測る。孔径については、2.0mm、重量は、4.24gである。9は、長さ24.5mm、径8.5mmを測る。孔径については、2.0mm、重量は、3.34gである。10は、長さ25.0mm、径8.0mmを測る。孔径については、2.0mm、重量は、2.94gである。

水晶製の丸玉は、2点、出土した（第40図11・12）。

11は、径10.5mm、厚さ7.5mm、孔径3.0mmを測る。完形で、重量は、1.04gである。径9.5mm、厚さ7.0mm、孔径4.0mmを測る。完形で、重量は、0.89gである。

ガラス小玉は、76点、出土した（第40図13～88）。ほとんどが、排土を水洗フルイにかけることにより、検出したものである。

13～16は、その径が他に比べて大きく、小玉とは呼べないかも知れない。その他、17～88は、ほぼ類似した法量である。いずれも、材質は、ガラスと考えている。色調については、大きく、濃紺色、紺色、青色、水色、緑色、黄色、赤色、紫色、黒色と9種類に分類される。8号墓でも出土した黄色のガラス小玉とともに、紫色、黒色のガラス小玉については、その材質が注目されるが、ここでも、とりあえず、ガラス小玉として提示しておきたい。それぞれの法量等の詳細については、観察表の記載をもってかえたい（第10表）。

13 12号墓（第41図）

遺構 下段、右から3番目に位置する。主軸方向は、N34° Wで、北西に開口している。

11号墓のすぐ隣に位置しているが、玄室の床面レベルは低い。12号墓の掘削中に、11号墓の左屍床を破壊しており、11号墓より、後に築造されたことが分かる。

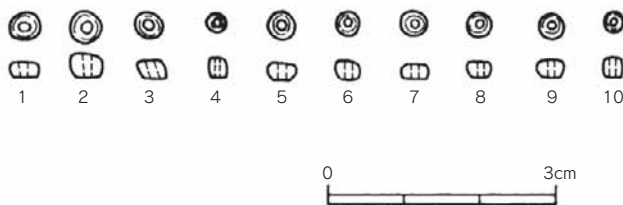
12号墓と同様、過去の擁壁工事により、壊されていた。また、岩盤の風化と、後世の2次利用によって、玄室内の区画等の痕跡については、全く確認することができなかった。

玄室の平面形態は、いびつな正方形である。左側壁は、左側に斜めに広がる。玄室の規模は、幅236cm、奥行は、残存長209cm、高さは、現存部で138cmである。

天井部の形態は、確認することが難しいが、奥壁の立ち上がり等から、他の横穴墓と同様、家形であった可能性が高い。

遺物 ガラス小玉が、10点、出土した（第42図）。

なお、5については、その出土位置を図示した（第41図）。それ以外については、排土を水洗フルイにかけたことによる検出である。色調については、濃紺色、青色、水色、緑色である。法量等の詳細については、観察表をもってかえたい（第11表）。



第42図 12号墓出土遺物（ガラス小玉）

第11表 12号墓出土ガラス小玉観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 | 図版 番号 | 遺物 番号 | 出土 位置 | 色調 | 径 (mm) | 厚さ (mm) | 孔径 (mm) | 重量 (g) | 遺存度 |
|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|----------|----------|----------|----|-----------|------------|------------|-----------|-----|
| 42 | 1 | 排土 | 濃紺 | 4.0 | 2.0 | 1.2 | 0.04 | 完形 | 42 | 6 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.5 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 42 | 2 | 排土 | 青 | 4.0 | 3.0 | 1.2 | 0.06 | 完形 | 42 | 7 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 42 | 3 | 排土 | 青 | 3.5 | 2.5 | 1.5 | 0.03 | 完形 | 42 | 8 | 排土 | 水色 | 3.5 | 2.0 | 1.0 | 0.03 | 完形 |
| 42 | 4 | 排土 | 青 | 2.5 | 2.5 | 0.8 | 0.02 | 完形 | 42 | 9 | 排土 | 緑 | 3.8 | 2.2 | 1.2 | 0.04 | 完形 |
| 42 | 5 | No.2 | 水色 | 4.0 | 2.0 | 1.3 | 0.03 | 完形 | 42 | 10 | 排土 | 緑 | 2.5 | 2.5 | 1.0 | 0.02 | 完形 |

14 その他

表採遺物 施工前の道路との境界付近から、銀製の耳環を1点、
採集した（第43図）。本来の帰属については、不明である。

その法量は、長（横）径2.0mm、短（縦）径1.9mm、厚さ2.5mm
を測る。重量は、2.47gである。



第43図 表採遺物（耳環）

註

註 同様の形態は、熊本市古城町古城横穴墓群10号墓でもみら
れる。この10号墓は、奥壁に柵状の段をもち、調査担当者
は、その築造時期について、6世紀末ないし7世紀前葉を考慮しておられる。（高木正文1985『古城横穴
墓群』熊本県文化財調査報告第74集 熊本県教育委員会）

第4章 総括

今回、県教育委員会は、県道熊本菊鹿線単県道路改良事業に伴い、瀬戸口横穴墓群の発掘調査を実施した。瀬戸口横穴墓群は、菊池郡七城町台に所在する横穴墓群である。その数は300基を超えるとされ、県内でも最大級の横穴墓群である。過去、数次に渡る発掘調査が実施されているが、未調査の横穴墓も多く、全容が明らかになったとは言えない。

今回、道路改良事業に伴う緊急発掘調査であったため、最終的には、調査した横穴墓は13基となった。横穴墓群全体から比較するとごく一部であるが、調査の概要について、簡単にまとめてみたい。

第1節 立地と構造

1 分布

横穴墓群は、うてな台地の主に西側崖面から北側崖面にかけての部分に立地している。台地の西側斜面の長さは長く、横穴墓群のほとんどがこの西側斜面に造成されている。今回の調査区で確認した横穴墓群については、瀬戸口横穴墓群のほぼ南限にあたると思われる。調査区の南側にも、わずかに西向き斜面が存在しており、横穴墓が造られていた可能性が高い。しかし、こちらは、既に傾斜地の法面工事が完了しており、発掘調査時に、その存在の有無を確認することはできなかった。現在のところ、さらに南側の、南向きの斜面においては、横穴墓群は確認されていない。横穴墓群が、やや南側にまで広がっていた可能性は高いが、それらを考慮しても、今回の調査した横穴墓群については、全体の中でもほぼ南限に近いものであったと考えることができる。

2 構造と変遷

13基の横穴墓について、その構造についての一覧を示した（第44図）。

ここでは、調査区内の横穴墓の造成時期について、Ⅲ期に分けた案を提示して、それに従って、横穴墓群の構造と変遷について概観してみたい。なお、このⅢ期区分については、あくまで、調査区内における横穴墓の築造順序を示すためのものであり、各期の長さについては、それぞれ同じものではない。また、各期中でも構造の異なるものがあり、築造時期にはある程度の差があることも予想できる。さらに、これらの区分については、あくまで、今回、調査した横穴墓の変遷を説明するための便宜的なもので、正当な手続きを経て、古墳時代の中へ位置付けたものではないことをお断りしておきたい。

調査区内に、横穴墓が造られた最も古い段階をⅠ期とする。このⅠ期には、1号墓、8号墓、10号墓、11号墓の4基が該当する。さらに、このⅠ期の横穴墓の中でも、築造時期に若干の差が認められる。Ⅰ期の中で古いと考えられるのが、10号墓と11号墓の2基であり、これをⅠa期の横穴墓としたい。残る1号墓と8号墓が築造された時期をⅠb期とする。

Ⅰa期の横穴墓からみていきたい。玄室の平面形態については、ほぼ正方形に近い。側壁についても、直線的に丁寧に掘削されている。逆に、次の段階になると、玄室の平面形態は、やや細長くなり、最終的な段階には、側壁の掘削は非常に雑になり、丸みを帯びてくる。天井部の形態については、10号墓、11号墓は、明瞭な軒先線が表現され、家形を呈する。これらは、調査した横穴墓群の中でも古い要素であると考えられる。

なお、10号墓、11号墓の屍床配置については、他のものとは若干、異なる点がみられる。10号墓は、右屍床横の仕切部分が掘りくぼめられており、石を立てて右屍床を区画していた可能性がある。また、11号墓

| 番号 | 平面模式図 | 羨道部規模 (cm) | | 羨門部長 (cm) | 玄室規模 (cm) | | | 天井の形態 | 主軸方向 | 出土遺物 | | | | 備考 | |
|----|-------|------------|------|-----------|-----------|-------|-------|----------------|-------|------|----|--------------------|---|-----------------------|----------------|
| | | 幅 | 長 | | 幅 | 奥行 | 高 | | | 玄室 | | | | | |
| | | | | | | | | | | 羨道部 | 土器 | 武器武具 | 装身具 | | その他 |
| 1 | | | | | 226以上 | 214以上 | 196以上 | 家形 (軒先線あり) | N29°W | | | 鉄鏃8 刀子2 | 耳環7 切子玉1 勾玉1 水晶丸玉1 白玉1 土製玉93 管玉7 ガラス玉131 | 鉄器3 | |
| 2 | | | | | 186以上 | 236以上 | 210以上 | 家形 | N19°W | | | | | 鉄釘2 | |
| 3A | | 140以上 | 50以上 | 48 | 212 | 256 | 188以上 | 家形 (軒先線あり) | N12°W | | | | | | |
| 3B | | | | | 46以上 | 94以上 | 166以上 | | | | | | | | |
| 4 | | | | | 240以上 | 242以上 | 210以上 | 家形 (軒先線あり) | N40°W | | | | | 鉄釘2 | |
| 5 | | 176以上 | 86以上 | 46 | 234 | 278 | 194以上 | 家形 | N49°W | | | | | | |
| 6 | | | | | 278以上 | 238以上 | 206以上 | 家形? | N53°W | | | | | 鉄器1 | |
| 7 | | | | | 176以上 | 270以上 | 213以上 | 家形 (軒先線あり) | N63°W | | | | ガラス玉 1 | 鉄釘5 鉄器2 | |
| 8 | | | | | 260以上 | 211以上 | 198以上 | 家形 (軒先線あり) | N37°W | | | 鏝 2 鉄鏃 8 刀 1 | 耳環 2 勾玉 1 管玉 10 ガラス玉 62 | 鉄器片 1 その他 細かな鉄片 | |
| 9 | | 200 | 146 | 60 | 230 | 294 | 212 | 家形 (軒先線あり) | N48°W | | | 刀子 1 | | | |
| 10 | | | | 45以上 | 276 | 332 | 222以上 | 家形 (軒先線あり) | N24°W | | | 鉄鏃 8 刀子 2 | 耳環 2 ガラス玉 7 | | ・赤色顔料 ・白色粘土 |
| 11 | | | | | 318 | 174以上 | 121以上 | 家形? (軒先線あり) | N38°W | | | 鉄鏃 6 刀子 1 | 耳環 2 管玉 8 水晶丸玉 2 ガラス玉 76 (他にガラス破片6) | | ・赤色顔料 |
| 12 | | | | | 236 | 209以上 | 138以上 | 家形? | N34°W | | | | ガラス玉 10 | | |

第44図 横穴墓一覧

については、右屍床が奥壁までのびており、右屍床の造りが、他の横穴墓と異なる。

通路については、広く、直線的に造られている。その深さは、浅く、羨門部に向かってもほとんど傾斜はつけられず水平である。仕切の高さも低く、屍床面及び通路との高低差はあまりない。

若干の異なる点はあるものの、以上の点において、この2基の構造は類似しており、築造時期については、最も古いと考えた。なお、I a期とした10号墓と11号墓については、玄室内が赤で彩色してある。

なお、I b期とした1号墓と8号墓については、構造と立地をあわせて判断してI期に含めた。天井部の形態が明瞭な軒先線を示す家形と考えられることや、通路・仕切・屍床面の高低差がII期のものと比べて低いことは、I a期の横穴墓と類似する。ただし、I a期のものに比べると、通路がやや深く仕切もやや高いこと、また、通路が手前側で広がること等がやや新しい要素と考えて、1号墓と8号墓をI b期とした。

I期とした4基については、やや斜面が奥側に入りこんでいる10号墓を除いて、玄室の位置は、平面的にも、ほぼ近い位置に造られている。これらも、各横穴墓が、ほぼ同時期の所産であることの傍証であると考えられる。1号墓が、若干、高い位置に立地するのは、崖面の地形的要因によるものであり、I期に含めて問題はないと考える。

また、11号墓の左側に位置する12号墓については、11号墓の左屍床部を壊して造られていることから、11号墓より新しいことが分かる。築造時期については、立地から判断して、I期に含めるべきかと考えているが、その構造については情報が少ないため、今回は、築造時期の推定には含めていない。

次に築造された横穴墓群の時期を、II期とする。このII期には、2号墓、3A号墓、5号墓、9号墓の4基が該当する。その構造について、I期の横穴墓と比較しながら、概観することとする。

玄室の平面形態については、やや細長い長方形である。天井部の形態については、概ね、家形を呈するが、I期のものに比べ、軒先線や天井部の表現が、やや緩やかである。

屍床については、おおよそ整っている「コ」字形の配置である。通路については、I期に比べて、広さは狭く、深さは深くなる。通路の幅は、羨門部にむかってやや広がる程度であるが、羨門部へ向かって傾斜をつけて低くなる形状である。5号墓については、通路は、羨門部側でもあまり広がらないが、I期のものに比べてその深さも深く、手前側へ向かって傾斜もつけられているため、II期に含めた。この点については、3A号墓も同様である。全体的には、I期の横穴墓と比べて、通路の深さとともに、仕切の高さも若干、高くなり、屍床面・仕切・通路の高低差が顕著になる。

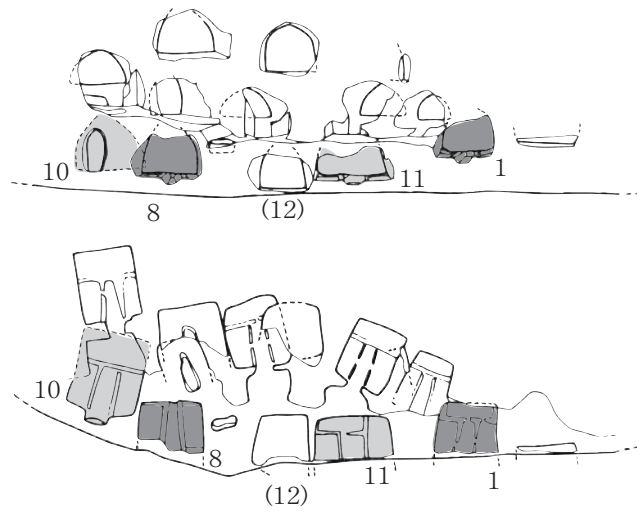
2号墓と、その右側に位置する3A号墓については、主軸方向をほぼ一にしている。平面的にもきれいに並んで立地しており、ほぼ、近い時期に造成されたと考えている。また、5号墓と9号墓についても、主軸方向が類似しており、近い時期に造成されたと考えている。これらの4基については、同じ段に立地し、類似する構造を呈しながらも、主軸方向が、2基ごとに、全く違う方向を向いている。この理由としては、まず、崖面の傾斜等、立地的な制約が考えられる。また、その他には、それぞれの組合せが何らかの意味をもつのか、あるいは、築造時期に、若干の時間差があるということが考えられる。理由としては、立地的制約ではなく、後者の理由のいずれかか、又は、両方であると考えている。

7号墓については、5号墓と7号墓の中間に位置し、玄室の高さもその中間であることから、このII期に含まれる可能性が考えられた。しかし、ここでは、II期には含めていない。その理由としては、その立地と構造がある。7号墓の立地は、奥壁の位置と比較すると、左右の横穴墓より、かなり手前側に位置する。このことは、II期の横穴墓へ向かう道を推定する場合に、若干の不都合が生じる。即ち、5号墓と9号墓へ向かうために、同一のルートを利用するのであれば、7号墓は、そのルート上に築造されたことになる。7号墓の細長い玄室の平面形態も、左右の横穴墓の間に、後で入れ込んだという可能性を考えさせる。そのため、7号墓については、II期の横穴墓より後に築造された可能性が考えたが、その構造が明らかではないため、築造時期

I 期

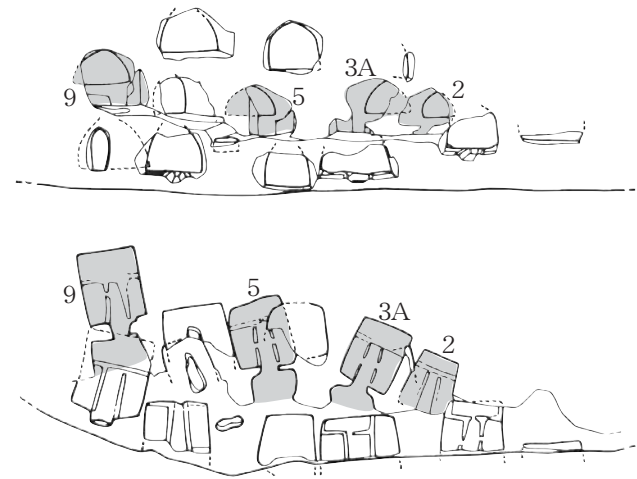
I a 期：10·11号墓

I b 期：1·8号墓



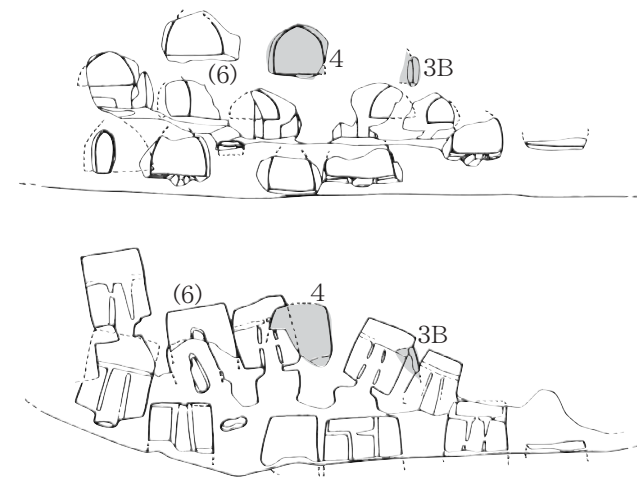
II 期

2·3A·5·9号墓



III 期

3·4号墓



第45图 横穴墓变迁图

ないため、築造時期の推定からは省きたい。

最後に、横穴墓が造成された時期をⅢ期とする。このⅢ期には、上段に位置する3B号墓、4号墓の2基が該当する。

Ⅲ期に含めたこの2基については、崩壊のため、その構造はほとんど分からない。軒先線の痕跡は確認できない。天井部形態は、やや緩やかになるのではないかと考えている。また、4号墓の玄室については、小型でほぼ方形を呈するが、仕切は、当初から造られなかった可能性がある。この様な構造については、他に比べてやや新しいものであると考えた(註1)。また、造られている高さや、平面的な配置についても、この2基は類似しており、近い時期の所産として同じⅢ期に含めた。

同じ上段に位置する6号墓については、立地は、3B号墓及び4号墓と似通っている。ただし、その構造については、この2基よりも若干、大きい。また、わずかではあるが通路の痕跡を確認することができ、奥屍床は存在しないものの、左右両屍床が存在していたことが推測される。4号墓とは、これらの点で異なるため、Ⅲ期には含めないこととした。この屍床配置については、6号墓のすぐ下に立地する7号墓も同様である。6号墓と7号墓の2基については、Ⅰ期とⅢ期の間に造られた可能性がある。ただし、両横穴墓とも、その構造が不確かなため、今回は、時期の築造順序の推定からは省くこととした。

以上、大まかに示した築造順序について、その変遷案を示した(第45図)。

3 小結

前項で、調査した横穴墓についての築造順序に関する案を示した。その変遷について簡単にまとめ、問題点を提示しておきたい。

まず、Ⅰ期として、下段に横穴墓群が築造される。まず、もっとも掘削が容易である下段に、築造するという意識があったと考える。10号墓と8号墓については、10号墓が築造され、その後、崖面の関係上、より手前側から、8号墓が造成を開始したとみられる。ただし、掘削中に、10号墓の玄室を破壊してしまったため、設計変更して、左右屍床のみとしたものである。この2基に向かうには、やや左奥方向に入り込む斜めの道を利用していただけと考えられる。11号墓と12号墓については、ほぼ、並列して造成されているため、この2基の奥壁と平行の方向の道が存在したと考える。立地から考察すると、高さは異なるが、1号墓へ向けて、若干、斜めに上がっていく道も想定できる。立地上の条件から、11号墓より、若干、高い位置に造成したと考える。

次のⅡ期には、中段に、4基の横穴墓が造成される。斜面であるため、下段の横穴墓群より、やや奥まった位置に掘削されることになったものである。これら、4基については、玄室が、平面配置上、ほぼそろった位置に造られている。2号墓と3A号墓については、すぐ隣に並び、羨道部も近い場所にあるため、それらへ向かう場合には、同じ道を通っていたと考えられる。さらに、この2基と、ほぼ一致した高さに5号墓が位置する。横穴墓へ向かう道としては、先の2基と同じものを使用していたと考える。中段の最も左側には、9号墓が位置する。この9号墓については、先の3基より、やや奥まった場所にある。これは、10号墓と同様、崖面がやや奥まっていることに起因するもので、Ⅱ期とした他の3基と別のものであるという意識を持っていた訳ではないと考えている。また、高さが、若干、高いことについても、すぐ下に位置する10号墓の玄室の高さが高かったためであり、やはり、特別な意味を持つものではない。

Ⅱ期としたこの4基については、その主軸方向と立地から考察して、2号墓と3号墓、又、5号墓と7号墓のそれぞれが、関係が深い。ほぼ同じ時期の築造か、あるいは、親縁関係等の何らかの関係性があったと考える。各横穴墓へ向かう道については、それぞれの横穴墓の前を通る道が推定できそうである。この場合、5号墓と7号墓の間に穿たれているPitについても、何らかの機能を有していたことが想定される。

なお、7号墓については、玄室が、先に想定した道の上に位置することになり、不自然である。これは、7号墓が、Ⅱ期のもとは、築造時期が異なると考えた根拠の一つである。Ⅱ期の横穴墓の築造後、もしくは、それらの羨道部等が埋没した後に、崖面の手前側から、近い位置に横穴墓を築造した可能性が考えられる。

Ⅲ期とした3B号墓と4号墓についても、7号墓と同様の築造過程を考えた。玄室の位置については、Ⅱ期のもより手前に位置する。この立地からは、7号墓と同様に、Ⅱ期の横穴墓が一部、埋没した後に、崖面の手前側から近い位置に築造したか、又は、Ⅱ期の横穴墓の天井部上を、狭い道として利用したことが考えられる。後者であれば、Ⅱ期の横穴墓の玄室上部付近が、Ⅲ期の横穴墓へ向かう道となる。この道を利用することは、Ⅱ期の横穴墓が埋没していなくても、可能であり、こちらの可能性が高いと考えた。ただし、立地的にも悪条件であり、その築造場所の選択については、最終段階のⅢ期までなされなかったと考えることができる。

以上、横穴墓群の変遷案をまとめ、各横穴墓へ向かう道を推定してみた。問題点としては、次の点が考えられる。

問題点は、Ⅱ期とⅢ期の横穴墓の前後関係である。先に述べたとおり、Ⅱ期の横穴墓群が先に築造されている場合には、上段のⅢ期の横穴墓群は、横穴墓の築造に関して条件が悪い。横穴墓へ向かう道も、Ⅱ期の横穴墓群の玄室の上という狭い場所となる。先ほどは、この条件の悪さを、築造時期が後であることの傍証とした。

ただし、逆に、Ⅱ期とⅢ期の横穴墓群が逆に築造された可能性を考えることもできる。Ⅰ期の横穴墓の築造後、崖面の斜面からすぐの位置から掘削して、横穴墓を築造したと考える案である。その後、Ⅱ期とした横穴墓群が、下段と上段の横穴墓の間をぬった場所を築造場所として選び、両者の玄室を避けるために、より奥側まで掘削して、玄室を築造したと考えるのである。5号墓は、羨道を掘削した後、玄室は、やや左側にずれて掘削しているが、これは、4号墓が先に築造されており、5号墓を築造する途中で4号墓を破壊することが予想されたために、設計変更して玄室を左側方向へ向けて掘削したと考えるのである。平面的な位置関係では、こちらの案の方が妥当性がある。なお、平面的な立地の問題としては、時期区分に含めなかった7号墓についても同様のことが考えられる。

今回は、横穴墓の構造、立面的な配置、及び築造の容易さを優先して変遷案を提示した。ただし、Ⅲ期の横穴墓は、残存状況も悪く、その構造をほとんど観察することができなかった。Ⅱ期とⅢ期の横穴墓群については、その構造から、時期差を論じることがほとんどできていないため、以上の点について問題点として提示しておきたい。

第2節 埋葬

今回、調査した横穴墓については、全て開口しており、人骨が検出されたものはなかった。また、堆積していた土砂の性格から、埋土を分層して堆積時期を分けることが困難であった。そのため、追葬の状況の確認等、横穴墓の調査時における重要な課題を追求することができなかった。

埋葬の方法については、ほとんど、その概要を知ることはできないが、2号墓、4号墓、7号墓から、方頭の鉄釘が出土していることには注意したい。前述のとおり、古墳時代以降の2次利用に伴う可能性もあるが、木棺を利用していた可能性を考えることもできる。

その他、最も古い段階と考えた10号墓の右屍床においては、右仕切の部分が掘り込まれており、石をたてて右屍床を区画していた可能性がある。同様の形態は、山鹿市付城横穴群第28号墓にもみられる（註2）。この28号墓は、左右屍床の仕切には、凝灰岩のはめこみがなされている。また、奥屍床については、一段高く

設けて石屋形状となり、前面にはめこまれた凝灰岩には、線刻と朱による鋸歯文が描かれる。10号墓については、仕切に石をはめ込むことについては古い要素と考えられるものの、奥屍床は独立性を失い墓室と一体化していることから、付城横穴群28号墓とは異なり、築造当初の年代は、6世紀後半より以前に遡ることはないと考えている。

玄室内の区画については、その多くが、一室の中を三つの屍床に区画して利用している。屍床については、変形の11号墓を除いて、「コ」字形に配置されている。ほとんどが、まず、奥屍床と左右の屍床を直線的な奥仕切で区画して、その後、左右屍床及び奥屍床を造成している。変形した配置の11号墓と1号墓は、これらとは異なる設計思想であったと考える。

なお、7号墓の前で検出したPitについても、墓前祭祀に利用された可能性もあるが、柱痕跡や燔火の痕跡(註3)は確認できなかった。

第3節 出土遺物

今回、調査した横穴墓からは、鉄鏃等の鉄器、馬具、ガラス小玉等の装身具が出土している。出土遺物については、残存状況の悪さから、どの段階で副葬されたものか判断することはできず、一括資料として扱うことはできない。概要を述べるに留めたい。

鉄鏃については、全て有茎鏃であり、その内容は、圭頭鏃群、方頭鏃群、三角形鏃群、腸袂三角形鏃群、長頸鏃群である(註4)。

1号墓から出土した鉄鏃については、圭頭鏃2点、三角形鏃2点、長頸鏃4点である。圭頭鏃は、棘関のものがあり、圭頭鏃でこの特徴をもつものは、7世紀初頭に出現するとされる(註5)。8号墓からは、圭頭鏃2点、三角形鏃3点、腸袂三角形鏃3点が出土している。8号墓出土の腸袂三角形鏃は、類柳葉状の形態で、逆刺の外反が強い形状から、6世紀後半以降の所産であると考え(註6)。

10号墓からは、方頭鏃4点、圭頭鏃1点、三角形鏃2点、長頸鏃1点が出土している。方頭鏃は、方頭斧箭鏃と呼ばれているもので、刃部はやや丸みを帯びているものと、円筒状になったものが存在する。長頸片刃鏃は、身部に短い逆刺を有する。11号墓からは、方頭鏃1点、圭頭鏃かと思われる鏃が1点、三角形鏃1点、長頸鏃3点が出土している。11号墓出土の方頭鏃も、やや刃部が丸みを帯びた形態である。長頸鏃については、鏃身関部が、一部退化していると考えられるものもある。

鉄鏃については、サビのため、その形状等について、観察が不可能なものも多く、詳しく言及することはできない。顕著な特徴をもつものについて時期の推定を試みたが、不十分である。全体としては、6世紀後半から7世紀後半の時期におさまるものと考えている。また、出土状況も先に述べたとおりであり、セット関係についても、言及することはできない。

8号墓からは、馬具が2点出土している。鉸具、三連の兵庫鎖、U字状の金具が繋がった状態で残っており、2点で1対のものであろう。1点(第27図1)については、鉸の部分もそのまま残っており、後世に鐙の部分を持ち出されたとは考えにくく、木製の鐙が腐朽したと考えられる。よって、鐙の部分は、木製の壺鐙であった可能性を考えたい。木製壺鐙は、6世紀初めから中頃までに工夫され、6世紀中頃から6世紀末まで、その改良されたものが普及したとされ(註7)、下限は7世紀第3四半世紀頃であるとされている(註8)。なお、U字状金具の鉸の数が減少して2~3鉸となるのは、6世紀第3四半世紀以降とされている(註9)。8号墓出土の馬具の年代は、6世紀代とすることができる。恐らくは、6世紀後半の所産であると考えている。

なお、同様の形態の馬具は、県内では、山鹿市湯の口横穴群5-B号墓からも出土している(註10)。また、鐙については、1987年度に調査した瀬戸口横穴墓群(49-b~49-e号墓)前庭部からも出土しており(註11)、

調査担当者は、木心鉄張壺鏡を想定されている。また、瀬戸口横穴墓群（27号墳）からは、雲珠も出土しており（註12）、瀬戸口横穴墓群では、馬具を副葬する横穴墓が複数、存在していたことを示している。

8号墓からは、その他、鉄鏃の他にも、刀、銀製の耳環、水晶製の勾玉等も出土している（註13）。また、生産量が少なく貴重であるとされる（註14）黄色のガラス小玉も5点、出土しており、その出自とともに被葬者の性格についても注意する必要がある。ガラス小玉は、その他、1号墓、11号墓、12号墓からも出土している。1号墓と11号墓からも、少数ではあるが、黄色のガラス小玉が出土しており、同様の注意が必要である。

第4節 まとめ

前項まで、今回の調査結果について、簡単に概観した。これらから、横穴墓の築造年代を推定してみたい。

I期とした横穴墓（10・11・1・8号墓）については、その構造と出土遺物の特徴から、6世紀中葉から後葉にかけての時期を築造時期と考えたい。I b期とした8号墓出土の馬具と鉄鏃については、6世紀後半以降と考えており、伝世及び追葬について考慮すべきではあるが、8号墓の築造時期は、I a期の横穴墓と、若干の時間差がある可能性がある。I期の横穴墓に追葬された時期を考察するのは困難であるが、遺物には、7世紀前半のものが含まれており、少なくとも、7世紀前半期までは、追葬がおこなわれていたと考える。

II期とした横穴墓（2・3A・5・9号墓）については、時期を示す特徴的な遺物はないが、その構造から、6世紀後半から7世紀前半という大まかな年代を考えたい。II期の横穴墓の構造については、その築造時期が6世紀後半（一部、6世紀前半に入る）とされた1987年度調査の瀬戸口横穴墓群（49-b～49-e号墓）（註15）と類似している。その点を考慮すると、6世紀後半と限定しても良いかも知れない。ただし、横穴墓からは、時期を示す遺物が出土していないため、断定はできない。また、追葬の時期についても、判断する根拠は少ないが、類例より7世紀代までは、追葬をおこなっていたと考えている。

III期とした横穴墓（3B・4号墓）については、ほとんど情報がなく、その築造年代を判断することができない。築造の時期については、II期の横穴墓より後出するとしきれない。III期の横穴墓については、問題点としても述べたとおり、築造時期が異なる可能性もあり、ここでは、言及することを避けた。

I期からIII期の築造時期の先後関係は、I期→II期→III期の順であると考えているが、築造時期の時間差については、ある程度の差があるのか、又は、短い期間に連続して築造されたのかは、検討課題である。

以上、調査成果について、簡単に概要を述べた。しかし、立地と構造から推定した横穴墓の変遷案と築造年代の推定については、大まかなものとなり、問題点も残した。また、出土遺物の時期や位置付けについての検討は、不十分であり、他の事例との比較検討はおこなえなかった。遺物のセット関係、ガラス小玉の出自、管玉の製作技法等、検討すべき課題を多く残している。さらに、今回の調査結果を、古墳時代社会の中へ位置付ける作業については、全くの手付かずである。これらについては、全て、今後、継続して検討すべきであると考えている。

註

- 註 1 高木正文1987『上神内横穴墓群』益城町文化財調査報告第11集 益城町教育委員会
美濃口雅郎2000『つつじヶ丘横穴群発掘調査概報 IV』熊本市教育委員会
- 註 2 隈 昭志1979「付城横穴群」『五ッ穴横穴群』熊本県文化財調査報告 第34集 熊本県教育委員会
高木正文氏は、付城横穴群については、その他、奥屍床が独立した形態である57号墓や72号墓について、6世紀初頭の年代観を与えられている（高木2000）。ただし、瀬戸口横穴墓群10号墓は、玄室の形態が異なり、時期的には、後出するものであると考える。
高木正文2000「装飾古墳の地域性」『熊本古墳研究会10周年記念シンポジウム資料集 継体大王と6世紀の九州—磐井の乱前後の列島情勢に関連して—』熊本古墳研究会
- 註 3 熊本市つつじヶ丘横穴墓群では、前庭部の小穴では、柱痕跡が確認されている。また、燔火の痕跡も確認されている。
美濃口雅郎1997『つつじヶ丘横穴群発掘調査概報 III』熊本市教育委員会
美濃口雅郎2000『つつじヶ丘横穴群発掘調査概報 IV』熊本市教育委員会
- 註 4 本報告における鉄鏃の部分名称については、杉山1998を参考とした。
杉山秀宏1988「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集 第八』橿原考古学研究所
- 註 5 註2と同じ
- 註 6 註2と同じ
- 註 7 小野山節1990「古墳時代の馬具」日本馬具大鑑編集委員会編『日本馬具大鑑 1 古代上』日本中央競馬会
- 註 8 坂本美夫1985『考古学ライブラリー34 馬具』ニューサイエンス社
- 註 9 註8と同じ
- 註10 中村幸四郎・有働八千代1988『湯の口横穴群（II）』菊池川中流域・横穴群総合調査報告書(3) 山鹿市教育委員会
- 註11 松本健郎・西住欣一郎1989『北上原古墳・瀬戸口横穴墓群』熊本県文化財調査報告第104集 熊本県教育委員会
- 註12 熊本の風土とこころ編集委員会編『熊本の上代遺跡 熊本の風土とこころシリーズ 第二集 18』熊本日々新聞社
- 註13 装身具の一部については、その材質の分析を、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターと福岡市埋蔵文化財センターで実施していただき、貴重な御教示を得た。記して感謝したい。ただし、脱稿後であったことと、紙幅の関係上から、分析結果を掲載することができず、また、御教示いただいた内容についても、本文にあまり反映させることができなかった。深く、お詫びしたい。
- 註14 吉武牧子1991「上ノ原横穴墓群出土の玉類」『上ノ原横穴墓群 II』大分県教育委員会
- 註15 註11と同じ

引用・参考文献

- 熊本古墳研究会編2000『熊本古墳研究会10周年記念シンポジウム資料集 継体大王と6世紀の九州—磐井の乱前後の列島情勢に関連して—』熊本古墳研究会
- 後藤守一1939「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』54 - 4
- 高木恭二1981「圭頭斧箭式鉄鏃について」城二号墳発掘調査団編『城二号墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第3集 宇土市教育委員会
- 高木正文1985『古城横穴墓群』熊本県文化財調査報告第74集 熊本県教育委員会
- 高木正文1985『福原横穴墓群』熊本県文化財調査報告第77集 熊本県教育委員会
- 田中晋作1991「古市古墳群・百舌古墳群の鉄鏃」『盾塚 鞍塚 珠金塚古墳』
- 渋野玲子1991「鉄鏃の形式分類と出土状態について」『上ノ原横穴墓群 II』大分県教育委員会
- 和田晴吾2002「てつぞく 鉄鏃」『日本考古学辞典』三省堂

第Ⅱ部 深川遺跡

第1章 調査経過

第1節 調査経過

1 調査に至る経緯

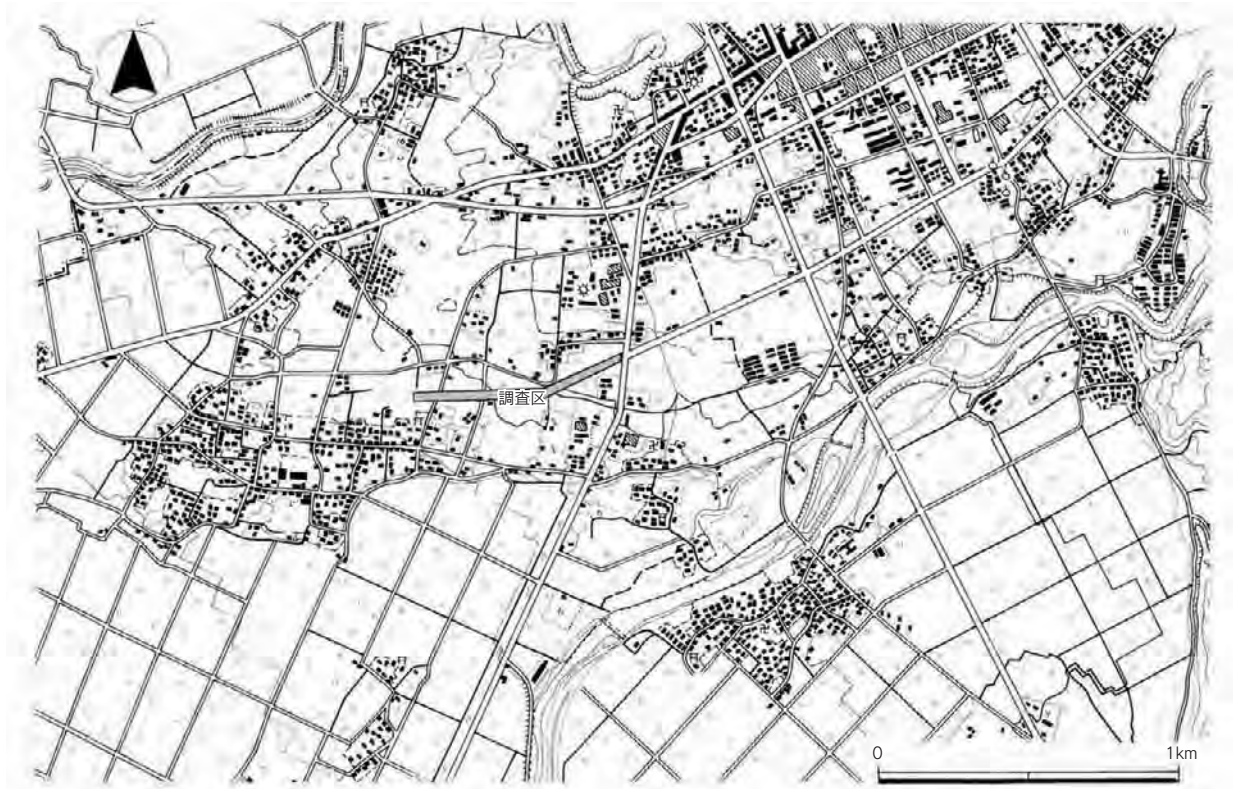
県教育庁文化課では、毎年、関係部局に対して、公共事業の予定を問い合わせている。平成8年度に、県土木部から文化課に対して、県道植木インター菊池線単県道路改良事業を実施する旨の回答があった。文化課では、土木部へ詳細な事業内容を問い合わせ、遺跡台帳照合をおこなったところ、計画地は周知の埋蔵文化財深川遺跡に該当することを確認した。また、併せて、同路線が、周知の埋蔵文化財包蔵地西寺遺跡の隣接地を通る計画であることも確認したため、道路の施工計画とも併行して、現地踏査及び試掘確認調査の予備調査を実施した。

その結果、当該路線中の数地点において、埋蔵文化財と認められる遺構及び遺物を確認した。文化課は、土木部に対して、工事を計画どおり着手される場合については、発掘調査が必要である旨を通知した上で、土木部と協議を実施した。その結果、事業は計画どおり進められるとのことで、計画地内の合計5地点については、事前に発掘調査を実施することとなった。緊急性を要する事業のため、当初は3班を投入して調査を開始した。確認調査により、後に調査区としたIV区及びV区については、次年度に調査することとなった。

2 調査経過と調査方法

発掘調査は、平成8年6月10日に開始し、平成9年10月31日に終了した。

調査区は、先に予備調査を実施した西側から順に、I区～V区と命名した（第47図）。



第46図 深川遺跡位置図 (S=1/25,000)

調査区は、道路幅の約15mを対象とした細長い地区設定となった。当初は、Ⅰ区～Ⅲ区について、同時に調査を開始した。次に、Ⅳ区の調査を行い、後に調査区となったⅤ区については、平成9年度に調査を実施した。

発掘調査は、重機による表土の除去から調査を開始し、実測図作成のための4級基準点測量とメッシュ杭設置作業を外部委託しておこなった。国土座標軸を利用して、調査区及び遺構の位置を正確に記録するためである。メッシュ杭は10m単位で設置し、東西、南北に区切られた正方形をグリッドと呼び、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字で番号をつけた。そして、それぞれが交わるグリッドをA-1区、C-4区等と呼称した。遺物の取上げについては、溝や井戸から出土した遺物については、層位ごとの取上げとした。それ以外の住居跡等から出土した遺物については、図面でその出土位置を記録した。また、その他、遺物包含層の遺物については、このグリッドと層位毎の取上げとした。

第2節 調査組織

(1) 現地調査、平成9年度

調査責任者 桑山裕好（文化課長）

丸山秀人（課長補佐）

調査総括 松本健郎（主幹・文化財調査第2係長）

調査担当 園村辰実（文化財保護主事）、村崎孝宏（文化財保護主事）、浜田彰久（文化財保護主事）、帆足俊文（学芸員）、本山千絵（嘱託）、北原美和子（嘱託）、荒木聖子（嘱託）

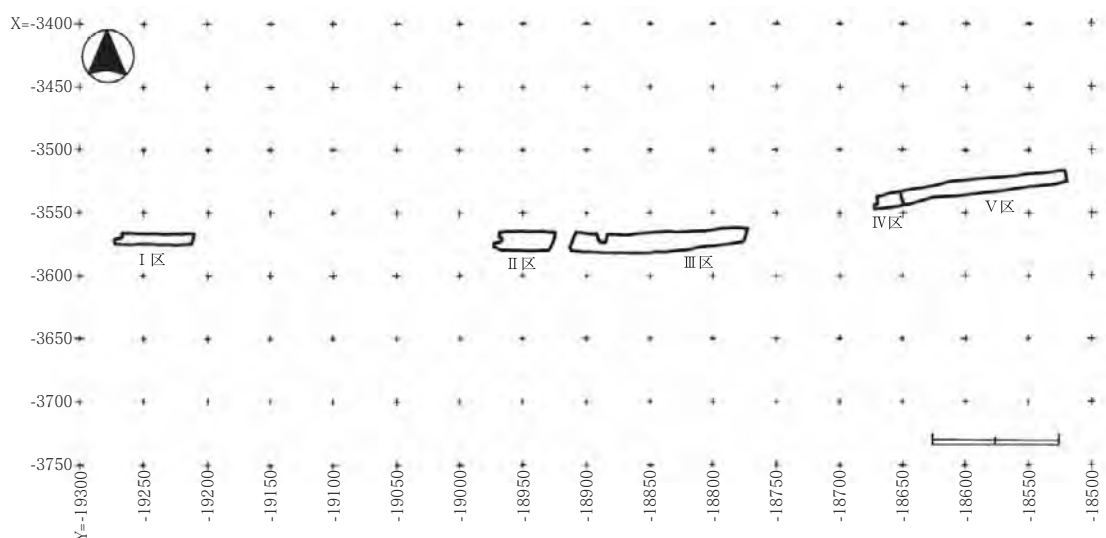
(2) 整理・報告書作成、平成11年度（報告書印刷は、平成12年度）

整理責任者 豊田貞二（文化課長）

島津義昭（課長補佐）

整理総括 高木正文（文化財調査第1係長）

整理担当 帆足俊文（学芸員）、知名石陽子（嘱託）、杉井涼子（嘱託）



第47図 深川遺跡調査区配置図 (S=1/6,000)

第2章 調査成果

第1節 立地

深川遺跡は菊池市深川ほかに所在する（第46図）。

遺跡の自然的・歴史的環境については、第I部の瀬戸口穴墓群の調査に示したため、割愛する。

第2節 概要

調査区は、道路計画幅を対象地として設定した。

予備調査により遺構が確認された地点を、西側からI区～V区と命名した。

I区は、古代の郡衙跡と推定される西寺遺跡の北側約100mにあたる。この調査区については、遺物包含層は削平を受けており、ほとんど残存していなかった。そのため、調査は、遺構の検出のみとなった。そのため、遺構の時期についても、限定できる根拠がなかった。

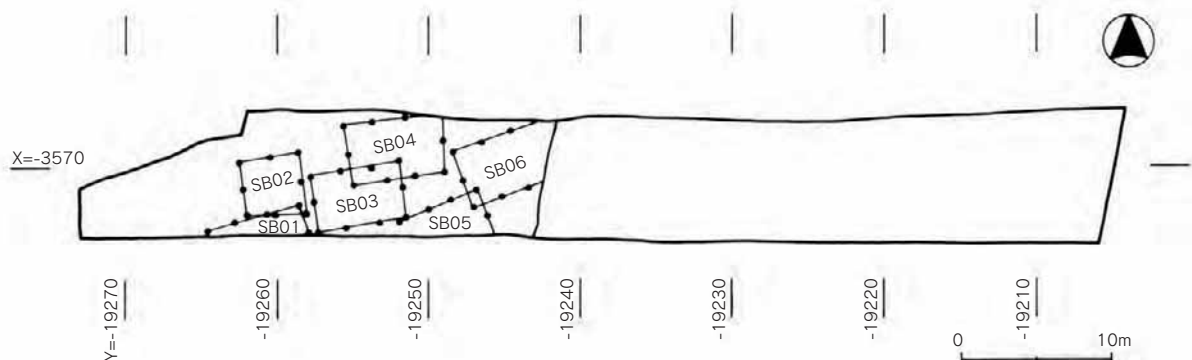
II区は、遺構が確認されず、遺物包含層の遺物のとりあげのみとした。

III区とV区は、距離は離れているものの、遺跡の時代や性格は似通っていた。古代と中世の遺構・遺物を検出したため、当遺跡の性格をわずかながら把握することができた。ただし、他の調査区の例にもれず、後世に地形を削平して、平坦な地形としているようであった。そのため、地形の削平状態により遺構の残存している場所が限られていた。調査区周辺については、本来、もう少し、起伏にとむ地形であったと考えられる。なお、IV区については、遺構を確認することはできず、異物包含層から、遺物のみを取上げた。

V区については、溝遺構を確認した。この溝については、埋没した後、掘り返すという行為を繰り返しており、包含される遺物の時期にも時間幅があった。その他、井戸を1基、検出した。

第3節 検出遺構と出土遺物

各調査区において検出した遺構と遺物について述べる。遺物の詳細については、観察表の記載をもつてかえたい（第12表）。



第48図 I区遺構配置図 (S=1/500)

1. I 区の調査

当該調査区については、以前に土地改良をおこなっているため、削平を受けている部分も多い。I 区でも、東側半分については、調査が不可能であった。また、西側で検出した柱穴等については、浅いものが多かった。検出したのは、掘立柱建物6棟である。隣接する西寺遺跡は、古代郡衙の推定地とされており、現存している寺院周辺の土塁とそれに伴う濠の痕が、当時の遺構の痕跡と考えられている。その土塁と濠（図版16-2の樹木の部分が土塁跡）については、ほぼ東西及び南北方向に沿ったものである。I 区で検出した掘立柱建物群については、この土塁とは、軸線の方向をほぼ一にしているもの、即ち東西方向に近いものと、その方向からずれるものが混在している。これらの軸線方向の違いについては、その築造の時期に時間差があることが想定される。また、土塁跡と軸線を一にしているものについては、周辺の町並みが規格的に配置されていた可能性を示唆しており、興味深い。ただし、この場合、(1)土塁跡とそれに囲まれた西寺遺跡が郡衙跡であること、(2)土塁跡と軸線を一にする建物群が、郡衙跡と同時期の遺構であること、(3)建物群が、郡衙に関連する施設であること等の、それぞれの条件が合致するか否かによって、復元できる風景は異なる。そのため、それぞれについての検証が必要となる。

I 区からは出土遺物がほとんど無く、これらの遺構の時期を確定することができない。また、I 区から出土した遺物には、古代から中近世の遺物が混在しており、包含層も層位的に良好な残存状態ではなかった。遺構の所属時期も、限定することは困難であり、やや時代が新しくなる可能性もある。

SB01（第49図）

遺構 I 区西側に位置する遺構で、遺構南側が調査区外となる。桁行と梁行が延びる可能性がある。SB02と重複しているが切り合い関係は不明。主軸方向については、SB05と類似している。検出した範囲では、3間×1間で桁行6.3m、梁行2.1mである。柱間寸法は、桁行1.8～2.4m、梁行は検出した2柱穴間が2.0mである。桁行と梁行の柱穴は、ほぼ一直線に並び、それぞれは、ほぼ直角に交わる。柱穴の下端のレベルは一定ではない。なお、明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。柱穴の下端レベルは一定ではない。

遺物 柱穴から出土した遺物及びSB01に伴うと判断できる遺物はない。

SB02（第49図）

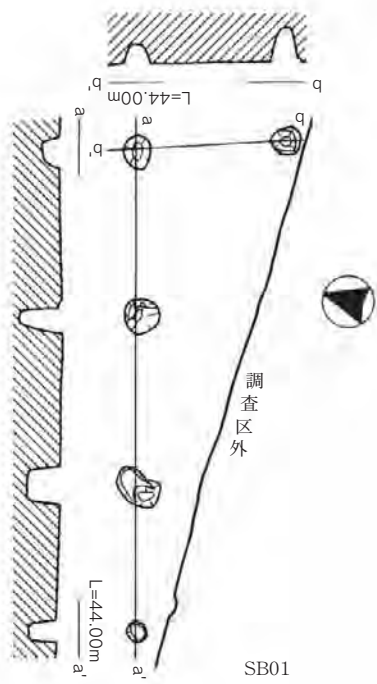
遺構 I 区西側に位置する遺構で、SB03と並列している。SB02と重複しているが切り合い関係は不明。桁行、梁行ともに、一辺が約4.2mの2間×2間の建物である。柱間寸法は、桁行で2.1m～1.8m、梁行も同じである。それぞれの柱間隔は、均等であるが、その反対辺との柱間隔は異なる。

梁行及び桁行は、一部、真ん中の柱がやや中央によるが、それぞれは、ほぼ直線に整列する。ただし、向かい合う辺の柱間寸法が異なるため、8本の柱の並びは正方形にならず、1辺だけが斜めに配置される。柱穴の下端レベルは、一部、異なるものもあるが、ほぼ一定である。なお、明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。

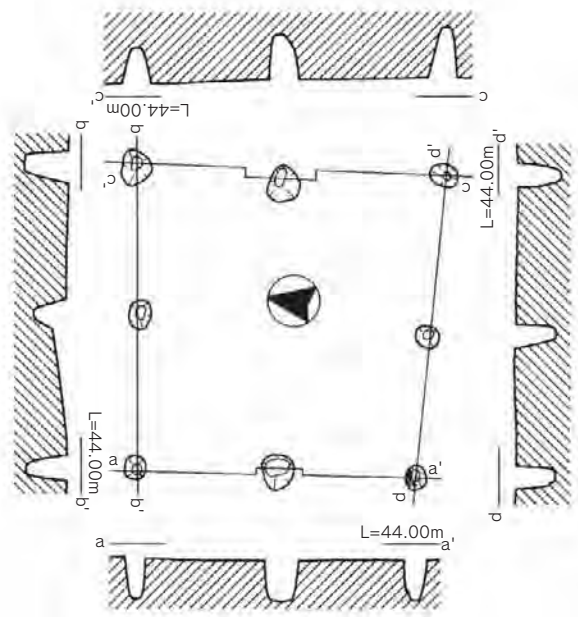
遺物 柱穴から出土した遺物及びSB02に伴うと判断できる遺物はない。

SB03（第49図）

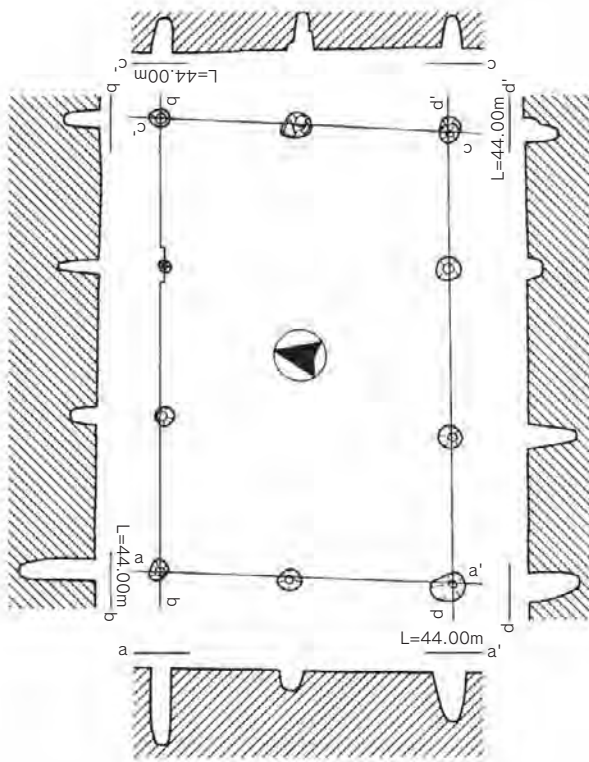
遺構 I 区西側に位置する遺構で、全ての柱穴が調査区内でおさまる。SB04及びSB05と重複しているが、切り合い関係は不明。主軸方向については、SB04とほぼ似通っている。2間×3間の建物で、桁行約6.1m、



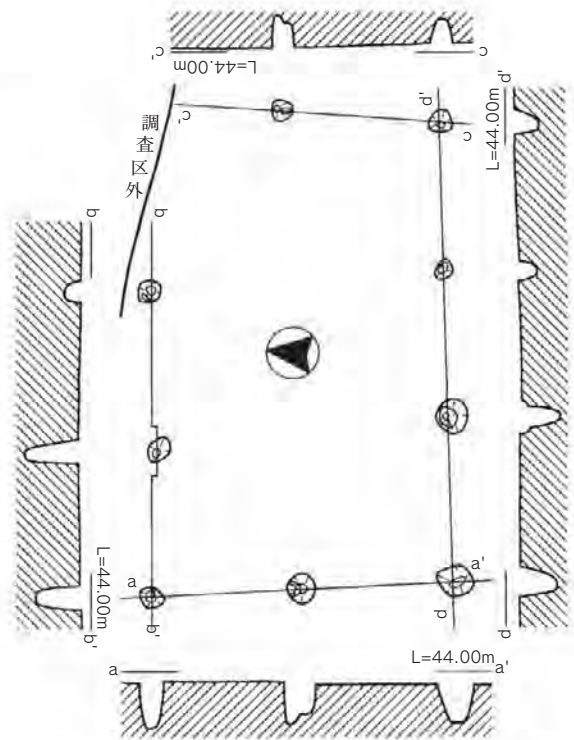
SB01



SB02



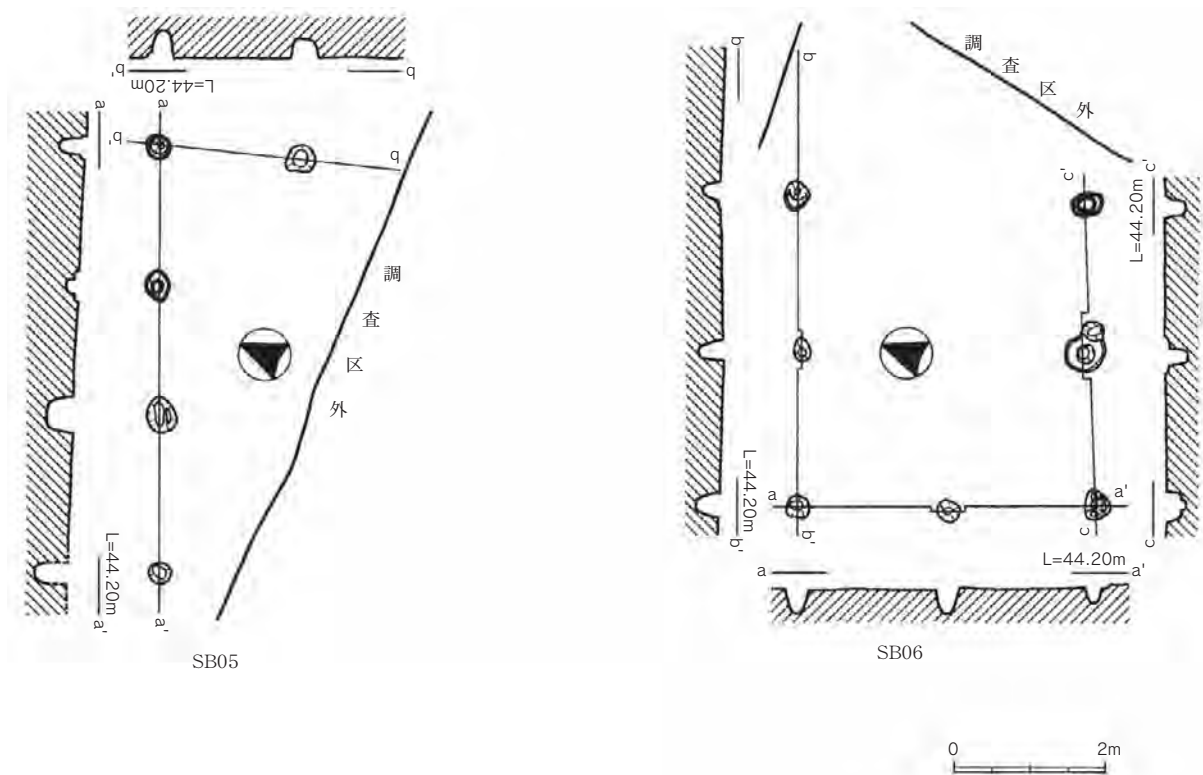
SB03



SB04



第49図 SB01~SB04実測図 (S=1/100)



第50図 SD05,06実測図 (S=1/100)

梁行3.9mである。柱間寸法は、桁行で2~2.2m、梁行で1.8~2.2mである。桁行及び梁行の柱穴については、ほぼ一直線に並ぶ。桁行と梁行は、それぞれほぼ平行に位置しており、整った並びである。

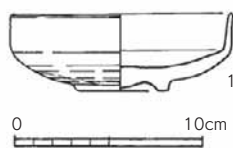
柱穴の下端のレベルは一定ではないが、角柱がやや深い傾向をもつ。なお、明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。

遺物 柱穴から出土した遺物及びSB03に伴うと判断できる遺物はない。

SB04 (第49図)

遺構 I区西側に位置する遺構で、SB03と重複している。主軸方向については、SB03とほぼ似通っている。SB03との切り合い関係は不明。一部、調査区外にのびるが、おそらく、2間×3間の建物であったと考える。桁行約6.2m、梁行約4.1mである。柱間寸法は、桁行で1.9~2.2m、梁行で2.0~2.2mである。桁行の4柱穴及び梁行の3柱穴については、一部、内側にずれるものがあるものの、ほぼ一直線に並ぶ。四角形の二辺については、若干、広がる配置となる。

柱穴の下端のレベルについては、極端に浅い柱穴が3本あるが、それ以外の柱穴のレベルについては、ほぼ一定である。明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。



第51図 包含層出土の遺物

遺物 柱穴から出土した遺物及びSB04に伴うと判断できる遺物はない。

SB05 (第50図)

遺構 I区西側に位置する遺構で、遺構南側が調査区外となる。桁行

と梁行が延びる可能性もあるが、2間×4間の建物である可能性が高いと考えている。SB03及びSB06と重複しているが、切り合い関係については不明である。主軸方向については、SB01とほぼ似通っている。桁行約5.7m、梁行は、検出した2柱穴間の距離が約1.8mである。柱間寸法は、桁行で1.7～2.1m、梁行は、1.8m。桁行及び梁行の柱穴については、ほぼ一直線に並ぶ。この二辺は、直角よりも狭い角度で交わる。柱穴の下端のレベルについては、あまり一定ではない。明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。

遺物 柱穴から出土した遺物及びSB05に伴うと判断できる遺物はない。

SB06（第50図）

遺構 I区西側に位置する遺構で、遺構東側は現道により破壊されており、調査不可能であった。桁行が延びる可能性もある。2間×4間の規模の建物である可能性を考えている。SB05と重複しているが、切り合い関係については不明である。

梁行3.9m、桁行は、検出した2柱穴間で約4.2mである。柱間寸法は、梁行で1.9～2.0m、桁行は、2.0～2.1mである。桁行及び梁行の柱穴については、ほぼ一直線に並び、それぞれが、ほぼ直角に交わる。

柱穴の下端のレベルについては、あまり一定ではない。明確な柱痕跡を確認できた柱穴はない。

遺物 柱穴から出土した遺物及びSB06に伴うと判断できる遺物はない。

包含層の遺物（第51図）

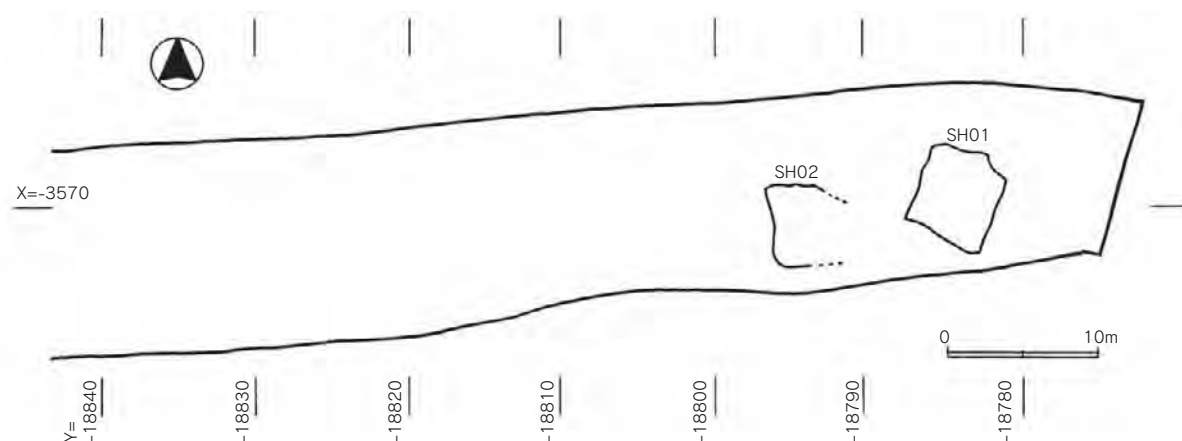
前述したとおり、ほとんど包含層が残存しておらず、出土した遺物は碎片のみであった。

それらの遺物も各時代のものが混入しており、時期決定の根拠とはなり得ない。柱痕からも遺物は出土していない。薄い包含層から出土した遺物で、かろうじて図化できた遺物を示しておく。長石釉がかかる肥前系陶器である。外面底部付近に砂目積みのあとが残る。1600年代前期の皿と考えられる。

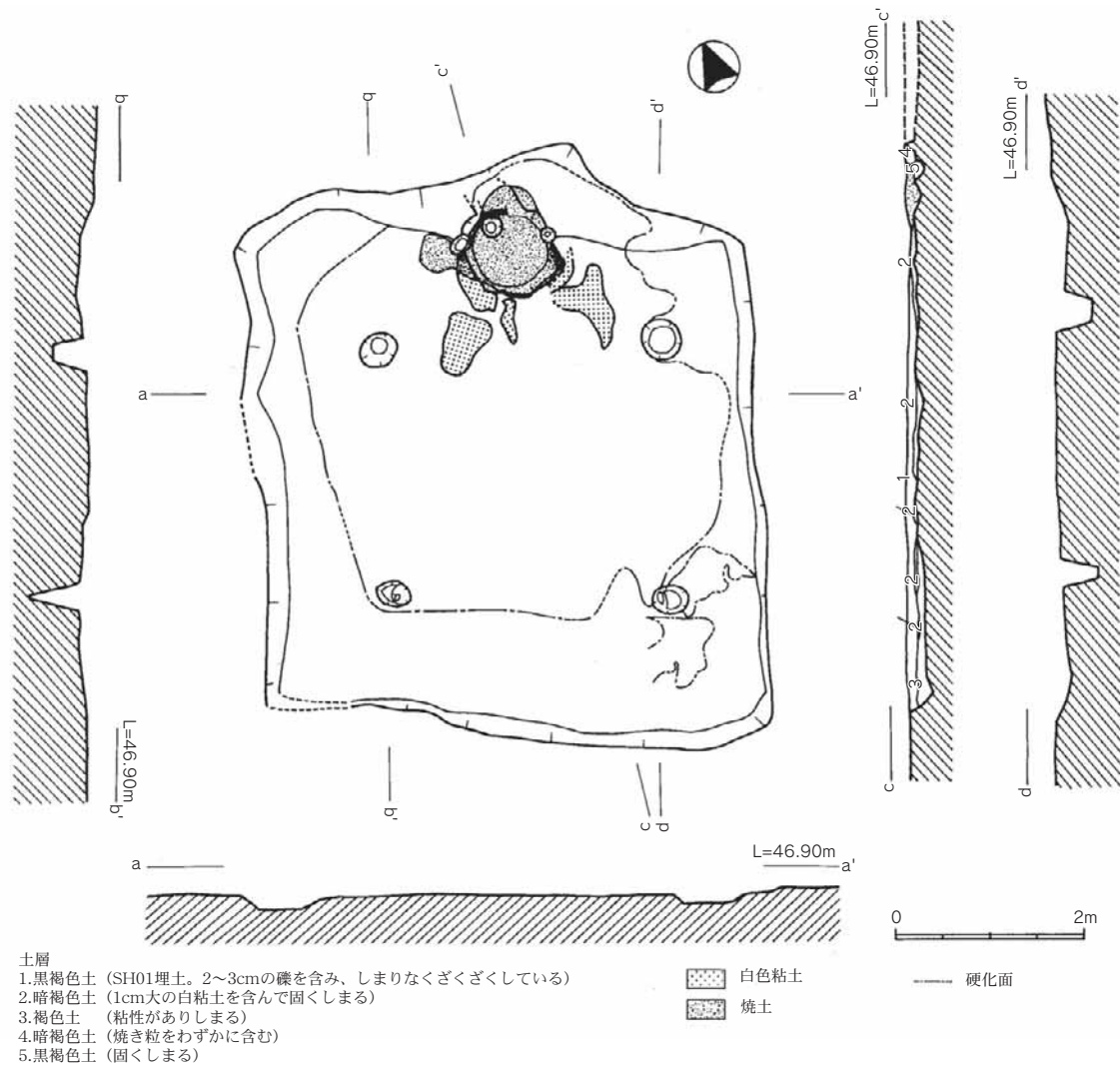
2 II区の調査

事前調査により遺物が検出されて調査対象としていた地区である。

遺物は、古代の土師器、須恵器、中世の輸入陶磁器等の破片が大部分である。細片のみであったため、図示することができなかった。



第52図 III区遺構配置図（1）（S=1/500）



第53図 SH01実測図 (S=1/80)

3 III区の調査 (第52図・第56図)

確認した遺構の主な時代は、大きく古代 (第52図) と中世 (第56図) の2時期に分けられる。

古代の遺構として、堅穴住居を検出した。また、中世の遺構については、溝と土坑を検出した。以下、検出した主要な遺構、遺物について記述を進めるが、それぞれの遺物については、以下の記述の中では種類と法量のみを記し、詳細は後節でまとめて取り上げることとする。

なお、調査区内の基本土層については、次のとおりである。

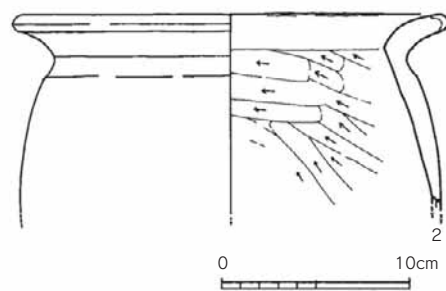
I層…表土、耕作土

II層…暗褐色粘質土 (中世の遺物包含層。調査区内全体には残らず、部分的にわずかに残る程度。)

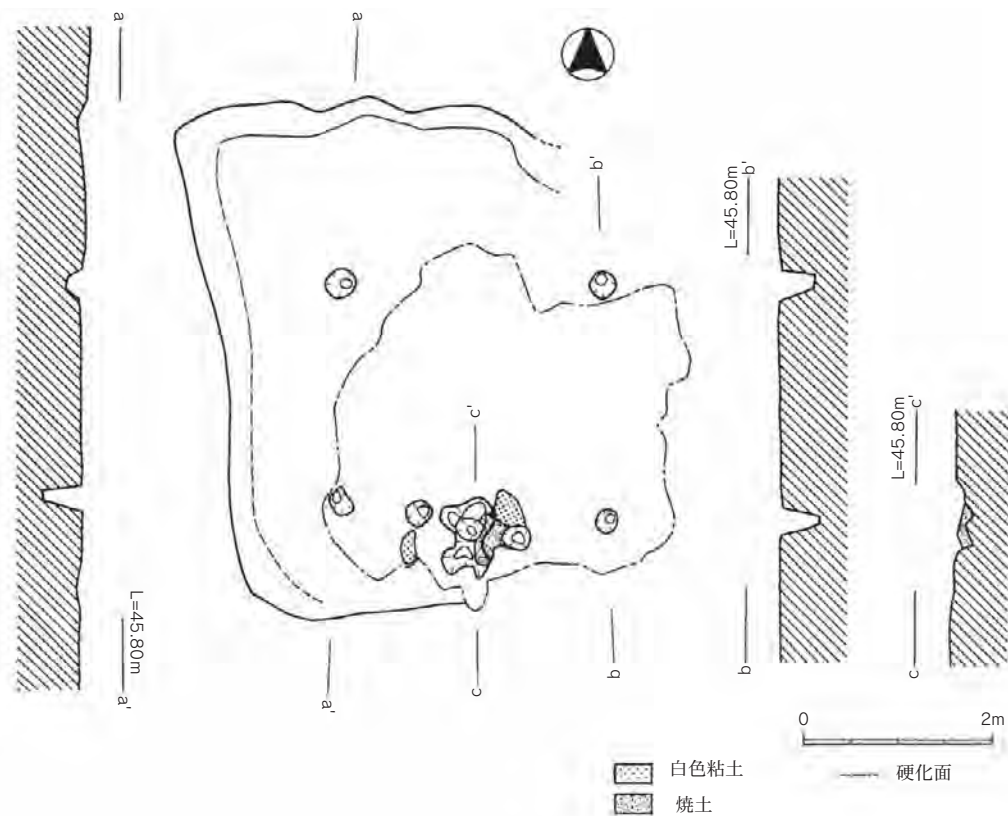
III層…明褐色弱粘質土 (上面が、中世の遺構検出面。古代の遺物包含層。)

IV層…明褐色粘質土 (上面が、古代の遺構検出面。)

V層…礫 (こぶし大の円礫) 層



第54図 SH01 出土遺物



第55図 SH02 実測図 (S=1/80)

(1) 古代

SH01 (第53図)

調査区の東端部で、隣接する2棟の堅穴住居を検出した。

2棟の重複関係は、土層観察の結果からは不明であり、切り合い関係もない。遺物や構造から判断して、ほぼ同時期の所産と考えている。

SH01は、南北約5.8m、東西検出長4.4mの方形プランを呈する住居である。住居の北辺中央部には、カマドの痕跡を確認した。

住居の周辺は、削平が激しく、床面近くの平面形のみを確認することができた。カマドや壁の立ち上がりについては、上部構造はほとんど残っていなかった。住居の床面レベルについても、西側の一部は削平されていたが、その平面形については、かろうじてその全体形を確認することができた。遺構の埋土についても、ほとんど残っておらず、遺物は、遺構内のやや低い部分に残っている状態であった。

住居の立ち上がり部分は、残存部では比較的ゆるやかである。

床面は、削平により大半が失われているが、中心部においては、径約3~5mの貼床が遺存していた。この部分は、非常に硬く締められており、明らかに、その周辺と異なることが確認できる。壁面のやや内側には、床面の貼床前に、不定形に周溝状に掘りこんだ痕跡を確認した。

主柱穴は4本である。南東の1本の残りは悪いが、その他3本の柱穴については、はっきりと確認することができた。柱穴の規模は、直径40cm前後、深さ約30~40cmを測る。柱間は東西約3.0m、南北約2.7~2.8mで、東西方向がやや長い。柱痕跡を確認できたのは2本の柱穴であった。それらについては、柱穴の底部とその周辺を何度もつき固めた痕跡を確認することができた。

カマドについては、焼土、白色粘土の存在から、カマドの痕跡であると判断した。炉穴部分は、径約1mで

あり、焼土が充填されていた。その中央部北側には、支脚を建てたと考えられる土坑が1基、その両側には、小土坑を各1基、確認した。支柱状のものがあったのであろうか。白色粘土は、焼土坑の周辺に残存していた。ただし、当初、カマドが設置されていたと考えられる範囲よりさらに南側まで広がっている。焼土坑の北側には、煙道と考えられる溝状の掘りこみを検出した。ただし、この溝状の掘りこみについては、削平のため全体の構造は分からない。

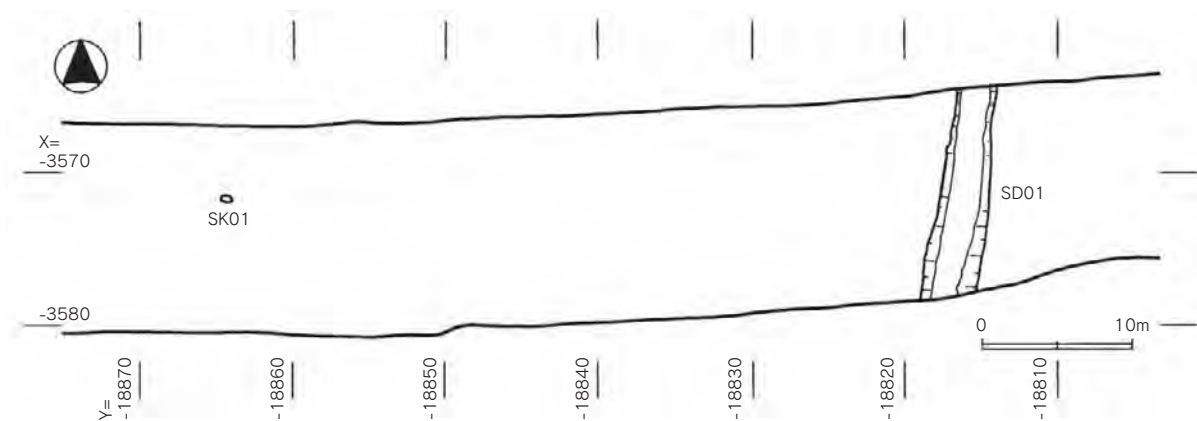
SH01から出土した遺物は少ない。図化できるものとして土師器の甕（第54図）がある。口縁内面が傾斜し、明瞭な段を有する。内面はヘラケズリである。その他、図化できなかったが、土師器の甕、高杯片が出土した。

SH02（第55図）

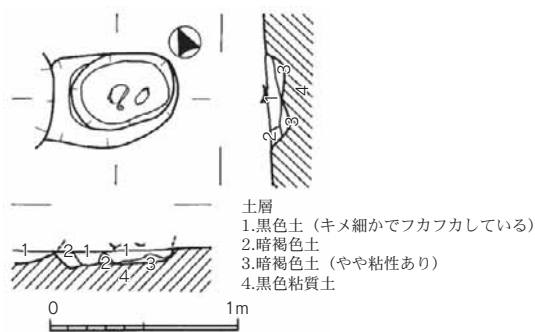
SH02については、当初、単純な落ち込みと推定したが。しかし、その後、南側辺の立ち上がりを確認したこと、また、4本の柱穴、焼土、床面と考えられる硬化面を検出したことを根拠として住居と判断した。

上部はほとんど削平されており、その残存状況はSH01より悪い。住居の平面形については、東辺と南北辺の東側半分は確認できない。西側半分について、かろうじて、地山面より低く掘りこんだ痕跡を確認した。住居として検出した規模は、南北約5.4m、東西約4.8mである。東側辺が確認できないため、住居の東西方向の規模については、さらに広がると考えられる。

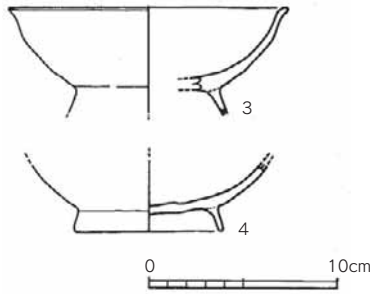
南側辺のほぼ中央部に、カマド痕跡を確認した。ほとんどが破壊されていたが、ごく浅い焼土坑を確認することができた。本来、焼土坑の中央部であったと考えている場所に、支脚をすえたと考えられる径約30cmの土坑を検出した。また、その土坑から東西にそれぞれ約50cm離れた場所に、径約30cmの土坑を検出した。この2基の土坑の周辺には、白色粘土が、少量、広がっていた。



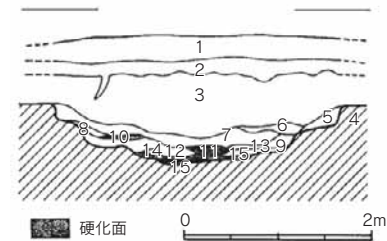
第56図 III区遺構配置図（2）（S=1/500）



第57図 SK01 実測図（S=1/40）

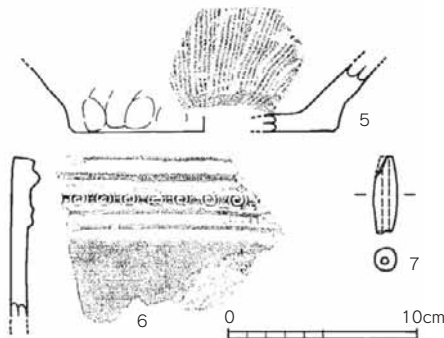


第58図 SK01 出土遺物

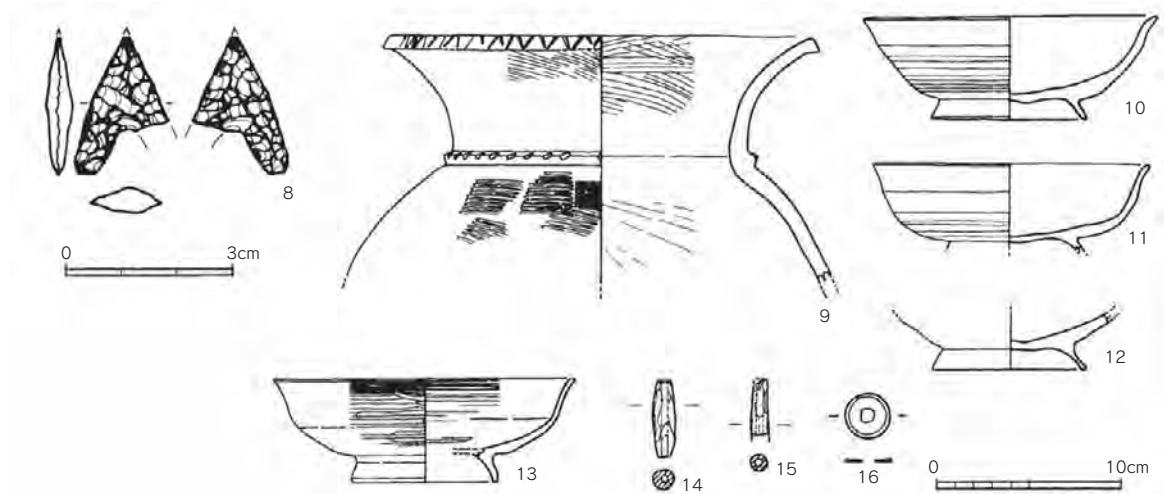


- 土層
- I 層 表土・耕作土
 - II 層 暗褐色弱粘質土
 - III 層 明褐色弱粘質土
 - IVa層 明褐色粘質土
 - 5 層 黒褐色土 (やや粘性を持ち、かたくしまる)
 - 6 層 暗褐色土 (しまりがわるい)
 - 7 層 暗褐色土 (ややしまりがわるい)
 - 8 層 暗褐色土 (やや粘性あり、しまりは良く、ややかたい)
 - 9 層 暗褐色土 (7層に類似するが、色調はやや明るめ)
 - 10 層 暗褐色土 (III層に類似した土が硬化している)
 - 11 層 暗褐色土
 - 12 層 黒褐色土 (やや粘性あり)
 - 13 層 黒褐色土 (やや明るく、粘性あり)
 - 14 層 暗褐色土 (12層と類似するが、粘性が強く、しまっている)
 - 15 層 暗褐色土 (IVa層が汚れて硬化したものの)
 - 16 層 暗褐色土 (15層と類似、色調がやや暗い)

第59図 SD01 土層断面図 (S=1/80)



第60図 SD01 出土遺物



第61図 包含層出土の遺物

カマド痕跡の周辺には、約3.6×4mの範囲で硬化面を検出した。住居の貼床であったと考えている。上部の削平が激しく、残存状況は良くなかった。

SH02からは、土師器片のみが出土した。SH01で出土した土師器と同じ時期であると考えているが、図化できるほどの破片ではなく、その時期を断定することは難しい。

(2) 中世 (第56図)

SK01 (第57図)

遺構 III層上面において検出した土抗である。

人為的に掘り込まれたかどうかは、周辺に類似した遺構がないこともあり、判断することができなかった。包含層がほとんど残存していない状況で、ほとんど唯一、遺物を伴う土抗であった。

遺物 (第58図) 土師器碗 (3) と、黒色土器A類の碗 (4) が出土した。

SD01 (第59図)

遺構 溝状遺構を1条、確認した。出土遺物から、中世の所産であると判断した。なお、断面図を示した場所においては、遺構上部が削平をうけていたためIV層上面からの切りこみとなっているが、その他の場所において、III層上面からの切りこみであることを確認している。

溝の底面に非常に硬い硬化面が存在した。中世の道路状遺構であると考えている。ただし、整地をした痕跡等は認めら

れなかった。ある程度、長い期間、道路として機能していたと考えている。

遺物（第60図） 瓦質土器の播鉢（5）、火鉢（6）及び土錘（7）が出土している。

包含層

調査区内の西側部分については、本来、高い場所が、後世に削平を受けているため、ほとんど遺物包含層が残存していない。調査区内の東側にいくにしたがって、若干、遺物包含層が残存していた。

包含層の遺物（第61図）

包含層は薄く、出土した遺物量は少ない。古代、中世の土師器が多いが、それらの残存状況は悪い。その他の時期の遺物も若干、含まれている。これらの中から、図化できるもののみを掲載した。詳細については、観察表に示した（第12表）。

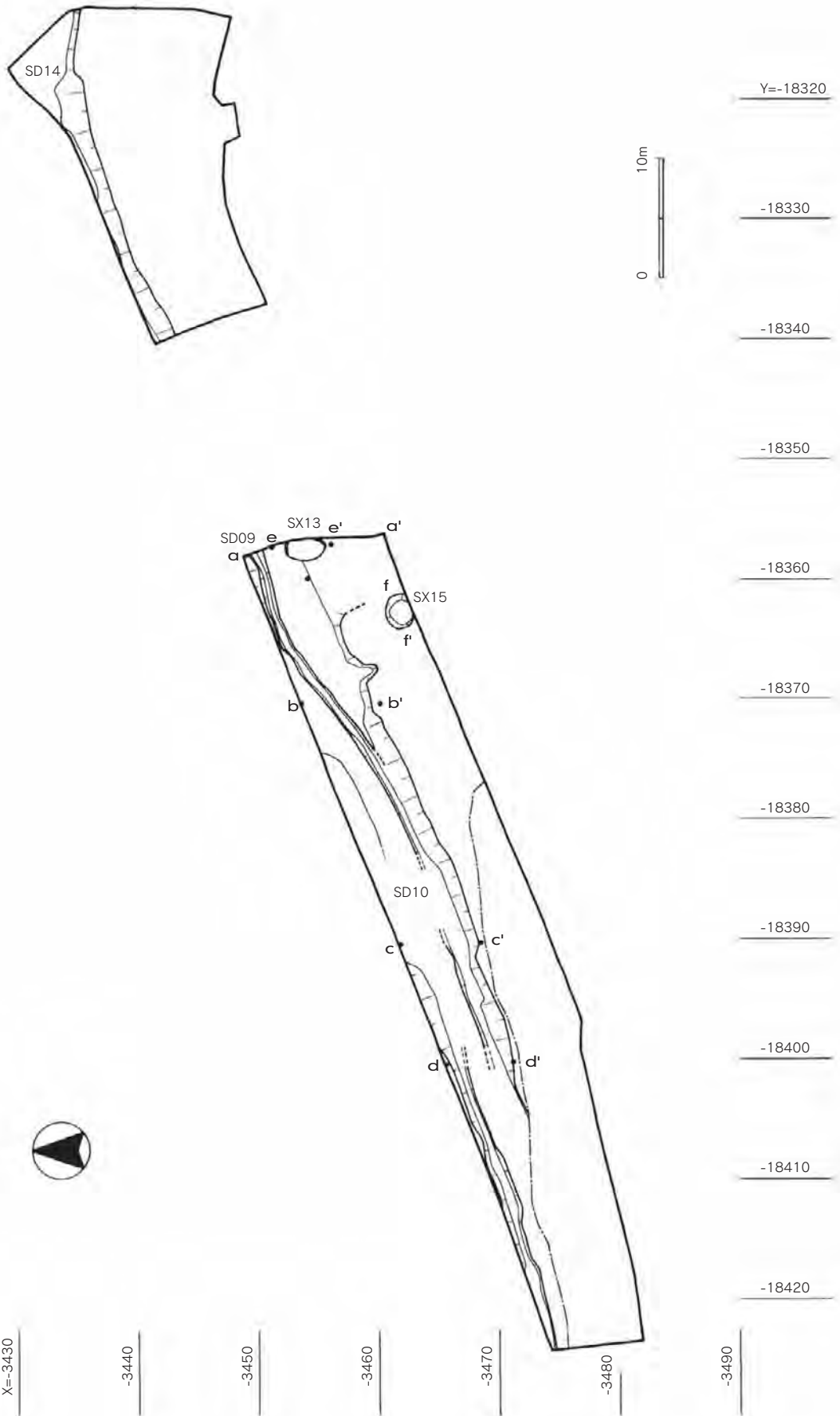
8は、縄文時代の石鏃。縄文時代の中でも古い時期のものかと考えている。

9は、外面にタタキがみられる弥生時代後期の壺形土器。

10～13は、土師器。10・11は、やや丸みをおびた体部からたちあがり、口縁部をやや外反させる。ミガキの痕跡は顕著ではない。13は、10・11と類似した形態であるが、内外面を丁寧に磨いた黒色土器B類である。

14・15は、土錘である。後述するV区からも出土している。

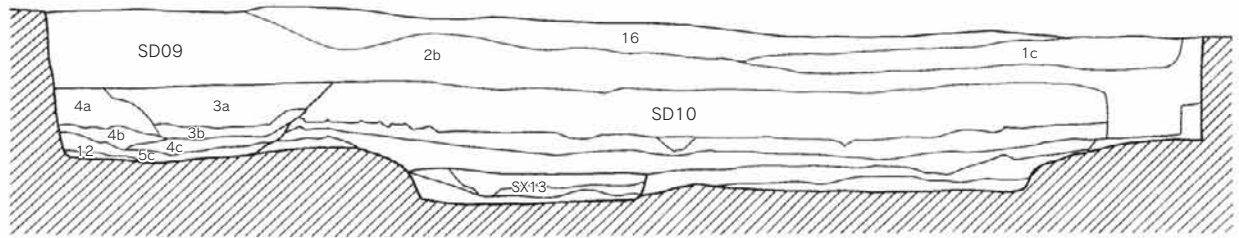
16は、銭である。表面の銭文が摩滅しているため、時期不明である。



第62図 V区遺構配置図 (S=1/500)

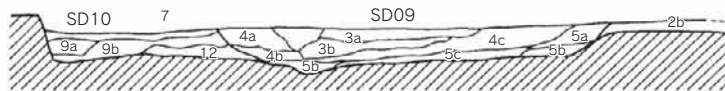
L=51.10m a

a'



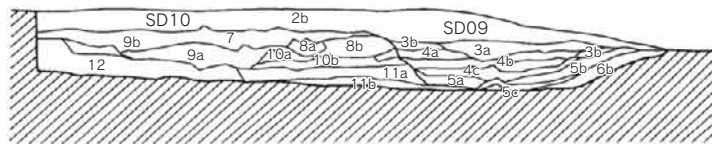
L=49.90m b

b'



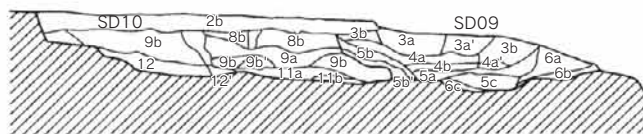
L=49.90m c

c'



L=49.90m d

d'

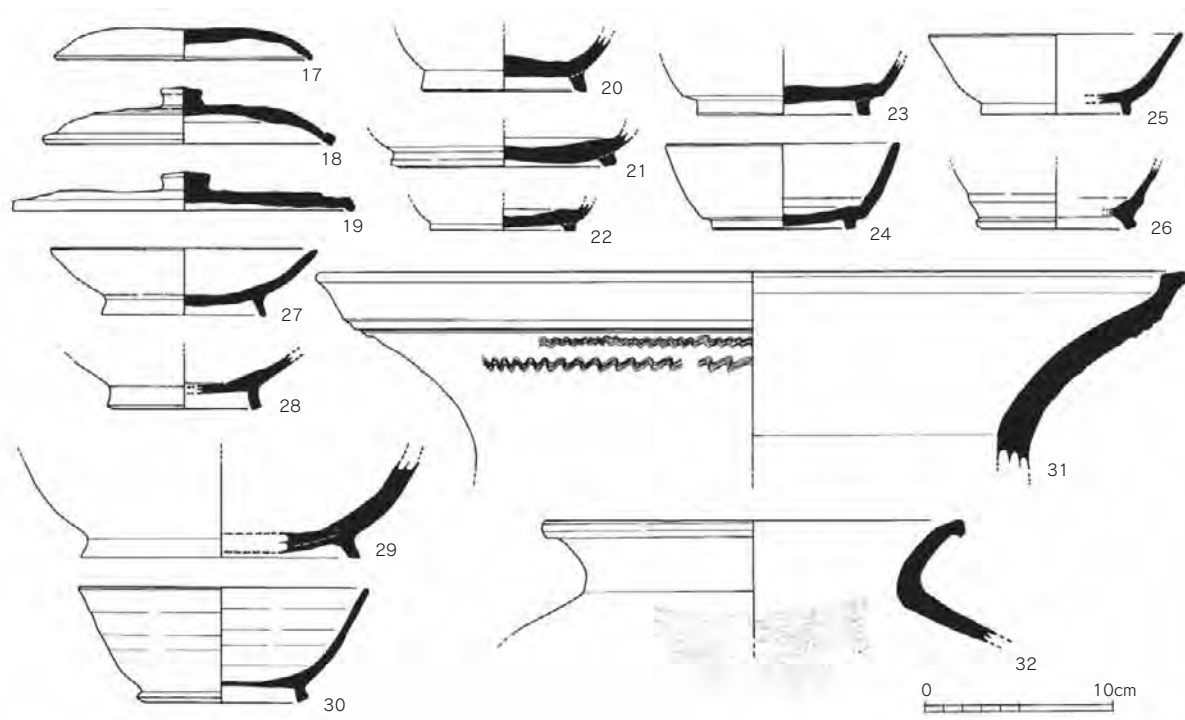


土層

- 1 表土
- 2a 水田床土
- 2b 旧耕作土
- 3a 褐色土
- 3b 褐色シルト
- 4a 淡褐色砂質土(粒子が非常に小さい)
- 4a' 淡褐色砂質土(4a層よりやや粒子が粗い)
- 4b 淡褐色砂質土(黄褐色の粒子が混ざる)
- 4b' 淡褐色砂質土 (レキが混入する)
- 4c 淡褐色砂質土(粒子が粗くザラザラしている)
- 5a 黒褐色砂礫土(黒っぽく荒い砂礫層。3から4cm大のレキを含む)
- 5b 黒褐色砂礫土(やや粒子が粗い)
- 5b' 黒褐色砂礫土(鉄分が集積)
- 5c 黒褐色砂礫土(小レキが多量に含まれる)
- 6a 淡褐色砂礫土
- 6b 淡褐色土(レキをあまり含まずよくしまる)
- 6c 淡褐色小レキ土
- 7 茶褐色土
- 8a 褐色砂礫土(粗い粒子の砂粒を含む)
- 8b 褐色砂質土
- 9a 暗褐色砂質土
- 9b 暗褐色土(しまりのよい細かい粒子)
- 9b' 暗褐色土(若干の砂粒を含む)
- 10a 褐色砂礫土
- 10b 砂層(1-2cm大のレキを少量含む)
- 11a 黒色砂礫土(こぶし大のレキを含む)
- 11b 黒色小レキ土(やや小さめのレキを少量含む)
- 12 暗褐色弱粘質土(粒子が細かくしまりがある)
- 12' 12層と13層に類似する砂粒子が混在した層
- 13 黄褐色粘質土(鉄分の集積により赤く、非常に硬い)



第63図 SD09・10, SX13土層断面図 (S=1/80)



第64図 SD10 出土遺物

4 V区の調査（第70図）

深川遺跡の全調査区の中で、最も東側に位置する調査区である。

遺構の時期は、大きく、2時期が存在する。上層の中世の面と、下層の古代の生活面である。

上層については、包含層の遺存状態は悪い。その時期の把握については、遺構に伴う遺物による。上層で確認した遺構は、井戸と考えられる土抗（SX15）と、後述する溝のみである。

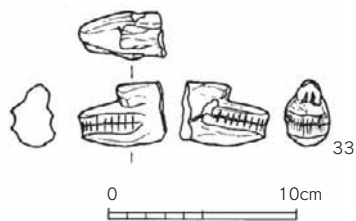
下層においては、大規模な溝を検出した。調査区の幅は、細長い道路幅という事情もあり、調査区のほとんどがこの溝状遺構で占められた。

遺物については、この溝状遺構から、古代の土師器、須恵器片が大量に出土した。

溝はSD09、SD10、SD14の3条を確認している。これらは、前の溝が埋没した後に掘り返すという行為を繰り返したものだと考えている。SD14の埋土は、中世期に埋没した流入埋土である。このため、SD14の時期については、埋没が中世までに完了したものととらえている。その他のSD09とSD10については、古代の遺物のみが出土した。

SD10の埋没途中に、土抗が1基（SX13）形成されているが、不定形で機能・用途は不明である。それぞれの遺構の形成順序は次のとおりである。

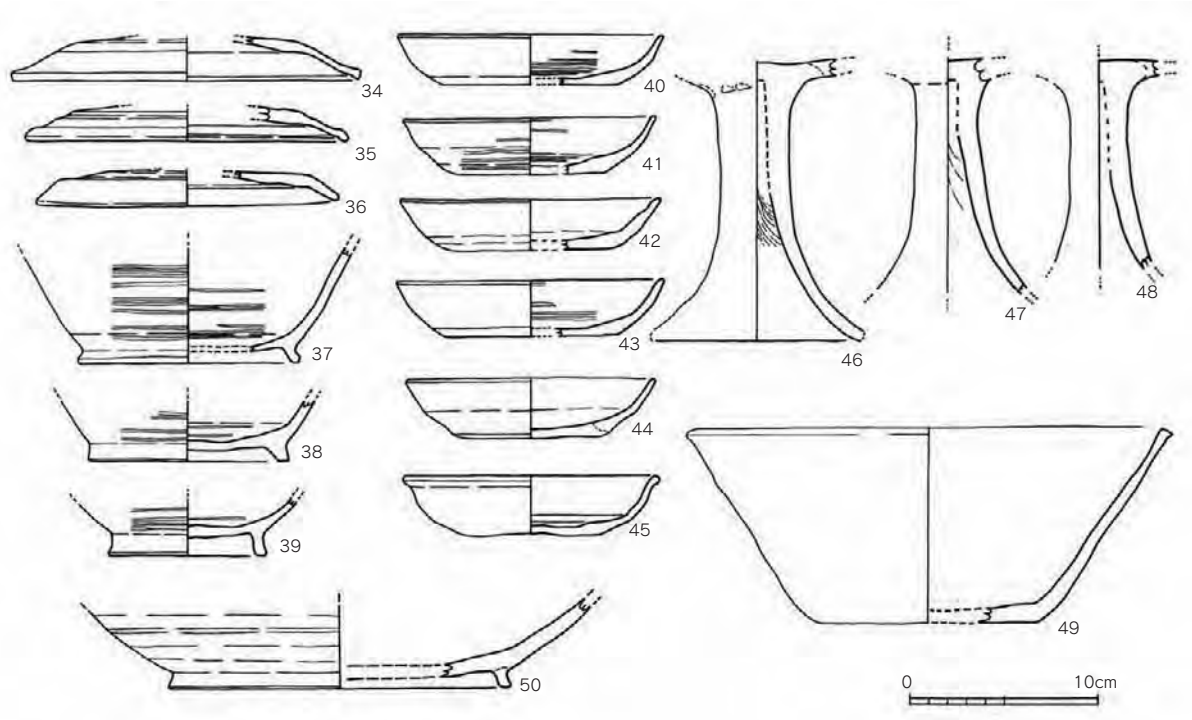
SD10（下層）→SX13→SD10（上層）→SD09→SD14



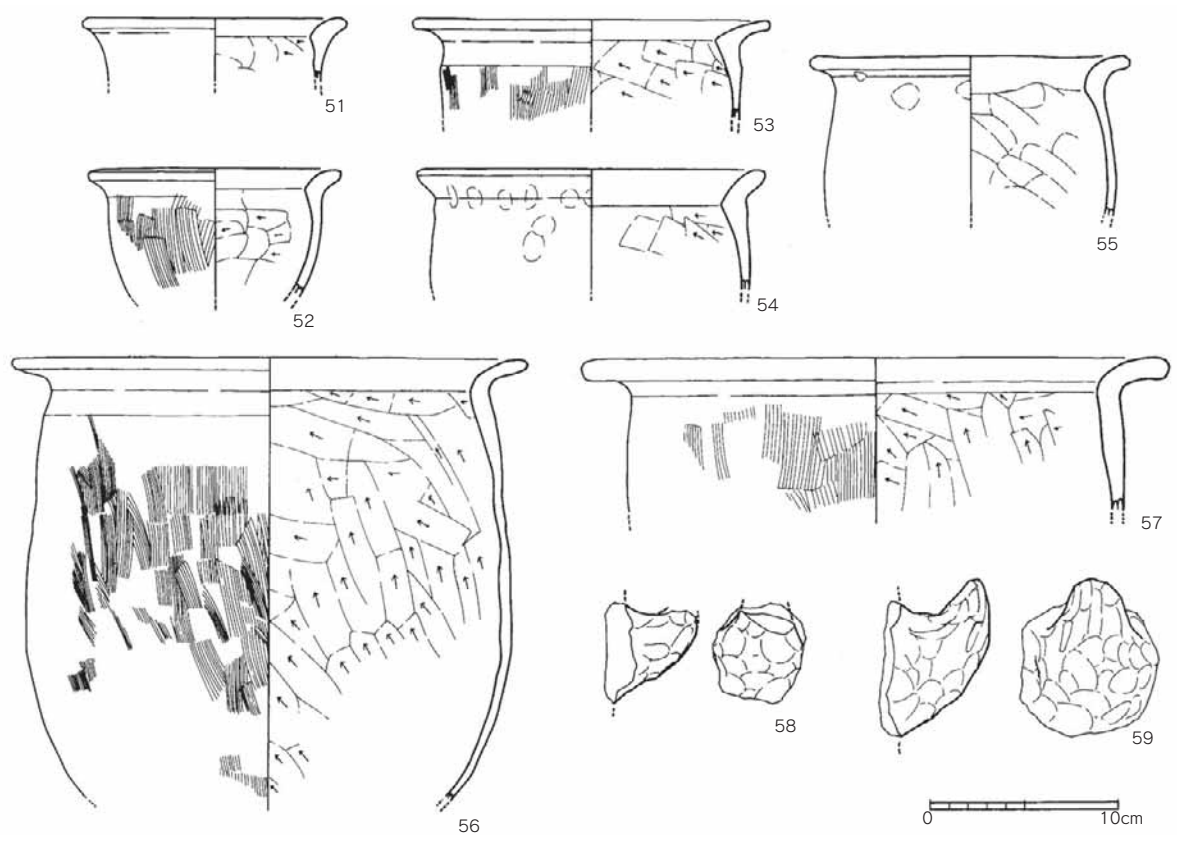
第65図 SD10出土遺物

出土遺物の概要

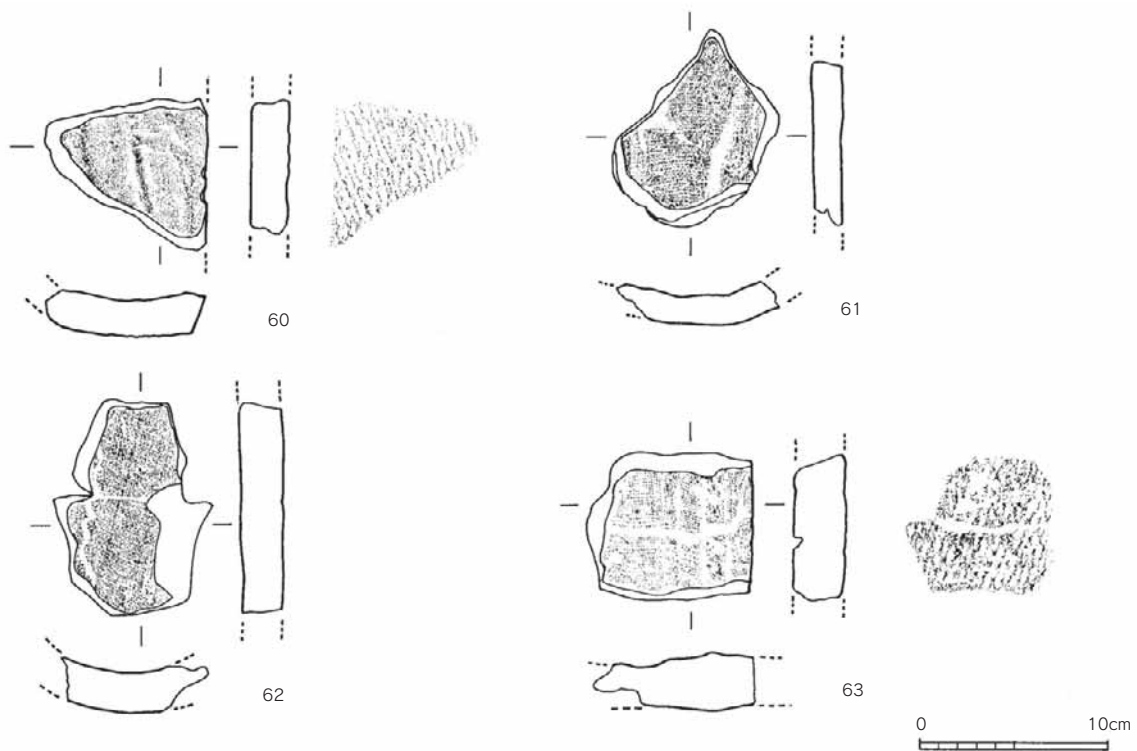
以下、遺構ごとに出土遺物の概要を示す。調整や焼成等の詳細については、遺物観察表（第12表）に掲載したため、ここでは、その概要のみを述べる。



第66図 SD10・14出土遺物



第67図 SD10出土遺物



第68図 SD10出土遺物

(1) 古代

SD10出土遺物（第64図～第71図）

出土遺物については、若干の時間幅をもつが、概ね8世紀末から9世紀初頭までの時期の所産であると考えている。回転ヘラミガキ土師器や、ミニチュアの甕、墨書土器や布目瓦等、注目すべき遺物も含まれる。一部、やや時期がさかのぼるものもある。

遺物については、ほとんどがこのSD10からの出土である。

須恵器（第64図・第65図）

17～33は、須恵器である。図化できる16点を示した。

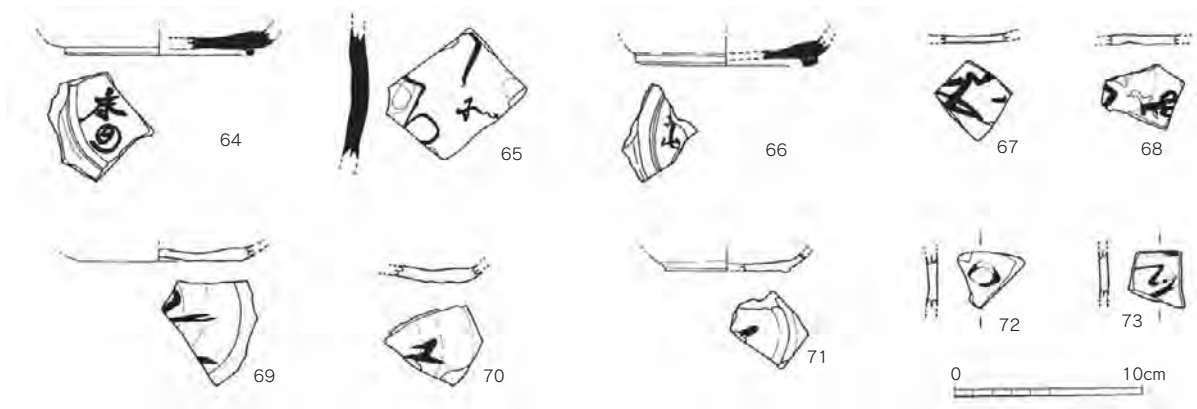
17～19は、蓋。17は、内外面に回転ナデ。18、19は、外面にヘラ切りの痕跡が残る。いずれも天井部外面の調整は回転ナデが施されており、回転ヘラケズリは認められない。19の方が、器形は扁平であり、つまみの形状も、やや扁平である。

24は、杯。25は、椀。23・24は高台がやや内側に付くが、他は平坦な底部の外周に近い位置に付いており、そのまま体部へ立ち上がる。高台の断面形は、短くやや外側に開く25を除き、逆台形に近い。23・24は底部外面に自然釉が多量に付着している。26は、体部が二重になっており、底部内面に突起状の高まりが認められる。脚部を一部、欠損している。

27・28は、杯。27は、皿状の器形になるとみられるが、体部を欠損している割合は高い。28については、体部をほとんど欠損しており、立ち上がりの角度は推定復元である。

29・30は、椀。31・32は甕である。31は、内器面に自然釉が残る。

33は、須恵器の壺形土器についていたと考えられる獣面把手である。



第69図 SD10出土遺物

土師器（第66図・第67図）

34から49は土師器である（第66図34～49）。全て、赤彩を施している。

34～36は、蓋。全て、外面は、回転ヘラケズリ後、回転ナデ。内面は、回転ナデ。

37～39は、椀。全て、外面に、回転ヘラミガキを施す。37・39については、内面にも、回転ヘラミガキを確認した。37は、器体に鉄・マンガンが付着があるためやや観察が困難であるが、全体に横方向の回転ヘラミガキ及び赤彩が認められる。39は土師器に含めているが、須恵器の可能性もあり判断がつかない。

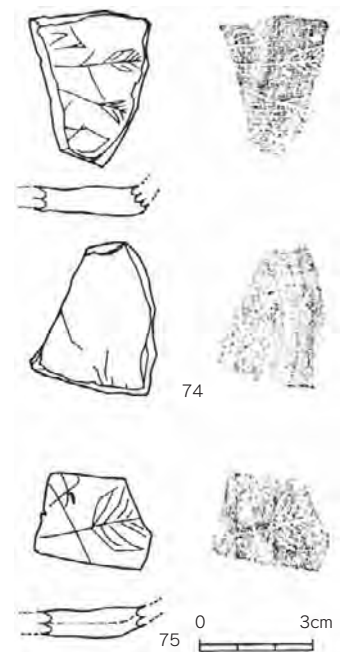
40～45は、杯。全て、底部にはヘラ切りの痕跡を認める。後に、回転ナデを施す。40・41・43は、内面に回転ヘラミガキを認める。

46～48は、高杯の脚部。外面は、回転ナデ。赤彩を施す。

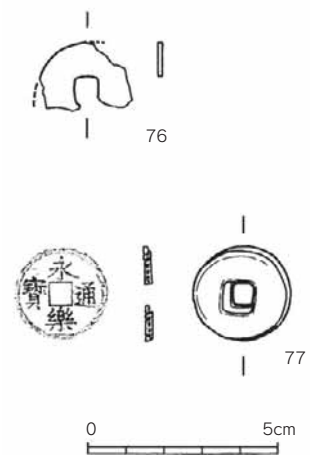
49は土師器の鉢とみられる。口縁部から体部にかけて残存しており、底部を一部、欠損している。外面には、回転ヘラケズリが認められる。丁寧なナデが施されており、全体に赤彩が施されている。胎土も精緻である。外面には炭化物の付着が認められる。

50は盤である。内外面とも回転ナデが施され、赤彩が施されている。ナデにより仕上げているが、一部にケズリが認められる。

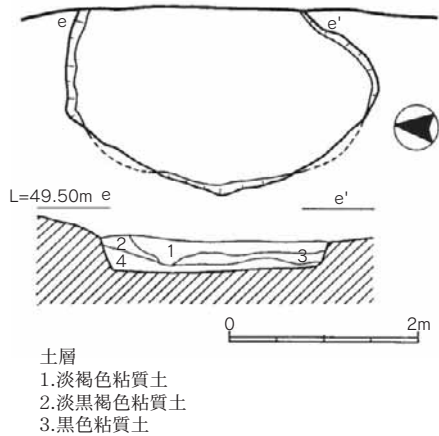
51～57は、土師器の甕である（第67図51～57）。いずれも口縁部付近から胴部までしか残存していない。甕の形態は、小型のもの（51～55）と大型のもの（56・57）の2種類に、大きく分かれる。大型のものは、つくりがやや荒く、日常生活で使用したススの痕跡も見られる。小型のものは、前述したとおり、赤彩がみられるものもあり、その大きさからも日常的な用途は考えにくい。内外面ともヨコナデを施しており、体部が残存しているものについては、外面はハケメ、内面はヘラケズリを施している。51は、外面と口縁部内面に、52は外面に赤彩が認められる。



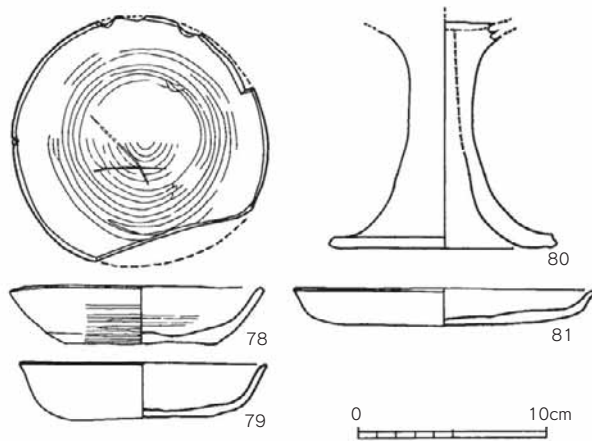
第70図 SD10出土遺物



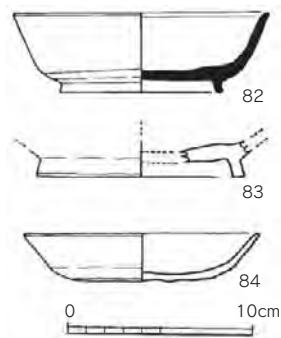
第71図 表採遺物



第72図 SX13実測図 (S=1/80)



第73図 SX13出土遺物



第74図 SD09出土遺物

58・59は、甌の把手である。

瓦 (第68図)

少数ではあるが、内面に布目圧痕を残す布目瓦片が4点、出土している。全て平瓦である。

60は、小破片のため詳細は不明であるが、整形痕をナゲ消したと考えられる痕跡が存在する。外面には縄タタキ痕が残る。63は、内面に布目圧痕を残す。外面はLR方向の縄タタキ痕が残る。

墨書土器 (第69図)

SD10からは、墨書土器が10点出土している。土師器と須恵器があるが、墨書が確認できるものについて、こちらで一括した。64・65が須恵器で、他が土師器である。

ほとんどが破片であり、文字の全体構成を確認することができていない。かろうじて文字が残っているのは64のみである。「床」と考えているが、正確には分からない。もう一文字も、省略した字体が確認できるのみで、不明である。

当遺跡で、墨書土器が出土していることは、当遺跡及び周辺の状態を類推する上で興味深い。

線刻土器 (第70図)

特殊な資料として、線刻土器がある。いずれも土師器の皿の底部と考えられる。2点とも、先のとがった棒状の工具で木の葉を描いている。製作時に刻んだものである。

表採遺物 (第71図)

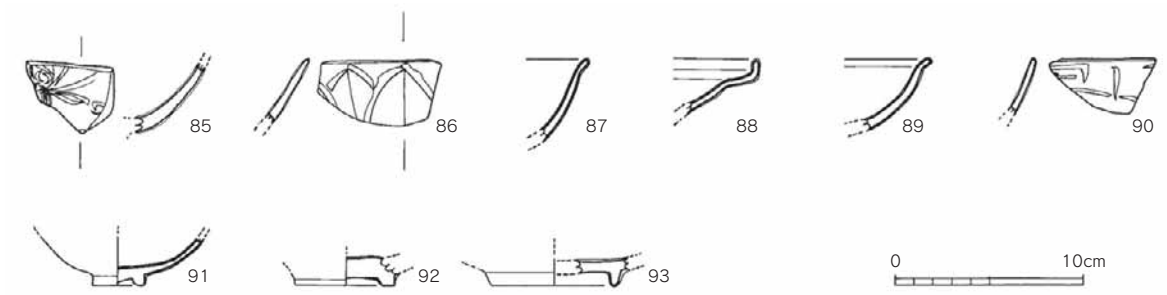
調査時に廃土場で表採した銭である。本来帰属する遺構は分からないが、SD10には関連しない。

76は、風化のため、種類や時期が分からない。77は、「永楽通宝」である。

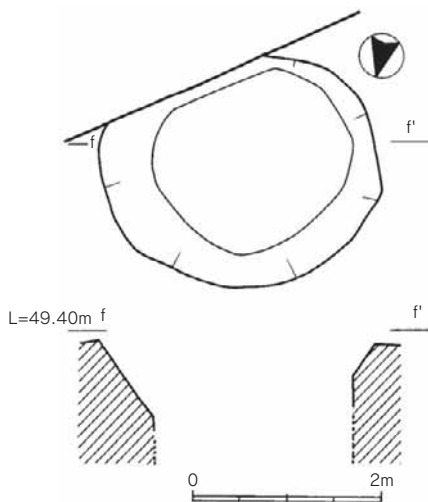
SX13出土遺物 (第73図)

土師器の杯、高杯、皿の4点がセットとして出土している。

78・79は、内外面ともに、回転ヘラミガキの痕跡を残す土師器である。78は、器面の損傷が激しい。80も、表面の損傷が激しい。表面は、ヘラミガキかと考えるが、不明瞭である。81は、底部をヘラ切りしてる皿である。



第75図 SD14出土遺物



第76図 SX15実測図 (S=1/80)

SD09出土遺物 (第74図)

SD10埋没後に、形成及び埋没した溝である。全体的に遺物の量は少ない。須恵器杯、土師器杯が出土している。

3点のみを図示した。82は、須恵器椀。調整は、外面ヘラケズリ、内面回転ナデである。83は、土師器。杯かと思われる。回転ナデを施す。84は、土師器杯。調整は、内外面ともナデ。

(2) 中世

SD14出土遺物 (第75図・第77図)

V区の東側で確認した溝である。未調査区を間に挟んでおり、明確ではないが、SD09・SD10が埋没した後に、その上部に形成された溝であると考えている。SD14のみ、埋没時期が中世であるため、その形成時期も、SD09・SD10の埋没から、ある程度の時間差があるかもしれない。

中世の土師器、陶磁器が出土している。青磁片9点を図示した(第75図)。全て龍泉窯産である。

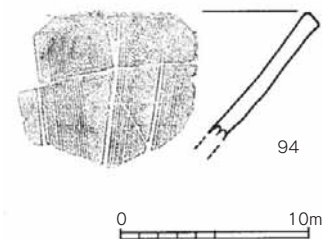
85～87は、青磁椀である。太宰府編年で、85はI-2類。86はI-5類。87はIV類。88は青磁盤でIV類である。89は、白磁椀IV-1A類。90～93は、青磁椀であり、分類すると90から93まで順に、上田C類。I類、I類、IV類となる。

SX15出土遺物 (第76図)

上層で確認した中世の井戸である。

周辺地盤が柔らかいため、途中までしか掘削できなかった。埋土中に大量の鉄滓が投げ込まれていた。井戸を封じる際の祭祀行為か、あるいは周辺地域での鍛冶作業の廃棄物を捨てたかのいずれかであろう。ただし、それらについての判断材料を見出すことはできなかった。

遺物は鉄滓の他にはほとんど無いが、瓦質の播鉢も出土している(第77図)。



第77図 SX15出土遺物

第3章 総括

第1節 調査区と周辺の遺跡

今回の調査は、道路改良事業に伴うもので、その性格上、調査区の延長が長く、西端の調査区のⅠ区から東端のⅤ区まで約800mと離れていた。

そのため、各調査区の様相は異なり、それぞれの遺跡の性格も異なるものであった。

Ⅰ区は、調査区の最も西側に位置し、菊池郡衙跡と推定される西寺遺跡の北約100mに位置する。松本雅明氏による発掘調査は、西福寺周辺に現在でも残る土塁とその周辺をトレンチ調査したものである。調査の結果、土塁に伴う溝を検出して、奈良時代の遺物が出土し、西福寺周辺からも大量の布目瓦が出土している（註1）。これらの成果を踏まえ、鶴嶋俊彦氏は、地籍図をもとに周辺の土地利用を調査され、土塁とそれに伴う溝を郡衙の外郭施設である可能性を示された（註2）。西福寺周辺が郡衙であるとすれば、その周辺には倉庫等の掘建柱建物群が存在するはずである。また、郡衙へ向かう官道や、場合によっては水運に利用した河川や溝、又は軍団に関連する遺構も検出できると考えた。なお、Ⅴ区については、古代条里制が施行されていた菊池市大淋寺地区にあたり、それとの関連性も検討課題である（註3）。

第2節 検出した遺構

Ⅰ区で検出した遺構は、掘建柱建物6棟である。これらの遺構については、残念ながら、時期を限定する根拠がない。これは、遺物包含層がほとんど削平されており、遺物が、包含層から出土していないことによる。出土した遺物は、表土に含まれるもので、古代・中世の土師器片や、近世陶磁器であった。柱穴からは遺物は全く出土しておらず、遺構の時期を特定することができない。検出した遺構そのものを検討してみると、建物群の規模や構造についても特別なものではない。また、その方向については、大まかな東西方向を示すものの土塁跡の方向とは厳密には一致しない。掘建柱建物も、主軸方向を異にするものが混在している。これらが、郡衙に関連する施設であるとも考えることも可能ではあるが、今回、検出した掘建柱建物群については、①時期的に新しくなる可能性があること、②郡衙推定地の土塁等と方向が一致すると言えないこと、③建物の構造から、郡衙に関連するような特別な構造であるとは判断できないこと、等から、郡衙関連の施設であると結論づけることはできない。ただし、今回、検出した遺構の位置付けについて、判断する情報は少なく、時期決定の根拠は弱いものである。遺跡の周辺環境から検討すべき課題も多かったが、そこまで踏み込むことができなかった。西寺の土塁と溝についても、遺構全体の測量はなされておらず、検討材料としては乏しいものである。今後、文献や地籍調査の他にも、詳細な発掘調査や測量調査が行われ、当地の遺跡としての意義付けが明確にされることを望みたい。

Ⅲ区では2軒のみではあるが、奈良時代の住居跡を検出した。いずれもカマド付きの住居であり、生活用具である甕も同時に確認された。当地での概期におけるごく一般的な生活址が確認されたことになる。従来、散布している遺物は採集されていたが、生活址を確認できたことは意義があったと考える。また、先にⅠ区の項で述べたとおり、周辺に同じ時期の官的な施設が存在していたとすれば、その近くで検出された住居址群との地区の住み分け等についても、今後、検討する必要がある。なお、Ⅲ区の包含層からは、縄文時代、弥生時代の遺物も、若干、みられた。遺構は確認できなかったものの、当該地における該期の遺構の存在を示唆するものである。また、Ⅴ区でも出土したが、土錘の出土も興味深い。

V区では、古代の大溝を検出した。I区と同様、遺物包含層の残りはあまり良いものではなかったが、この溝から、大量の遺物が出土した。溝は、埋没する度に、掘り返されており、大きく3時期に分かれる。まず、SD10とSD09については、古代の遺物が溝内の下層から上層にかけて出土しており、開削時期から埋没時期までをほぼ限定することができる。遺物を検討した結果、ほぼ8世紀後半から9世紀前半におさまるものと判断している。次に、SD09が埋没した後に掘削されたと考えられるSD14については、未調査区を挟んださらに東側の調査区で検出したため、SD09・SD10との切合関係を確認することはできなかった。溝の方向については、西側のSD09・SD10と類似しているため、同じ溝である可能性を考えたが、SD14からは、青磁や白磁等をはじめとする中世の遺物が出土していたため、SD09・SD10の埋没後に開削したものと判断した。これらの溝は、SD09の開削後、わずかに位置を変えながら、当地で、長期間、継続して利用されていたと考えている。

溝の大きさについては、幅8m以上とかなり大きい。ただし、掘り形については、非常に粗く、溝の底部もいびつであり、道として整備されたものであるとは考えられない。また、同じ理由から、官道や郡衙に関連する遺構であるとも考えにくい。このV区については、古代条里制がしかれていたとされる菊池市大淋寺地区にあたる(註4)。調査区は、条里地割のすぐ外側であったと考えられる。条里もしくはそれらに関連する遺構であるという可能性を考えているが、その点について、積極的に評価する材料を見出すことはできなかった。

溝から出土した出土遺物は、質、量的に良好なものであった。出土遺物には、赤彩された土師器が多い。また、故意に叩き割ったとも考えられる高杯もみられた。なお、土師器杯のうち、回転ヘラミガキを施しているものも多くみられる。さらに、少量ながら、線刻土器や墨書土器、あるいは布目瓦等も出土しており、日常生活からはなれた要素も見受けられる。これらの遺物の出土が、即、官的な遺構の存在を示すとは言えないが、少なくとも、調査区周辺において、その様な性格の遺構が存在する可能性を示していると言えよう。

註

註1 松本雅明 1964 「菊池市西寺の土壁—菊池郡家参考地」『熊本県文化財調査報告 第5集(菊池地方)』熊本県教育委員会

註2 鶴嶋俊彦1979「古代肥後国の交通路についての考察」『駒沢大学大学院地理学研究』9

註3 島津義昭1977『熊本県の条里』熊本県文化財調査報告第25集

註4 註3に同じ

引用・参考文献

網田龍生1994「奈良時代 肥後の土器」『先史学・考古学論究』龍田考古会

網田龍生1994「回転台土師器の成立と展開」『中近世土器の基礎研究 X』日本中世土器研究会

菊池市史編さん委員会1982『菊池市史 上巻』菊池市

木下 良1975「肥後国府の変遷について」『古代文化』9 古代学協会

美濃口雅郎1994「熊本県における中世前期の土師器について」『中近世土器の基礎研究 X』日本中世土器研究会

西住欣一郎1992『うてな遺跡』熊本県文化財調査報告第121集 熊本県教育委員会

松本健郎・西住欣一郎1989『北上原古墳・瀬戸口横穴墓群』熊本県文化財調査報告第104集

第12表 遺物観察表

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 遺構 | 種別 | 器種 | 法 量 | | | | ※単位=cm | 色調 (上) 外面・凸面 (下) 内面・凹面 | | 調整・文様 (上) 外面・凸面 (下) 内面・凹面 | 胎土混入物 | 焼成 | 備 考 |
|----------|----------|-------|-------------|-----|--------|--------|-------------|---------|--------|-------------------------------|---|---------------------------------|-------|--------------------------|-----|
| | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 長さ | | 厚さ | 幅・径 | | | | |
| 51 | 1 | 包含層 | 陶器 | 皿 | (11.7) | 4.9 | 4.0 | | | (外) 灰白色 (内) 明赤褐色 | ロクロナデ、ヘラケズリ、回転ナデ ケズリ | 砂粒 | 良 | 施釉、高台部は無釉 | |
| 54 | 2 | SH-01 | 土師器 | 甕 | (23.0) | | (10.4) | | | (外) 橙色 (内) にぶい橙色 | ヨコナデ、ナデ ヨコナデ、ナデ | 雲母・長石 赤茶色の小石 雲母 | 良 | | |
| 58 | 3 | SK-01 | 土師器 | 碗 | (14.8) | | (5.7) | | | (外) 浅黄色 (内) にぶい黄褐色 | 回転ナデ、ナデ 回転ナデ | | 普通 | | |
| 58 | 4 | SK-01 | 土師器 | 碗 | | 7.8 | (3.7) | | | (外) にぶい黄褐色 (内) 黒色 | 回転ナデ ヘラミガキ、回転ナデ | 砂粒・角閃石 | 良 | 黒色土器A類 | |
| 60 | 5 | SD-01 | 瓦質土器 | すり鉢 | (14.2) | (3.6) | | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | ナデ、指頭圧痕 | 長石 | 良 | | |
| 60 | 6 | SD-01 | 瓦質土器 | 火鉢 | | (8.4) | | | | (外) 灰褐色 (内) 灰黄褐色 | 渦巻スタンプ文 | 長石 | 良 | | |
| 60 | 7 | SD-01 | | 土鍾 | | | 4.2 | 1.2×1.3 | | (外) 橙色 (内) 浅黄褐色 | | 角閃石 石英・微砂粒 | 良 | 孔径0.4cm | |
| 61 | 8 | 包含層 | 石器 (黒曜石) | 石鏃 | | | (2.8) | 0.5 | (1.5) | | | | | 重さ0.90g 先端部及び 片脚末端部欠失 | |
| 61 | 9 | 包含層 | 弥生土器 | 壺 | 22.6 | | (13.4) | | | (外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色 | タタキ、ナデ、刻目突帯 | 角閃石 石英・砂粒 微砂粒 | 良 | | |
| 61 | 10 | 包含層 | 土師器 | 碗 | 15.8 | 8.4 | 5.5 | | | (外) にぶい黄褐色 (内) 浅黄褐色 | 回転ヘラケズリ後回転ナデ ナデ | | 良 | | |
| 61 | 11 | 包含層 | 土師器 | 碗 | 15.1 | (7.4) | (4.8) | | | (外) 浅黄褐色 (内) にぶい黄褐色 | 回転ナデ、回転ヘラケズリ後ナデ ナデ | 微砂粒 | 良 | | |
| 61 | 12 | 包含層 | 土師器 | 碗 | | 8.2 | (3.1) | | | (外) にぶい黄褐色 (内) 黒色 | 回転ヘラケズリ後ナデ | 砂粒・角閃石 | 良 | 黒色土器 | |
| 61 | 13 | 包含層 | 土師器 | 碗 | (16.2) | (7.8) | 5.6 | | | (外) 黒色・明褐色 (内) 黒褐色 | ヘラミガキ、回転ナデ ヘラミガキ、回転ナデ | 砂粒 | 良 | 黒色土器B類 | |
| 61 | 14 | 包含層 | | 土鍾 | | | 4.1 | 1.0×1.1 | | | | | 良 | 孔径0.4cm | |
| 61 | 15 | 包含層 | | 土鍾 | | | (3.0) | 1.0 | | | | | 良 | 孔径0.4cm | |
| 61 | 16 | 包含層 | | 銭 | | | 0.1~ 0.2 | 2.5 | | | | | | 時代不明 孔径0.7cm | |
| 64 | 17 | SD-10 | 須恵器 | 蓋 | (13.6) | | 1.7 | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | 回転ナデ、ナデ 回転ナデ | 砂粒 | 良 | | |
| 64 | 18 | SD-10 | 須恵器 | 蓋 | (15.4) | | 3.1 | | | (外) にぶい黄褐色 (内) 黄灰色 | ヘラキリ後ナデ、回転ナデ、つまみ貼付け後ナデ 回転ナデ後ナデ | 砂粒 | 良 | | |
| 64 | 19 | SD-10 | 須恵器 | 蓋 | 18.1 | | 2.1 | | | (外) 白色 (内) 灰黄色 | ヘラキリ後ナデ、回転ナデ、つまみ貼付け後ナデ 回転ナデ、ナデ | 微砂粒 | 不良 | | |
| 64 | 20 | SD-10 | 須恵器 | | (8.7) | (3.1) | | | | (外) 灰黄色 (内) 褐灰色 | 高台貼付け後ナデ、回転ナデ、ナデ 回転ナデ | 砂粒 | 良 | 底部に押圧痕有り 調整粗雑 | |
| 64 | 21 | SD-10 | 須恵器 | | (11.9) | (2.0) | | | | (外) 灰白色 (内) 灰白色 | ヘラケズリ後ナデ、底部高台貼付け後ナデ 回転ナデ、不定方向のナデ | 砂粒 金雲母・石英 微砂粒 | 良 | 底部に押圧痕有り | |
| 64 | 22 | SD-10 | 須恵器 | | (7.6) | (1.5) | | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | 高台貼付け後ナデ、回転ナデ 回転ナデ | 砂粒 | 不良 | 底部に押圧痕有り | |
| 64 | 23 | SD-10 | 須恵器 | | (9.2) | (3.0) | | | | (外) 淡黄色 (内) 灰黄色 | 高台貼付け後ナデ、回転ナデ 回転ナデ | 砂粒 | 良 | 底部に押圧痕有り | |
| 64 | 24 | SD-10 | 須恵器 | 杯 | (12.4) | (7.8) | 4.5 | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | 高台貼付け後ナデ、回転ナデ、ナデ 回転ナデ | 砂粒・長石 | 良 | 底部に押圧痕有り | |
| 64 | 25 | SD-10 | 須恵器 | 碗 | (13.4) | (8.0) | 4.3 | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | 底部高台貼付け後ナデ、回転ナデ 回転ナデ、ナデ | 長石 | 良 | | |
| 64 | 26 | SD-10 | 須恵器 | 碗 | (8.4) | (3.3) | | | | (外) 灰白色 (内) 褐灰色 | 高台貼付け後ナデ、回転ナデ 回転ナデ | 砂粒 | 不良 | | |
| 64 | 27 | SD-10 | 須恵器 | 杯 | (14.0) | (8.6) | 3.5 | | | (外) オリーブ褐色・灰白色 (内) 灰黄色・褐灰色 | 回転ナデ 回転ナデ | 砂粒・石英 | 良 | 底部に押圧痕有り | |
| 64 | 28 | SD-10 | 須恵器 | 杯 | (8.1) | (2.9) | | | | (外) 黄灰色 (内) 灰白色 | 回転ナデ 回転ナデ後、底部多方向のナデ | 長石 | 不良 | | |
| 64 | 29 | SD-10 | 須恵器 | 碗 | (14.6) | (5.1) | | | | (外) 暗褐色 (内) にぶい黄色 | ヘラケズリ後回転ナデ ヘラケズリ、ナデ | 砂粒・角閃石 | 良 | 外器面に自然釉 | |
| 64 | 30 | SD-10 | 須恵器 | 碗 | 15.3 | 8.9 | 6.0 | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | 回転ナデ 回転ナデ | 微砂粒 | 良 | | |
| 64 | 31 | SD-10 | 須恵器 | 甕 | (46.0) | (10.5) | | | | (外) 黄灰色～黒褐色 (内) 黄灰色 | ヘラ描波状文、回転ナデ、ヨコ方向のナデ 回転ナデ、ヘラケズリ | 長石 | 良 | 内器面に自然釉 | |
| 64 | 32 | SD-10 | 須恵器 | 甕 | (22.0) | (6.4) | | | | (外) 褐灰色 (内) 灰褐色 | タタキ、ヨコナデ ヨコナデ | 砂粒 | 良 | 灰かぶり 内器面に当て具痕あり | |
| 65 | 33 | SD-10 | 須恵器 | | (3.4) | (2.4) | (4.7) | | | (外) 灰白・灰 (内) 灰白・灰 | | 細砂粒 | 良 | 獸面把手 | |
| 66 | 34 | SD-10 | 土師器 | 杯蓋 | (18.4) | | (2.3) | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、ナデ | 砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 35 | SD-10 | 土師器 | 蓋 | (17.0) | | (1.9) | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ | | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 36 | SD-10 | 土師器 | 蓋 | 15.9 | | (1.9) | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ | 赤茶色の砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 37 | SD-10 | 土師器 | 碗 | (11.6) | (6.1) | | | | (外) 明赤褐色 (内) 橙色 | 回転ヘラミガキ、回転ナデ 回転ヘラミガキ、回転ナデ | 微細な雲母 微砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 38 | SD-10 | 土師器 | 碗 | | 10.5 | (3.2) | | | (外) 橙色 (内) にぶい橙色 | 回転ヘラミガキ、回転ナデ 回転ヘラミガキ、回転ナデ | 角閃石・石英 雲母・砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 39 | SD-10 | 土師器 | 碗 | | 8.2 | (3.0) | | | (外) 明赤褐色 (内) 橙色 | 回転ヘラミガキ、回転ナデ 回転ヘラミガキ、回転ナデ | 石英・雲母 微砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 40 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (14.0) | (5.2) | 2.7 | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 底部ヘラ切り離し、底部付近回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ヘラミガキ、ヨコナデ | 角閃石・石英 長石・砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 41 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (6.6) | 8.0 | 3.0 | | | (外) にぶい橙色 (内) 橙色 | 底部ヘラ切り離し、底部付近回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ヘラミガキ、回転ナデ | 細砂粒 | 良 | 赤彩 側面はヘラミガキか？ | |
| 66 | 42 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (13.8) | (8.0) | 2.8 | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 底部ヘラ切り離し、底部付近回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ | 微砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 43 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (14.2) | (9.0) | 3.0 | | | (外) にぶい赤褐色 (内) にぶい橙色 | 底部ヘラ切り離し、底部付近回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ヘラミガキ、回転ナデ | 微砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 44 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (13.2) | (7.0) | 3.1 | | | (外) にぶい橙色 (内) にぶい橙色 | 底部ヘラ切り離し、回転ナデ 回転ナデ | 雲母・石英 角閃石・砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 45 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (13.5) | (7.2) | 3.2 | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 底部回転ヘラ切り、回転ナデ、底部付近回転ヘラケズリ？ 回転ナデ | 小石 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 46 | SD-10 | 土師器 | 高杯 | (11.2) | (14.7) | | | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 回転ナデ ナデ | 雲母・石英 砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 47 | SD-10 | 土師器 | 高杯 | | (12.4) | | | | (外) 橙色 (内) にぶい橙色 | 回転ナデ、ヨコナデ ナデ | 雲母・石英 砂粒 | 良 | 赤彩 | |

※口径・底径の（ ）内の数値は復元値

| 図版 番号 | 遺物 番号 | 遺構 | 種別 | 器種 | 法 量 | | | | ※単位=cm | 色調 (上) 外面・凸面 (下) 内面・凹面 | 調整・文様 (上) 外面・凸面 (下) 内面・凹面 | 胎土混入物 | 焼成 | 備 考 |
|----------|----------|-------------|-------------|-----------|--------|--------|--------|-----|-----------------------------|---------------------------------|---------------------------------|------------------|------------------------|-----------------|
| | | | | | 口径 | 底径 | 器高 | 長さ | | | | | | |
| 66 | 48 | SD-10 | 土師器 | 高杯 | | | (11.1) | | (外) 橙色 (内) にぶい橙色 | 回転ナデ、ヨコナデ ナデ | 雲母・石英 角閃石 砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 49 | SD-14 | 土師器 | 鉢 | (24.6) | (11.8) | 10.7 | | (外) 橙色 (内) 橙色 | 回転ヘラケズリ、回転ナデ、底部回転ヘラ切り 回転ナデ | | 良 | 赤彩 | |
| 66 | 50 | SD-10 | 土師器 | 盤 | (18.0) | (4.7) | | | (外) 明赤褐色 (内) 橙色 | 回転ナデ、ヨコナデ ヨコナデ、ナデ | 角閃石・雲母 石英・長石・砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 67 | 51 | SD-10 | 土師器 | 鉢 | (14.0) | (3.4) | | | (外) 明赤褐色 (内) 明赤褐色・にぶい黄橙色 | ヨコナデ 口唇部ヨコナデ、ヘラケズリ | 石英・長石 石英・長石 | 良 | 外面及び口唇部赤彩 | |
| 67 | 52 | SD-10 | 土師器 | 鉢 | (13.4) | (6.8) | | | (外) 橙色 (内) にぶい黄橙色 | ヨコ方向のナデ、タテ方向のハケメ、ナデ ヨコナデ、ケズリ | 石英・長石 赤茶色の砂粒 | 良 | 外面赤彩 | |
| 67 | 53 | SD-10 | 土師器 | 甕 | (18.8) | (5.3) | | | (外) 橙色～にぶい橙色 (内) にぶい黄橙色 | ヨコナデ、タテ方向のハケメ ヨコ方向のナデ、ケズリ | 雲母・長石 | 良 | | |
| 67 | 54 | SD-10 | 土師器 | 甕 | (18.4) | (6.4) | | | (外) にぶい橙色 (内) にぶい褐色 | ヨコナデ、ナデ ヨコ方向のナデ、ケズリ | 石英・雲母 長石 | 良 | 口唇部にスス付着 | |
| 67 | 55 | SD-10 | 土師器 | 甕 | (16.9) | (8.5) | | | (外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色 | ヨコナデ、ナデ ヨコ方向のナデ、ケズリ | 石英・長石 | 良 | | |
| 67 | 56 | SD-10 | 土師器 | 甕 | (27.2) | (23.5) | | | (外) 橙色 (内) にぶい褐色 | ヨコ方向のナデ、ケズリ ヨコ方向のナデ、タテ方向のハケメ | 長石・石英 茶色の小石 | 良 | 外器面にスス付着 | |
| 67 | 57 | SD-10 | 土師器 | 甕 | (31.0) | (8.2) | | | (外) にぶい黄褐色 (内) にぶい黄褐色 | ヨコ方向のナデ、ケズリ ヨコ方向のナデ、タテ方向のハケメ | 石英・雲母 長石 | 良 | | |
| 67 | 58 | SD-10 | 土師器 | 甕 (把手) | | | | | (外) 明赤褐色 (内) 褐色 | ヨコ方向のナデ、ケズリ | 長石・雲母 茶色い石 | 良 | 赤彩 | |
| 67 | 59 | SD-10 | 土師器 | 甕 (把手) | | | | | (外) にぶい褐色 (内) にぶい褐色 | ヨコ方向のナデ、ケズリ | 石英・長石 雲母 | 良 | | |
| 68 | 60 | SD-10 | | 平瓦 | | | (8.1) | 2.1 | (8.6) | (凸) にぶい黄色 (凹) 褐色 | 縄目圧痕 布目圧痕 | 砂粒・石英 角閃石 | 良 | 側面一切断面 側面にヘラ |
| 68 | 61 | SD-10 | | 平瓦 | | | (9.8) | 1.8 | (8.2) | (凸) 明黄褐色 (凹) 明黄褐色 | ナデ 布目圧痕 | 砂粒・石英 | 良 | |
| 68 | 62 | SD-9 ・10 | | 平瓦 | | | (11.4) | 2.2 | (8.3) | (凸) 明黄褐色 (凹) にぶい黄褐色 | ナデ 布目圧痕 | 砂粒・角閃石 石英・金雲母 | 良 | |
| 68 | 63 | SD-10 | | 平瓦 | | | (7.9) | 3.1 | (8.8) | (凸) にぶい黄褐色 (凹) にぶい黄褐色 | 縄目圧痕 布目圧痕 | 砂粒・石英 角閃石 | 良 | 側面一切断面 |
| 69 | 64 | SD-10 | 須恵器 | 杯 | (9.8) | (1.4) | | | (外) 灰白色 (内) 灰白色 | ナデ ナデ | 石英・砂粒 角閃石 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 65 | SD-10 | 須恵器 | 壺? | | | | | (外) 灰黄褐色 (内) 灰黄褐色 | ナデ ナデ | 長石・角閃石 石英・砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 66 | SD-10 | 須恵器 | 杯 | (9.6) | (1.6) | | | (外) 灰白色 (内) にぶい黄褐色 | ヘラケズリ、ナデ ナデ | 石英・長石 砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 67 | SD-10 | 土師器 | 杯 | | | | | (外) 浅黄褐色 (内) にぶい褐色 | ナデ ナデ | 雲母・微砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 68 | SD-10 | 土師器 | 杯? | | | | | (外) 褐色 (内) 褐色 | ナデ ナデ | 長石・石英 雲母・砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 69 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (8.0) | | | | (外) 褐色 (内) 褐色 | ナデ ナデ | 長石・石英・砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 70 | SD-10 | 土師器 | 杯 | | | | | (外) にぶい褐色 (内) 褐色 | ナデ ナデ | 角閃石・石英 雲母・砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 71 | SD-10 | 土師器 | 杯 | (6.6) | (1.1) | | | (外) にぶい褐色 (内) 褐色 | ナデ ナデ | 雲母・角閃石 長石・微砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 72 | SD-10 | 土師器 | 杯? | | | | | (外) にぶい褐色 (内) 明赤褐色 | ナデ ナデ | 雲母・角閃石 石英・砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 69 | 73 | SD-10 | 土師器 | 杯? | | | | | (外) 褐色 (内) 褐色 | ナデ ナデ | 角閃石・長石 雲母・砂粒 | 良 | 墨書土器 | |
| 70 | 74 | SD-10 | 土師器 | | | | | | (外) 褐色 (内) 褐色 | ナデ ヨコナデ、線刻 | 石英・角閃石 雲母・砂粒 | 良 | 木の葉模様の線刻あり | |
| 70 | 75 | SD-10 | 土師器 | | | | | | (外) 褐色 (内) 褐色 | ナデ ヨコナデ、線刻 | 雲母・角閃石 石英・砂粒 | 良 | 木の葉模様の線刻あり | |
| 71 | 76 | SD-10 | | 銭 | | | | 0.1 | (2.4) | | | | | 孔径0.6cm |
| 71 | 77 | SD-10 | | 銭 | | | | 0.2 | 2.5 | | | | | 孔径0.55cm |
| 73 | 78 | SX-13 | 土師器 | 杯 | 13.4 | 8.0 | 3.1 | | (外) 赤褐色 (内) 赤褐色 | 回転ヘラミガキ、横ナデ 回転ヘラミガキ、回転ナデ | 砂粒 | 良 | 底部内面にヘラ記号あり 赤彩? | |
| 73 | 79 | SX-13 | 土師器 | 杯 | 13.1 | 4.3 | 3.1 | | (外) 明赤褐色 (内) 明赤褐色 | 回転ナデ、回転ヘラミガキ 回転ナデ、回転ヘラミガキ | 角閃石 雲母・砂粒 | 良 | 赤彩 摩滅が激しい為 磨き不鮮明 | |
| 73 | 80 | SX-13 | 土師器 | 高杯 | | 12.0 | (12.0) | | (外) 明赤褐色 (内) 明赤褐色 | 回転ナデ、ヘラミガキ? ナデ | 砂粒・雲母 | 良 | 内側にしぼり痕あり | |
| 73 | 81 | SX-13 | 土師器 | 皿 | 16.0 | 10.0 | 2.4 | | (外) 明赤褐色 (内) 赤褐色 | 底部ヘラキリ、回転ナデ 回転ナデ | 砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 74 | 82 | SD-09 | 須恵器 | 碗 | (13.8) | 8.8 | 4.3 | | (外) 灰色 (内) 灰白色 | ヘラケズリ 回転ナデ、ナデ | 微砂粒 | 良 | | |
| 74 | 83 | SD-09 | 土師器 | 杯? | (11.2) | (2.0) | | | (外) 褐色 (内) 褐色 | 回転ナデ ナデ | 雲母・石英 微砂粒 | 良 | 赤彩 | |
| 74 | 84 | SD-09 | 土師器 | 杯 | (12.6) | (7.4) | 2.6 | | (外) 褐色 (内) 褐色 | ナデ ナデ | 砂粒 | 良 | 器面の摩耗が著しい | |
| 75 | 85 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 碗 | | | | | (外) 灰オリーブ (内) 灰オリーブ | ヘラケズリ、施釉 施釉 | | 良 | 文様ヘラとハケで 描いたものと思われる | |
| 75 | 86 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 碗 | | | | | (外) 緑灰 (内) 明緑灰 | 施釉、連弁文 施釉、連弁文 | | 良 | 胎土色調灰白色 | |
| 75 | 87 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 碗 | | | | | (外) オリーブ灰 (内) オリーブ灰 | 施釉 施釉 | | 良 | 胎土色調灰白色 | |
| 75 | 88 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 折縁皿 | | | | | (外) オリーブ黄 (内) オリーブ灰 | 施釉 施釉 | | 良 | 胎土色調灰白色 | |
| 75 | 89 | SD-14 | 白磁 | 碗 | | | | | (外) 灰オリーブ (内) 灰オリーブ | 施釉 施釉 | | 良 | 胎土色調灰白色 | |
| 75 | 90 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 碗 | | | | | (外) 灰オリーブ (内) 灰オリーブ | 施釉、雷文 施釉、雷文 | | 良 | 胎土色調灰白色 | |
| 75 | 91 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 小碗 | 3.0 | (2.6) | | | (外) 灰オリーブ (内) 灰オリーブ | ヘラケズリ、施釉 施釉 | | 良 | 胎土色調灰白色 | |
| 75 | 92 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 碗 | 5.3 | (1.6) | | | (外) 緑灰 (内) オリーブ | 施釉 施釉 | | 良 | | |
| 75 | 93 | SD-14 | 青磁 (龍泉窯) | 碗 | (6.6) | (1.5) | | | (外) 暗オリーブ (内) 暗オリーブ | 施釉、回転ナデ(無軸部分) 施釉 | | 良 | | |
| 77 | 94 | SX-15 | 瓦質土器 | すり鉢 | | (6.8) | | | (外) 灰色 (内) 灰色 | ヨコナデ | 微砂粒 | 良 | | |

※口径・底径の()内の数値は復元値

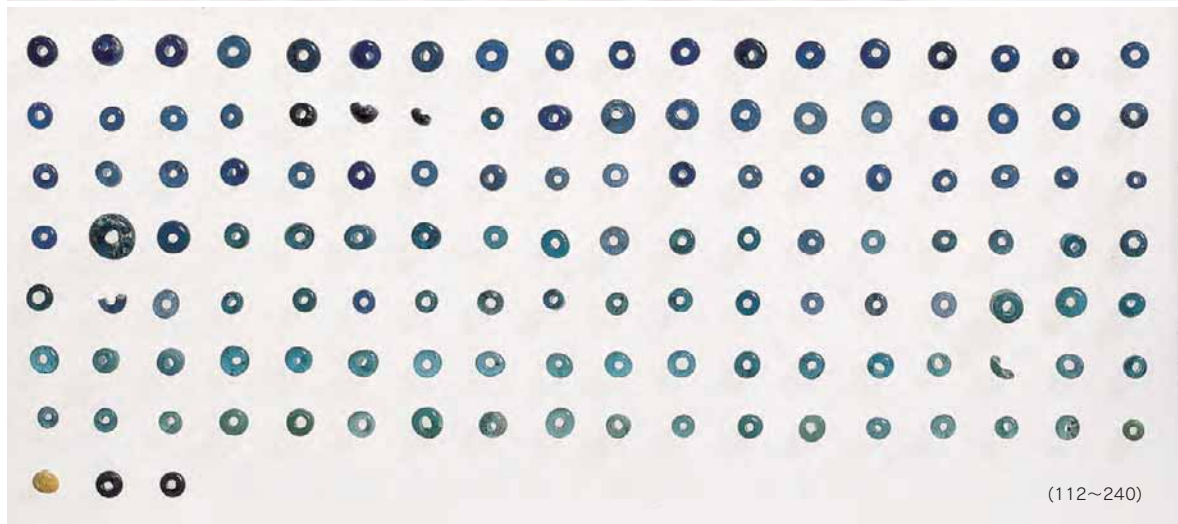
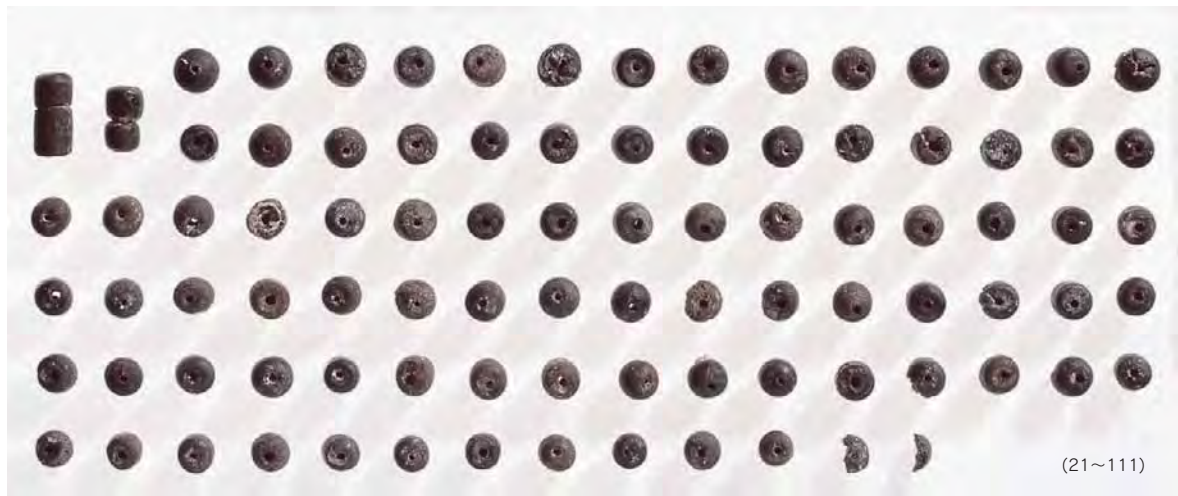
圖 版



1. 調査区 近景（北側）



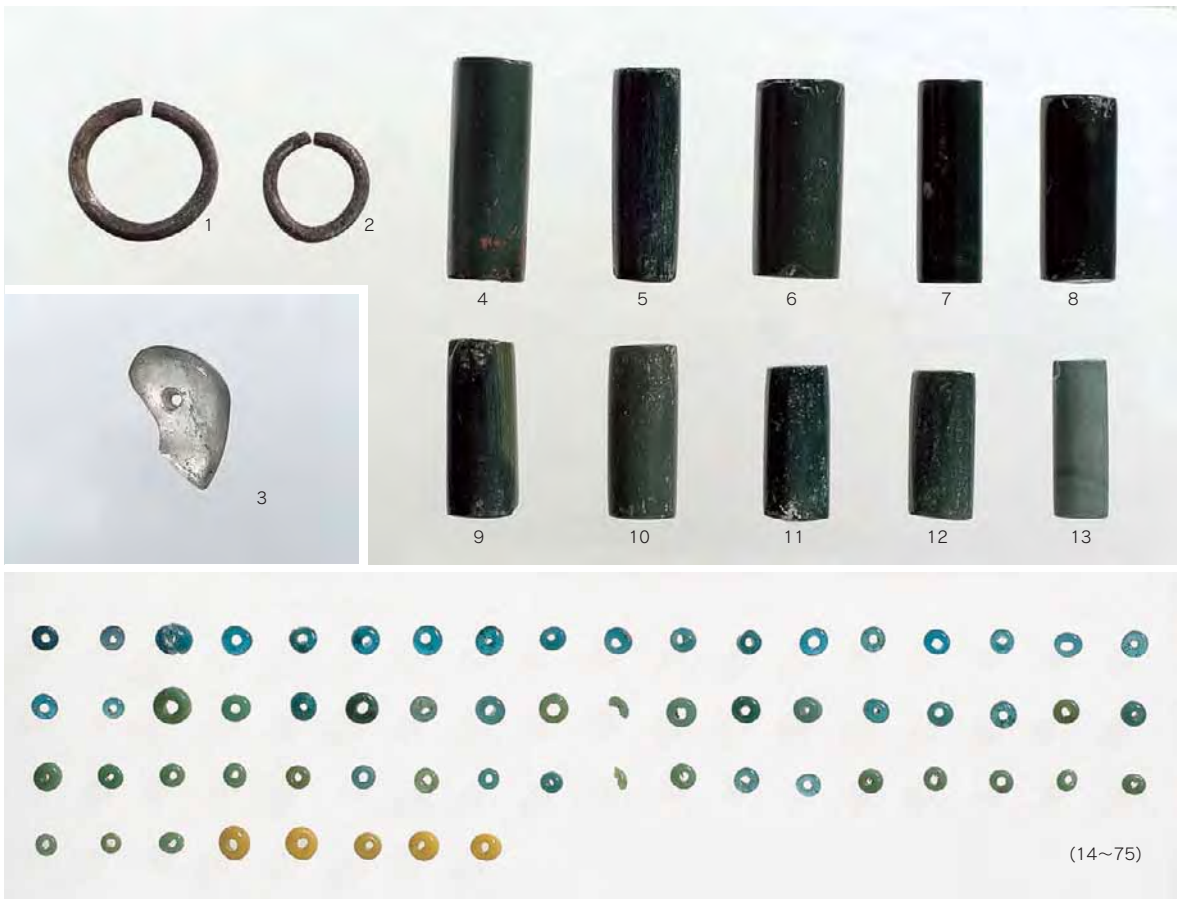
2. 調査区 近景（南側）



1号墓出土遺物（装身具）



1. 1号墓出土遺物（鉄器）



2. 8号墓出土遺物（装身具）

図版4 瀬戸口横穴墓群 出土遺物



1. 8号墓出土遺物（鉄器）

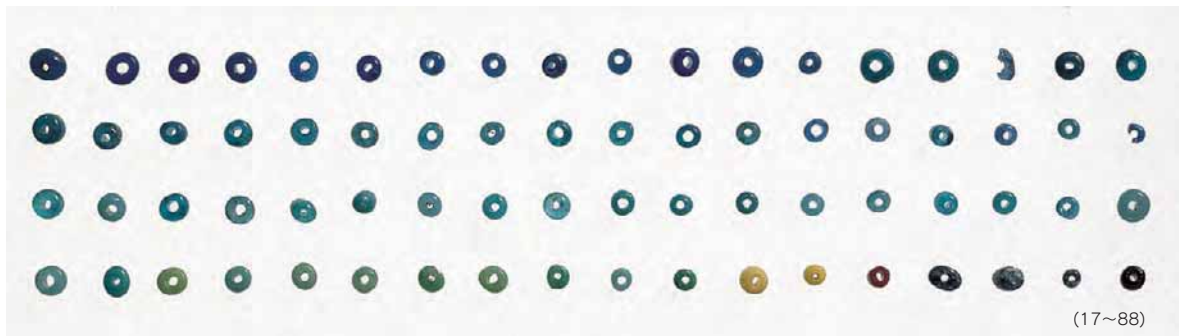


2. 8号墓出土遺物（馬具）



1. 10号墓出土遺物 (鉄器)

(装身具)



2. 11号墓出土遺物 (装身具)



1. 11号墓出土遺物（鉄器）



2. 4号墓出土遺物



3. 7号墓出土遺物



4. 2号墓出土遺物



5. 6号墓出土遺物



6. 表採遺物（耳環）



7. 9号墓出土遺物



8. 12号墓出土遺物



1.調査区近景（北側）



2.調査区近景（南側）



1. 調査区全景



2. 1号墓



3. 1号墓遺物出土状況



1. 1号墓右屍床



2. 2号墓



3. 3A号墓



1. 3A号墓玄室



2. 3B号墓



3. 4号墓



1. 5号墓



2. 5号墓玄室



3. 6号墓



1. 7号墓



2. 8号墓



3. 8号墓女室



1. 8号墓遺物出土状況



2. 9号墓



3. 10号墓



1. 10号墓玄室



2. 11号墓



3. 12号墓



1. 遺跡周辺



2. 調査区



1. V 区



2. I 区



1. SB01~SB06 (東から)



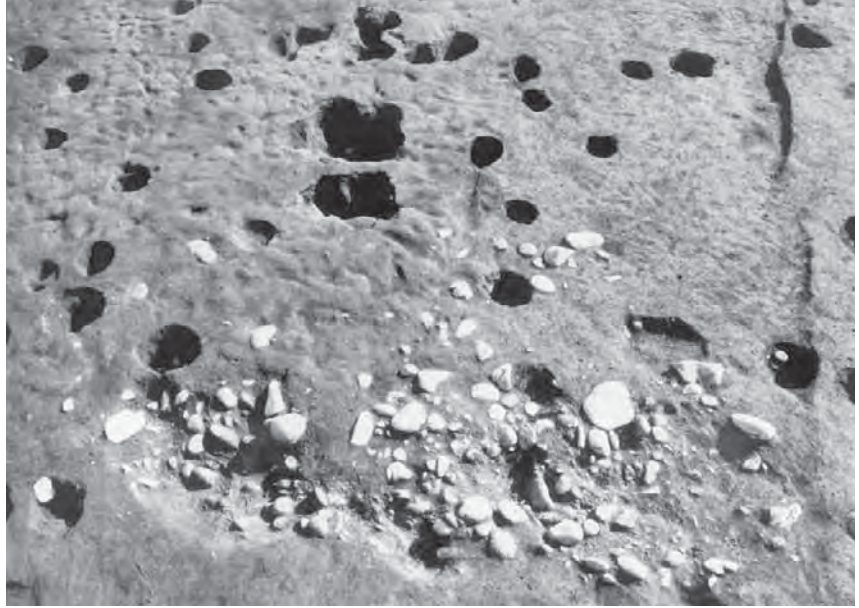
2. SB01~SB06 (北から)



3. SD01 断面 (南から)

図版
18
深川遺跡





1. SH02 (南から)



2. III区遠景 (東から)





1. SD10完掘状況（東から）



2. SD10土層断面（西から）



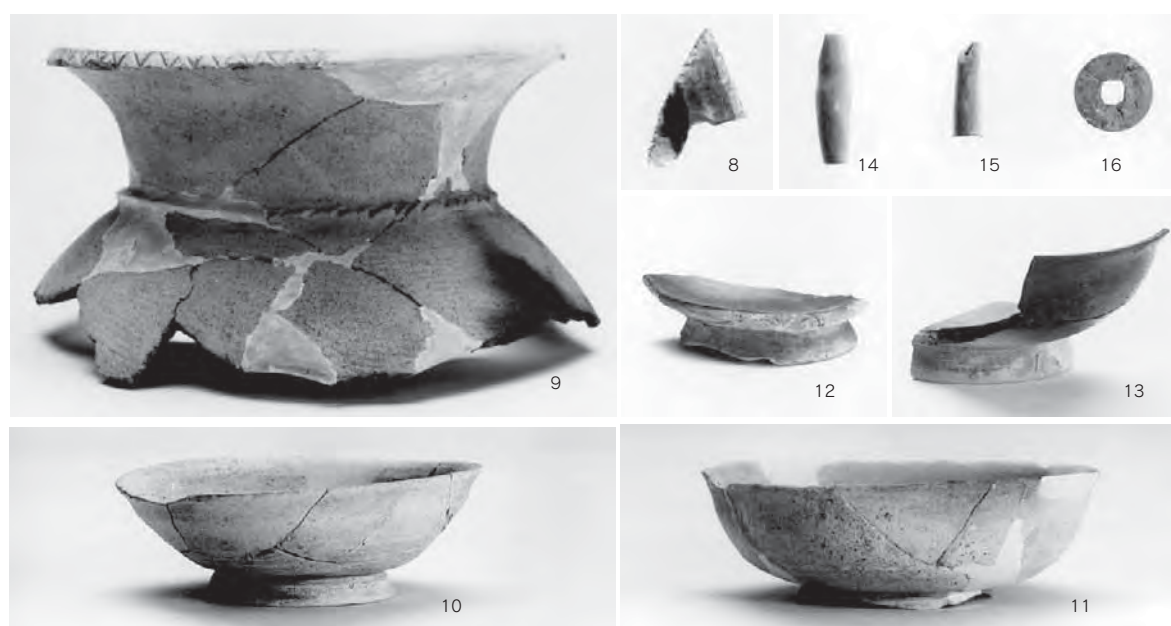
3. SD10遺物出土状況



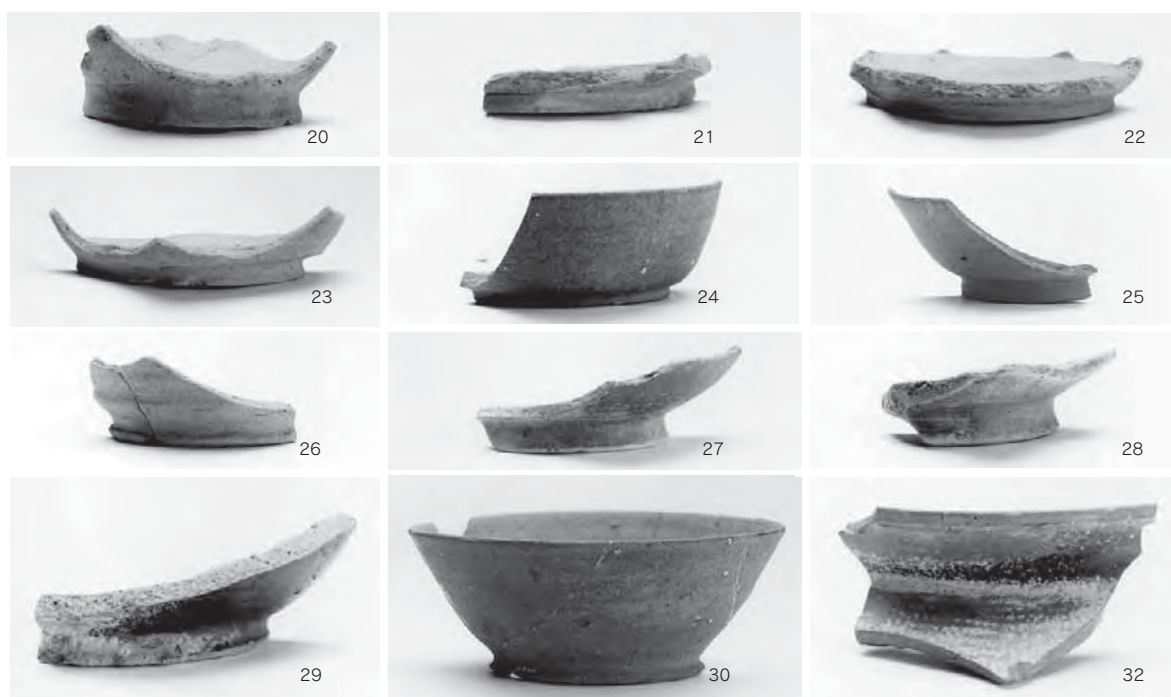
1. 包含層出土遺物

2. SK01出土遺物

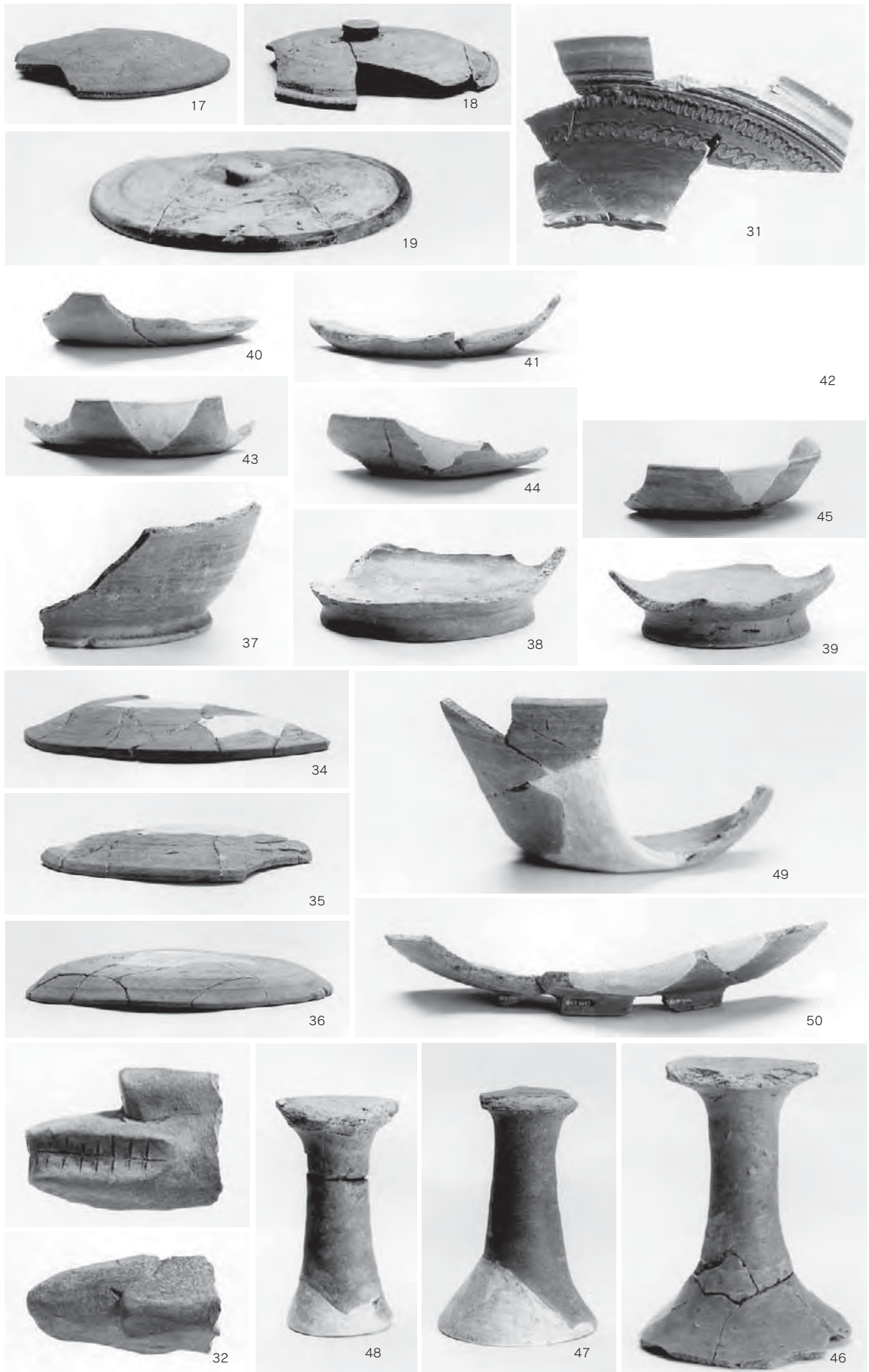
3. SD01出土遺物



4. 包含層出土遺物



5. SD10 出土遺物 (1)



SD10 出土遺物(2)

58



59



54



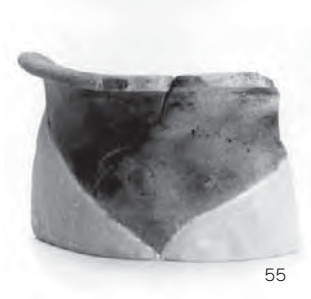
53

51



52

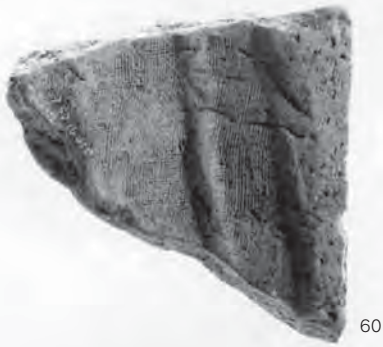
57



55



56



60



61

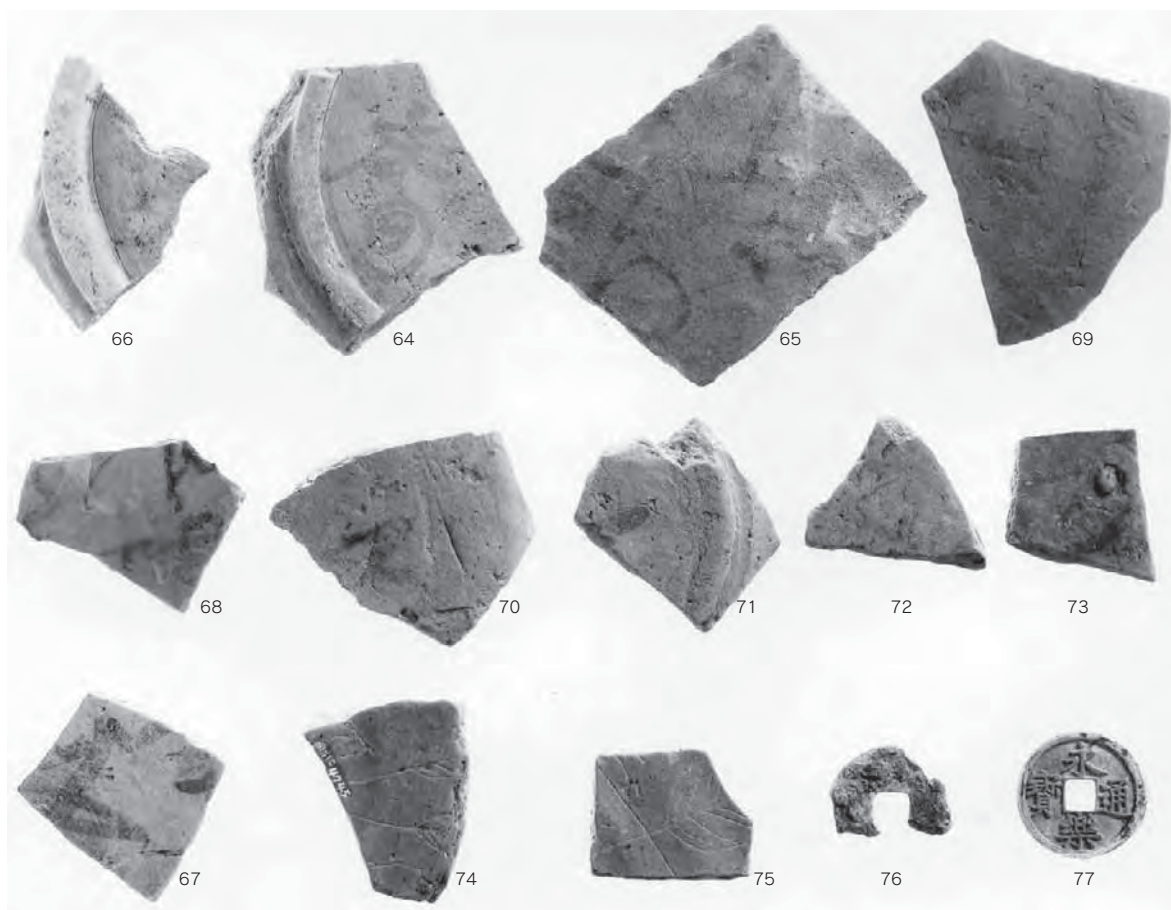


62



63

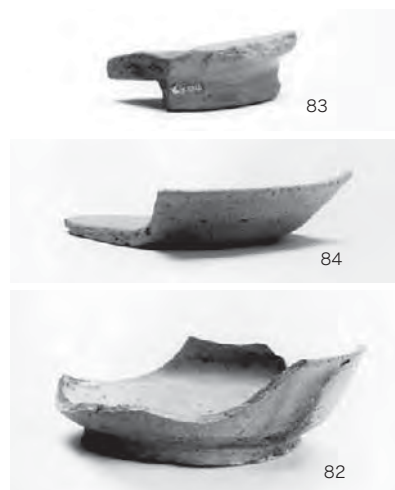
SD10 出土遺物 (3)



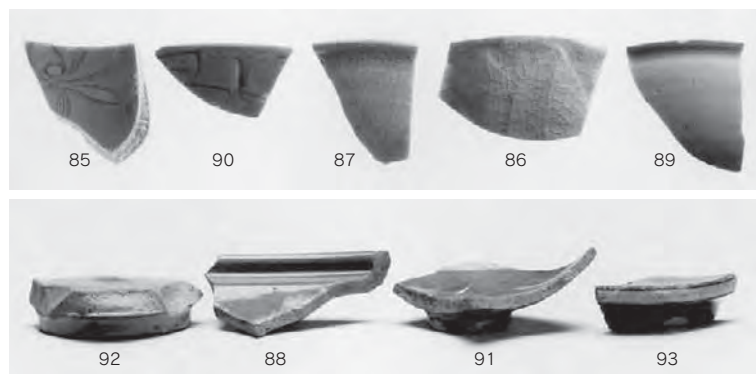
1. SD10 出土遺物 (4)



2. SX03 出土遺物



3. SD09 出土遺物



4. SD14 出土遺物



5. SX15 出土遺物

あとがき

平成9年度に発掘調査を実施した瀬戸口横穴墓群と深川遺跡の報告書が完成しました。

猛暑の中での発掘調査の段階から、地道な作業を続けていただいた整理報告書作成作業において、たくさんの方々にお世話になりました。ここに、そのお名前を記すことにより、感謝の意を表したいと思います。

荒牧陽子、池上祐樹、池田清一、池田正勝、池田正喜、井上イツ、岩下武子、岩下富士子、上田スミ子、内村定之、江島園子、江原浩司、岡本秀樹、木村アサ子、木村義徳、窪田澄子、古河親子、後藤則夫、材津幾代、坂本絹子、佐藤和子、佐藤眞一、佐藤松男、関 一王、高宗栄子、高宗君子、高宮妙子、高宮澄子、高宮 誠、高宗トミ子、高宗好道、高本ミチ子、立野トシエ、田中正文、田辺幸子、荅 ヨシメ、徳永英祐、徳永 明、富岡静香、西川 剣、西山真理子、林トヨコ、林 洋一、原 慎吾、福山須美子、堀田靖子、堀田さわ、本田チズ子、本田久子、本田睦男、益田秋吉、益田久子、益田ヒロコ、松岡美恵子、松永軍平、三宅広次、矢島エイ子、山内洋子、横田愛子

報 告 書 抄 録

| | |
|-------|---------------------|
| ふりがな | せとぐちよこあなぼぐん ふかがわいせき |
| 書名 | 瀬戸口横穴墓群 深川遺跡 |
| 副書名 | 単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査 |
| シリーズ名 | 熊本県文化財調査報告 |
| シリーズ号 | 第193集 |
| 編集者名 | 帆足俊文 |
| 編集機関 | 熊本県教育委員会 |
| 所在地 | 〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号 |
| 発行年月日 | 2001年3月31日 |

| 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 ° / ' / '' | 東経 ° / ' / '' | 調査 期間 | 調査 面積 | 調査 原因 |
|---------|----------------------|-----|----------|------------------|------------------|------------------------------|----------|-----------------------------------|
| | | 市町村 | 遺跡 番号 | | | | | |
| 瀬戸口横穴墓群 | 菊池郡七 城町台 | 401 | 4 | 32° 59' 00" | 130° 45' 45" | 平成8年7月10日 ～ 平成8年8月31日 | 500 | 熊本菊鹿 線単県道 路改良 |
| 深川遺跡 | 菊池市深 川・大淋 寺・西寺 | 210 | 75 | 32° 58' 04" | 130° 48' 03" | 平成8年6月10日 ～ 平成9年10月31日 | 3000 | 植木イン ター菊池 線緊急地 方道路整 備 |

| 所収 遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|-------------|-----|----------|---------------------|------------------------|------|
| 瀬戸口横 穴墓群 | 墳墓 | 古墳時代 | 横穴墓 | 鉄鏃 馬具 耳環 ガラス玉 | |
| 深川 | 包蔵地 | 古代 中世 | 掘立柱建物 竪穴式住居 溝 | 土師器 須恵器 青磁 | |

熊本県文化財調査報告 第193集

瀬戸口横穴墓群 深川遺跡

平成13年3月31日発行

編集・発行 熊本県教育委員会

〒862 - 8609 熊本市水前寺6丁目18番1号
096-381-9211

印刷 株式会社 新日本印刷

〒861 - 4109 熊本市日吉2丁目12番32号
096-358-1151

12 教委 教文

② 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 193 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：瀬戸口横穴墓群 深川遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日